国立環境研究所研究報告　第 156 号　ISSN 1341-3643
Research Report from the National Institute for Environmental Studies, Japan, No.156, 2000

R-156-2000

通勤形態も考慮にいれた居住と勤務の環境に関する意識の解析

Analysis of the Awareness of Workers on the Environment at Home and in Office Taking into Account the Commuting Circumstances

大井　紘・須賀伸介

Ko OI and Shinsuke SUGA

NATIONAL INSTITUTE FOR ENVIRONMENTAL STUDIES

環境庁　国立環境研究所

国立環境研究所研究報告　第 156 号　　ISSN　1341-3643
Research Report from the National Institute for Environmental Studies, Japan, No.156, 2000

R-156-2000

通勤形態も考慮にいれた居住と勤務の環境に関する意識の解析

Analysis of the Awareness of Workers on the Environment at Home and in Office Taking into Account the Commuting Circumstances

大井　紘・須賀伸介

Ko OI and Shinsuke SUGA

NATIONAL INSTITUTE FOR ENVIRONMENTAL STUDIES

環境庁　国立環境研究所

目　　次

目　　次		1
は　じ　め　に		3
第１章	調査の方法	4
第２章	回答の解析と解釈	6
２．１．	回答者の属性：年齢・性別・職種・住居など	6
２．２．	通勤に関すること	25
２．３．	健康にかかわること	40
２．４．	空いた時間の使い途	49
２．５．	通勤時間の考慮と住居の選択との選択	54
２．６．	迷惑・不快・気になる音	63
２．７．	通勤途上で感じる困難・迷惑・不快なこと	72
第３章	考　　察	75
お　わ　り　に		78
引　用　文　献		79
【付　　録】	調　査　票	80

はじめに

居住環境がよいとか悪いとかいうことを、たんにそれぞれの住居のあるところの保健性とか快適性とか周辺の利便性とかいうことで評価して、それですむのだろうか。そこに居を構えるのには、その人の来歴にも規定されるだろうし、先立つものの制約にもよるのだろう。それにしてもまさかいまさら、誰かがそこに住むのは、その人がそこを選んだのだからその人の選好の帰結であり、従ってそこの環境がその人にとって最善なのだという論を立てるものはいるまい。

生活をたてていくためには、日々の「稼ぎ」がいるのであって、そのためには当節は多くの人はどこかに職場をもつことになる。そのことは、職場選択の問題もおこすし、住居の選択の問題もおこすことになる。大都市の中心部に職場をもてば、その近くに住居を求めることは多くの場合は、経済的な理由で難しいだろうし、緑地スペースや閑静さや大気の清浄さをも得ようとすれば、ますます難しくなる。そうして、都心を離れたところに住居を構えるとすれば、通勤が長時間化するだけではなく、ラッシュアワーの混雑は痛勤という言葉を生んだほど深刻なものである。

職場での長時間の人間関係も含めたストレスに満ちた時間の仕事に加えて、満員電車での長時間勤務の果ての、残された時間をその人は自宅で過ごすことになるのだ。だから、職場あるいは職業と通勤と自宅住居とは、その人の環境を考えるうえで密接不可分な関係にあるといえる。いいかえれば、居住地の快適環境についての議論をかさねても、それだけでは生活も環境も見えてこないことになる。あるいは、生活ぬきの環境談義ということになるだろう。

そのような視点から、以下では東京の都心のオフィスに勤める人々の通勤と住居との実態をアンケート調査して、通勤を軸とした住居と職場とも含めた意味での生活の環境を明らかにしようとする。

第１章　調査の方法

調査の対象となったのは、丸の内にある或る金融機関の従業員である。

１．１．従業員と職種

その金融機関は、従業員７００～８００人であって、内訳は総合職：４７０人、事務職：２９７人（計：７６７人）、ほかに業務職が少数であった。さらに、ほかに運転手などの職があるがこれははじめから考慮外とした。

職種の説明をするなら、総合職は、住居の変わる転勤がありえて、採用時の通勤時間制限はなく、社長までの昇進の可能性はあるものであるという。そのうち、女性は１割いない。そうして、女性の場合はじめ総合職になっても、続かないことがよくあるという。事務職は、住居の変わらない転勤があり、仕事は補助的であるという。そうして、採用時の通勤時間制限は、1.5時間が目途であるという。現実には、女性のみであるとのことであった。業務職は、住居の変わらない転勤があり、課長くらいまでなりうるという。これは、事務職が試験を受けて昇任する新卒採用をしないもので、給与体系が事務職と違うという。

従業員への持ち家政策としては、社による低利融資があり、財形貯蓄を利用させることもしているという。また、業務として不動産提携に際する情報が社員に入りやすいとのことであった。

社宅・独身寮については、社宅は東京では利用者は少なく、独身寮は希望者全員の入居が可という。

１．２．調査票の配布と回収

調査は質問紙を従業員に配布して、回収することによった。

調査票数は、４９６であった。内訳として、総合職：２８９(58.3%)、事務職：２０７(41.7%)であった。業務職のものは少数なので配布していない。のちに見るように、職種を業務職と回答したものが１名いたが、これは誤記と考えられるので、集計をするときは無視した。

調査票の配布と回収の方法は、次のようであった。配布は同社の各部で各人に渡してもらった。配布対象は、同社のなかのセクションをいくつか選定し、セクションに所属する総合職と事務職との全員とした。調査票の回収は郵送によった。回収を郵送とすることによって、回収のための会社の負担をなくした。また、回答者が好きなときに記入し、返送できることとなった。回答を記入した調査票が返送用封筒に封入とするにしても会社を経由しないことによって、回答しなくても社には知られないうえに、なにがしかの被管理感は除けたであろう。

調査票配布日は、１９９２年９月２４日であった。１０月１５日に回収率が70%強に達していたが、１０月２０日の同社の部長会議で未回答者は回答するよう伝える旨、総務部長から話があった。日別の回収数からして、これによる回収増加数は最大にみて５票である。回収総数は、３７１票であった。これは、回収率：74.8%ということになる。上記の理由から、そのうち１票は集計対象から除外したので、次章以下に結果が示される集計されたものは３７０票である。この除外することやむなしとした票以外は、すべてが有効票

であったわけで、その比率は極めて高いというべきだろう。回収経過としては、着信はじめが9月２８日、着信おわりが１２月２８日（ただし、３７０票目は１１月２日）であった。回収された票のほとんどが、１ヶ月以内に到着したことになる。

調査票の設問の内容は、次の章で主題ごとに集計結果とともに関係する部分を逐次示すが、その全体を付録に掲げた。

第２章　　回答の解析と解釈

２．１．　回答者の属性：年齢・性別・職種・住居など

まず、回答者の年齢分布や性別分布や職種、さらに住居の事情を見ていく。住宅地域の調査と違って、会社の社員に対する調査においては、これらの普通フェースシートの質問事項といわれることの分布がかなり鋭い差異を示すのでそれを先に見ておく方が調査への回答を解析していくうえで分かりやすいと考えられる。そうして、これらフェース事項の回答分布を踏んだ上で、通勤の形態や職場における様子あるいは住居への考え方などのいわば実態的なことがらについての回答を検分していくと、それらの回答の意味するところが明瞭に浮かび上がってくるだろう。

２．１．１．職種と性別の年齢分布

「職種と性別の年齢分布」を図１に示す。この職場では職種も性別も年齢によって、明確に比率を異にすることが分かる。また、基本的に、この職場では、男性：総合職・女性：事務職となっているといえよう。

総合職・事務職を併せれば、おおよそ年代にしたがって人数が漸減しているといえる。

ところが、総合職の人数が最大になるのは４０歳代なのに対して、事務職は２０歳代で回答者全体の３分の１近くを占めるのに、３０歳代で激減して、以降横這いになる。

総合職には女性もいるが、２０歳代に４人であるのに対して、３０歳代、４０歳代に各１人であって、５０歳代皆無である。同所で聞き取りをした際にも、「総合職は女性は１割いない。女性の場合はじめ総合職になっても続かないことがよくある」ということだったが、このグラフでもそのことは読みとれる。また、同じ聞き取りで「事務職は現実には女性のみ」とのことだったが、このグラフと一致する。

なお、有効回収３７０票のうち、総合職２１８票：58.9 %、事務職１５２票：41.1 %であって、ほぼ調査票を配布した人数比と一致している。

２．１．２．在籍年数の分布

入社してからの在籍年数の分布を図２にみる。在籍年数の分布は年齢分布と、かなりよい対応をしているし、新卒者を採用しているとすれば、それはありうべきことである。

グラフでは、質問紙での区分のままに　１年未満、１～５年未満、５～１０年未満を分けて表示している。１年未満では事務職が総合職に比較して圧倒的に多い。１～５年未満が図１の年齢別の２０歳代の比率とほぼ同じであって、５～１０年未満では両職種ほぼ同数となっている。あとは、１０～２０年未満が年齢別での３０歳代に、２０～３０年未満が４０歳代に両職種の人数・比率ともほぼ同じである。３０年以上在職のものは急激に減少するが女性も事務職も皆無となっている。

２．１．３．年代別居住年数

いま住んでいる家について、住んでいる年数と年齢との関係をみる（図３）。

質問は、「いま、住んでおられる家についてお答えください。」と述べたあとに、家の所在地についての質問に続けて、「いま住んでおられる家に移られてから、何年になりますか。」としたものである。

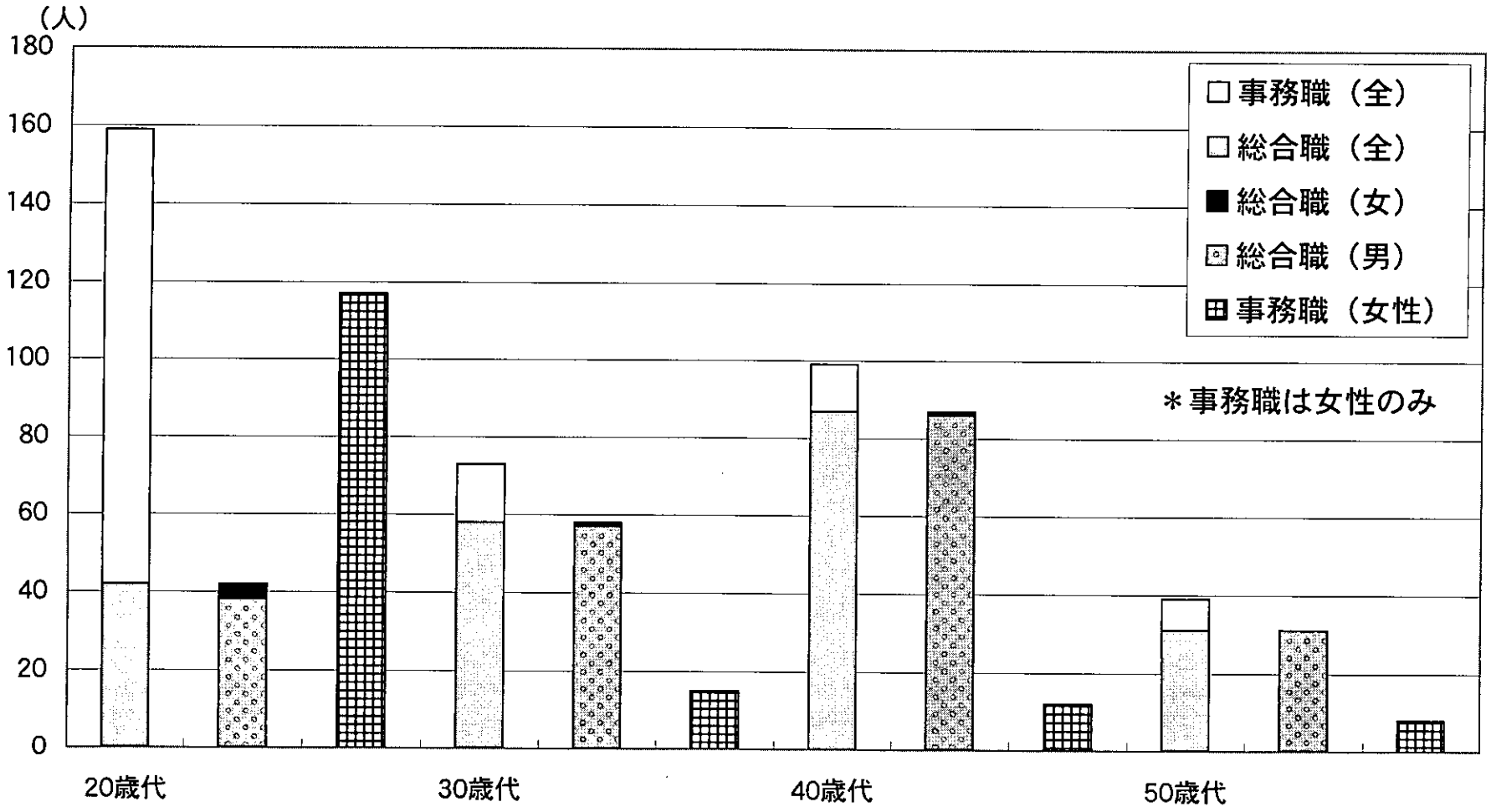


図1　職種と性別の年齢分布（370人中）

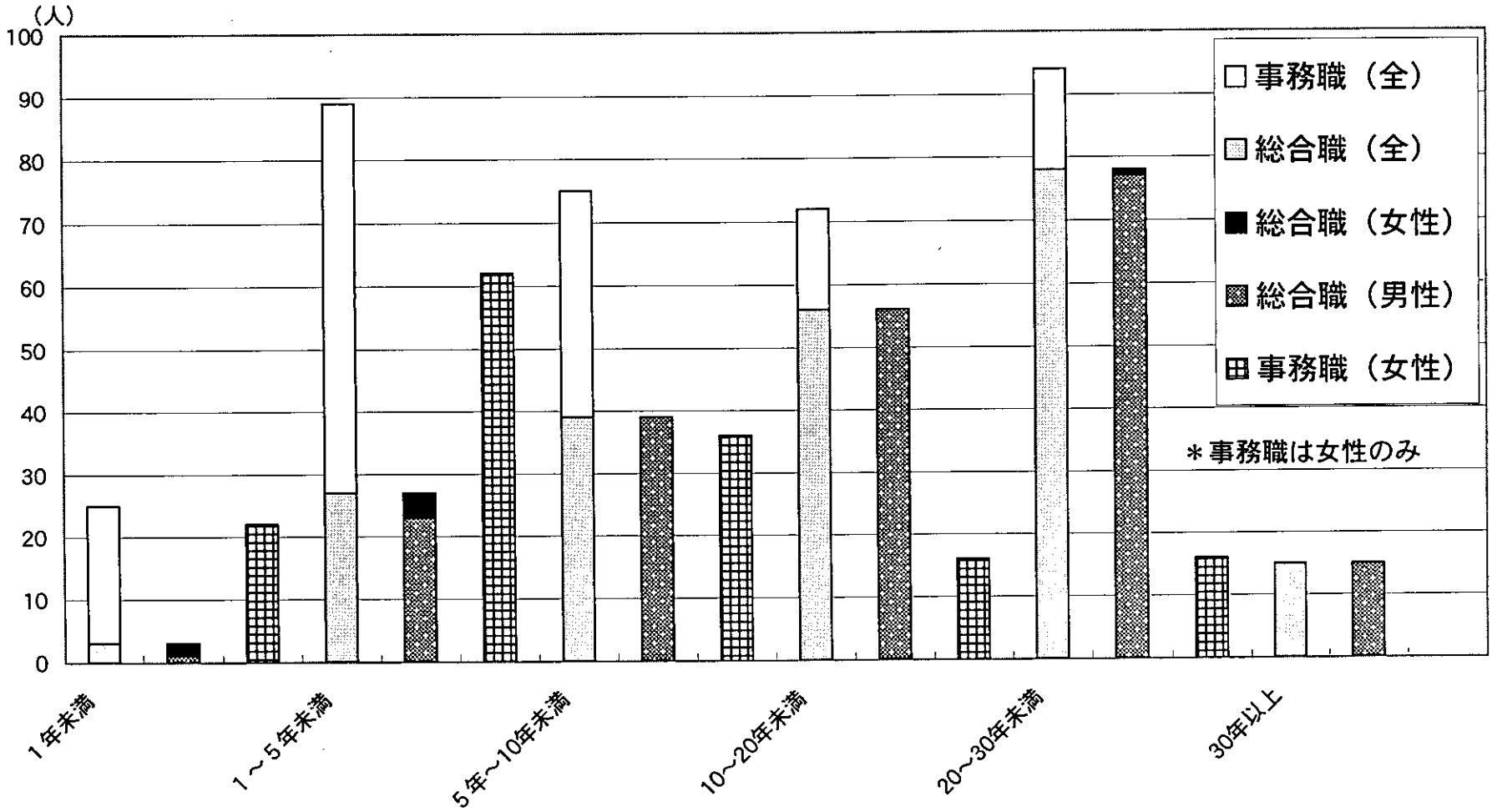


図2　在籍年数の分布（370人中）

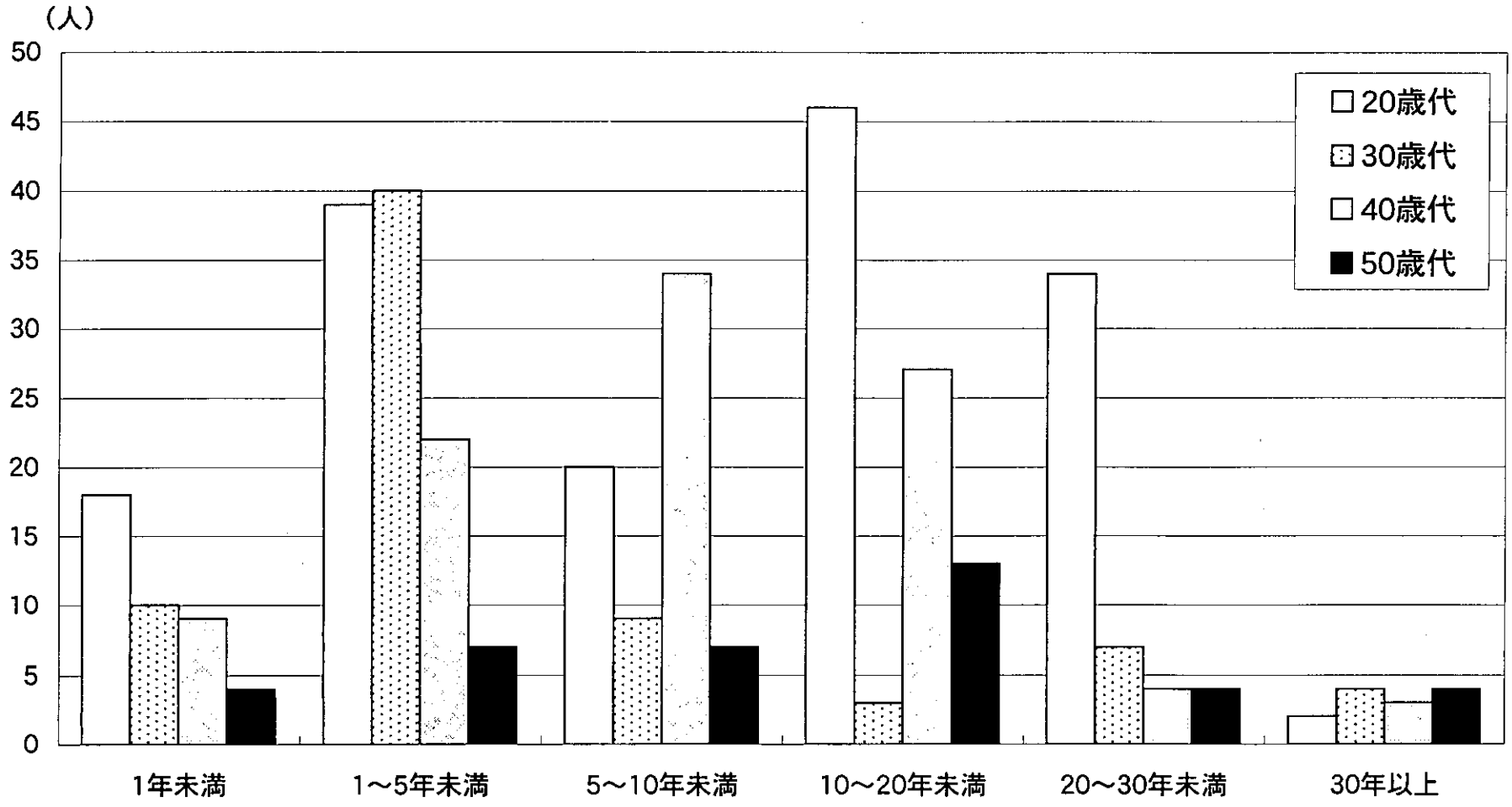


図3　年代別居住年数（370人中）

回答を、質問紙上の選択肢そのままに集計した。２０歳代のものは、１年未満と１年～５年未満を足した人数と１０年～２０年未満、２０年～３０年未満とが多く、二山になっている。これは、就職などで住居を変えたものと、親のところにそのまま住んでいるものとで出来た山であろう。もっとも、居住した年数について比較するときに、各グループの居住年数の幅を同じにするように、１０年未満の人数をひとくくりにしてみると、２０歳代のものにおいて、居住年数が長いものの数は、年数にしたがって漸減していくことになる。３０歳代は、１年未満と１年～５年未満を足した人数が最大で、以降はどの年数区間も人数は多くはない。これは、結婚または持ち家を持ったことによる移転の結果が利いているのであろう。４０歳代は、５年～１０年未満と１０年～２０年未満のところで山をつくる。すなわち、３０歳代のもののピークが図の上で右にズレて二つの年数区分に分散しているといえよう。さらに、５０歳代のものは、これが右にズレて２０年～３０年未満のところに明瞭なピークをつくることになったとみられる。もっとも、年数長さを同じにするように、１０年未満の人数をひとくくりにしてみると、４０歳代でも５０歳代でも１０年未満の人数が最大であって、結局、どの年齢層においてもいまの家に住んでいる期間は１０年未満にピークがあって、年数が長くなるにしたがって尾がどれだけ急に細くなるかだけの違いになっていることになる。

２０歳代のものにも、３０年以上のところに数人あるのは、質問文で「いま住んでおられる家に移られてから」といっているので、親の代から数えた答をしたものであろう。同様の事情で２０年～３０年未満と回答したものもいると考えられる。

ここで見たように、年代が違ってもいまの住居に移ってからの年数は、みなほぼ右下がりになるという意味で１次的特徴は共通していたわけである。その右下がりがどれだけ急に起きるかという意味で２次的な特徴を観察すると、年代間の相違が明らかに読みとれることになる。

２．１．４．結婚歴による居住年数

結婚によって新居を構える、ということは当然ありうるので、結婚歴といま住んでいる住居の居住年数との関係を調べた（図４）。

「未婚」と回答したものについては、１年未満と１年～５年未満を足した人数と１０年～２０年未満、２０年～３０年未満とが多く、このパターンは、おおよそ図３「年代別居住年数」における２０歳代のもののパターンと似ているといえる。これは、若年層に未婚者が多いだろうという常識的なことにより説明できる。「既婚」と回答したものについては、１年未満と１年～５年未満を足した人数が最多である。年数長さを同じにするように１０年未満の人数をひとくくりにしてみると、それ以降にくらべて、圧倒的に多いことが見て取れる。結婚にともなって住居を変えたということが多いだろうということと整合する。もちろん、結婚後同じ住居に住み続けるものもいるわけで、それが１０年～２０年未満のところにかなりまとまった人数となって現れているとみられるだろう。２０年、３０年以上のところで未婚者の方がはるかに多いのは、前項の「年代別居住年数」で見たように、親の家に住んでいるものがある程度の人数いるからで、既婚者はあとで別の表にみるように、親との同居が少ないため、いま住んでいる家の居住年数の長いものは多くないのである。

なお、結婚歴についての設問は、「あなたの結婚歴は」としたうえで、「未婚」と「既

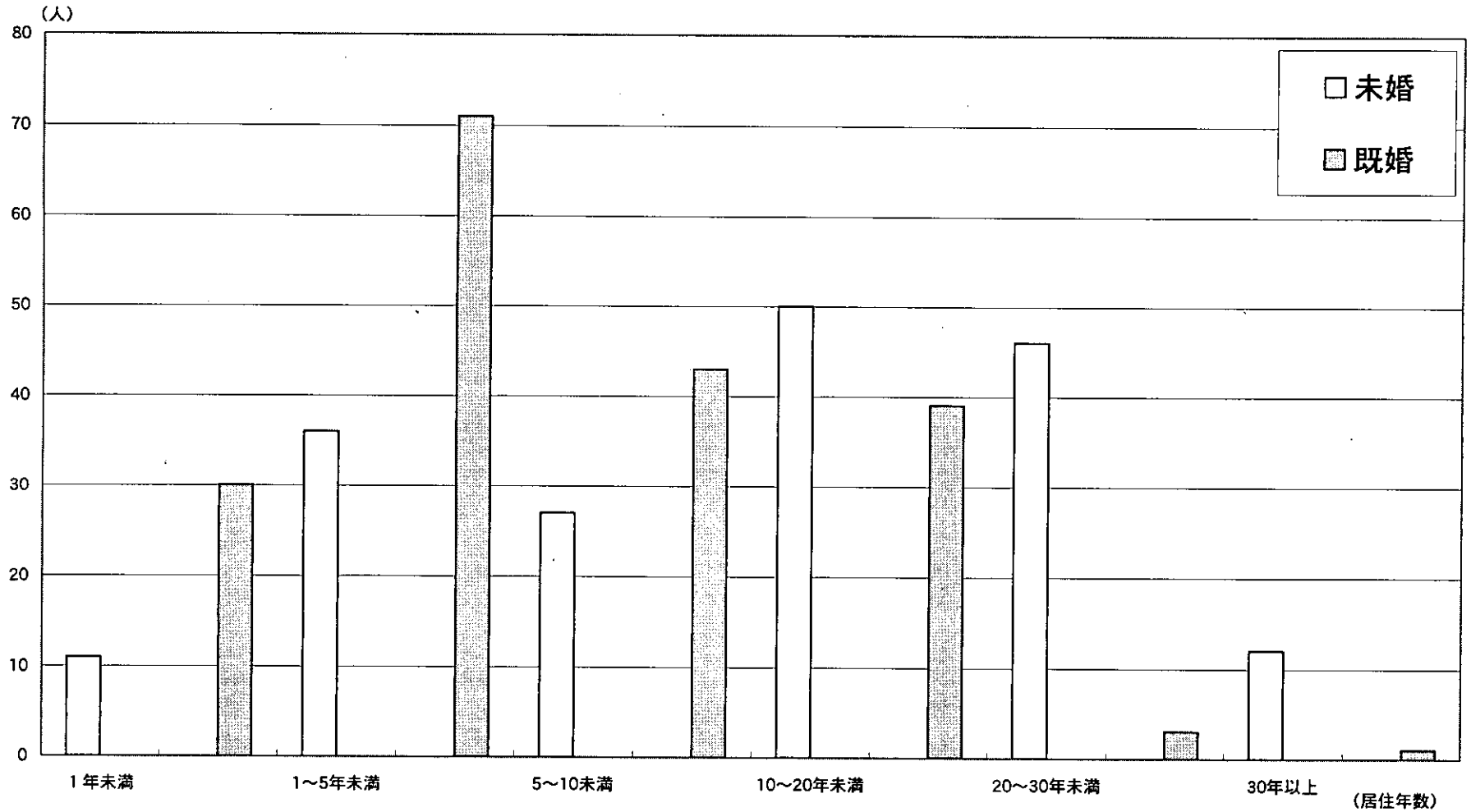


図4　結婚歴による居住年数（370人中）

婚」との選択肢から選んでもらった。選択肢を「結婚歴なし」「結婚歴あり」とした方が質問の意味が明確になったという批判もありうると考える。一方、「未婚」「既婚」の方が日常的表現だという見方もあるだろう。

２．１．５．職種別結婚歴

表１に纏めたように、総合職と事務職とを合わせれば、ほぼ未婚者と既婚者との比率が同じである。職種を分けて集計すると、未婚と既婚との比率がこの二つの職のあいだで対照的なことが歴然とする。特に、事務職における既婚者の割合がきわめて低いといえよう。

２．１．６．親との同居

これについては表２に示した。未婚と答えたもののうち、８割近くが自分の親と同居していると答えている。既婚と答えたもののうち、親との同居をしていないと答えたものが９割を越えている。すなわち、核家族化が顕著だということになる。

「職種と性別の年齢分布」（図１）にみたように、未婚者の多くが２０歳代の事務職（全員女性）であってみれば、親との同居が多いのは彼女らの存在によると見ていいだろう。

２．１．７．同居家族人数

図５に示したように、既婚者のなかにも若干の１人居住者がいて、４人をピークにして、あとは急減する。総数が既婚者と同程度である未婚者では、１人居住は既婚者の２倍以上いる。２人居住は少なく３人、４人と増加する。以下は急減する点では、既婚者と同じになっている。６人以上の家族というものは、非常に少ないということになる。

既婚者と未婚者では、人数が同じであっても家族構成が違うことは想像に難くないが、前項の「親との同居」をみると、截然と分かれていることがわかるのであった。

２．１．８．同居している子供の数（既婚者のみ）

図６を図５とを比較すれば、ほとんど、同居家族数の既婚者についてのグラフの３人から５人を、１人から３人に移し、おなじく１人と２人の人数の和を「なし」に移したものになっていることがわかる。ここにも、核家族化がみてとれる。

２．１．９．職種別居住地域

「今あなたの住んでおられる家はどこにありますか。」として、図７中に示した３つの選択肢から選んでもらい、さらに、それぞれ区名・市名・町村名を記入してもらった。

図７に示すように、東京都区部と近辺の政令指定都市に住む者が、事務職ではもっとも多く、総合職でもその他の市と同程度の人数がいる。東京都区部と近辺の政令指定都市に住む者は、両方の職をあわせれば、370人の半分になる。

政令指定都市以外の市、町村になるにしたがって、総合職のものに対する事務職のものの比率が小さくなり、町村では事務職のものの居住はナシとなっている。あとでみるように、事務職のものと総合職のものとのあいだで、通勤時間の分布はほぼ同じであるので、この相違の由来は通勤時間の差異の反映とはいえない。むしろ、総合職のものが持ち家をもつことになったときの住宅取得のさいの地価の情勢のよるとも考えられよう。

２．１．10．都県市別居住地域

東京都全体で過半をしめ、これに隣接県を加えると、ほとんど全部となる（図８）。

２．１．11．年代別居住地域

これを図９にみる。３０歳代については、政令指定都市以外の市の割合が最大になっているが、この年代は「年代別居住年数」（図３）に見たように、いまの住まいに移ってか

表１　職種別結婚歴

人数（　）中は％

	両職	総合職	事務職
未婚	182（49）	42（19）	140（92）
既婚	187（51）	176（81）	11（ 7）
合計	370	218	152 ＊

＊無回答１名を含む

表２　親との同居

人数（　）中は合計欄の数値に対する％　　（370 人中）

	同居なし	自分の親	配偶者の親	無回答	合計
未婚	38（21）	142（78）	0（0）	2（0）	182
既婚	174（93）	6（3）	4（2）	3（2）	187
無回答	1	0	0	0	1

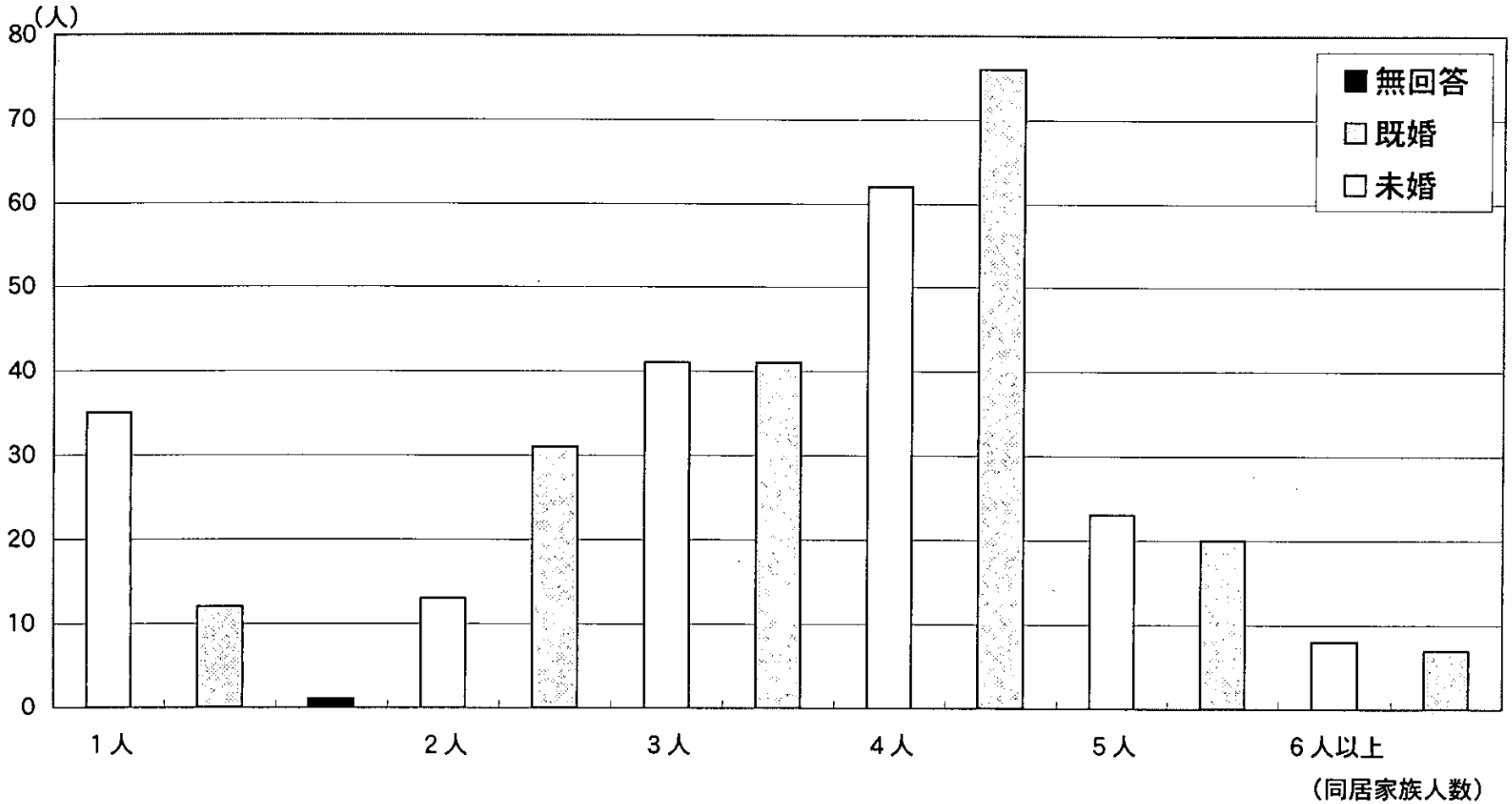


図5　同居家族数（本人を含む、370人中）

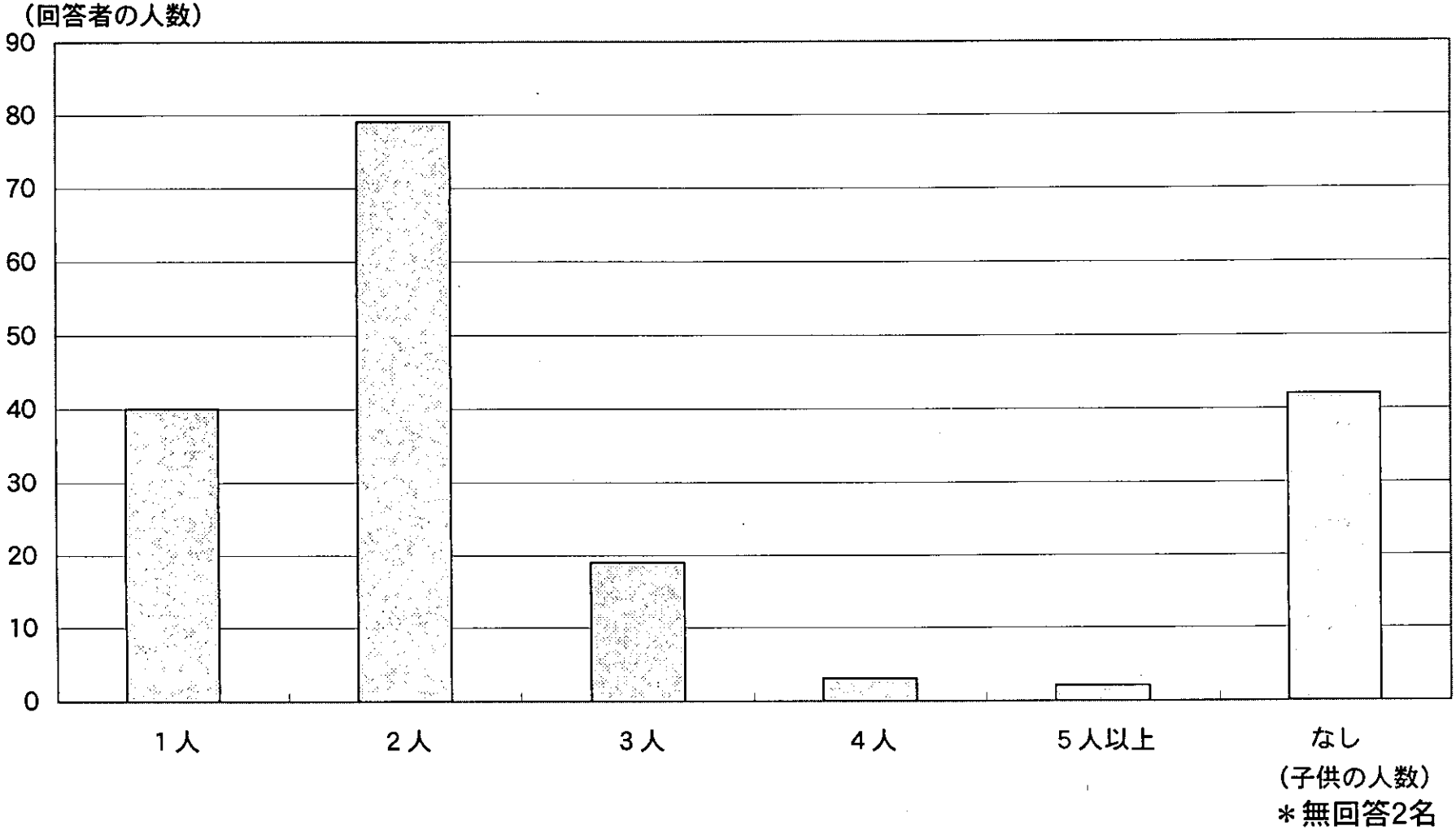


図6　同居している子供の数（既婚者187人中）

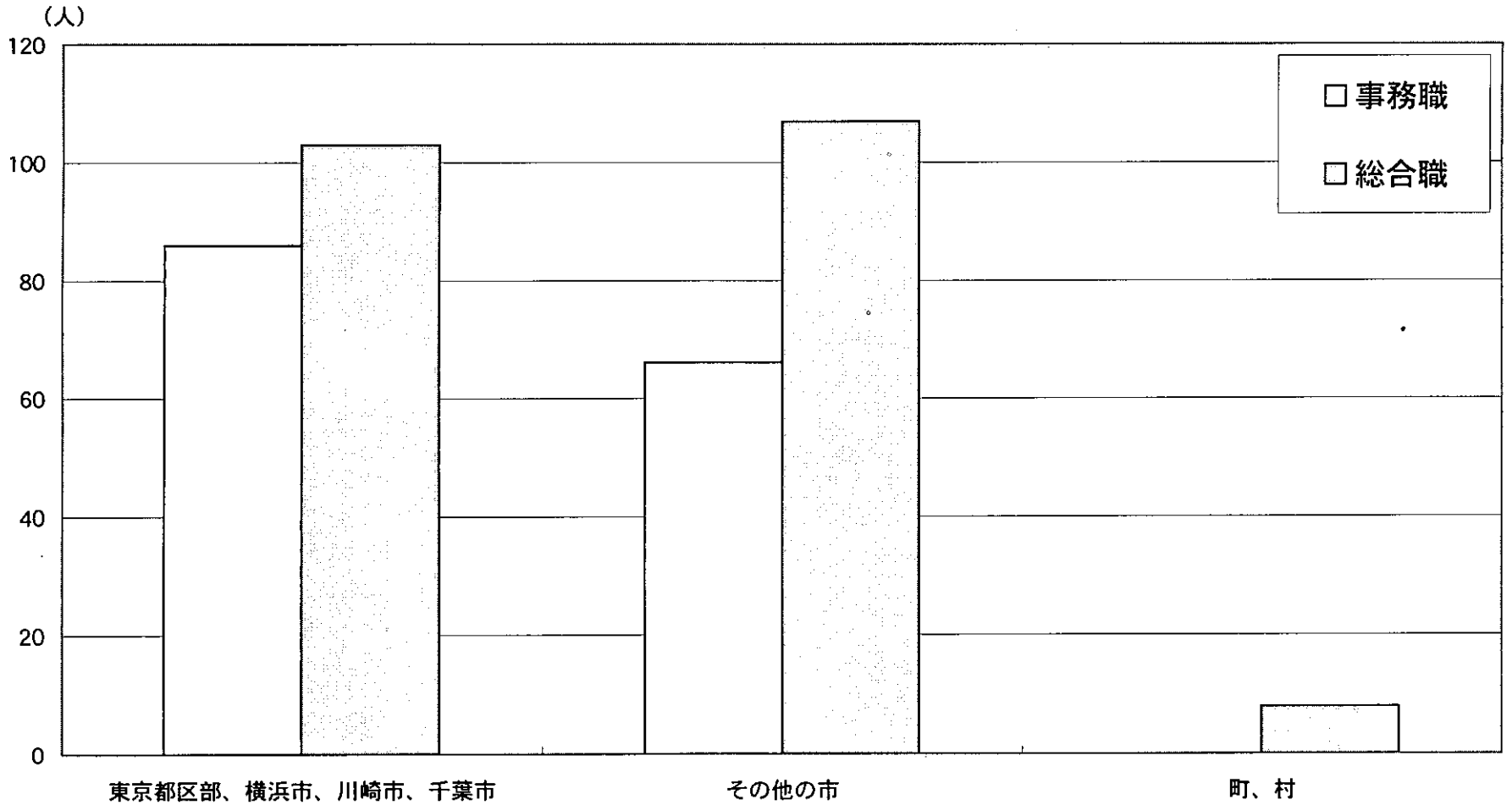


図7　職種別居住地域（370人中）

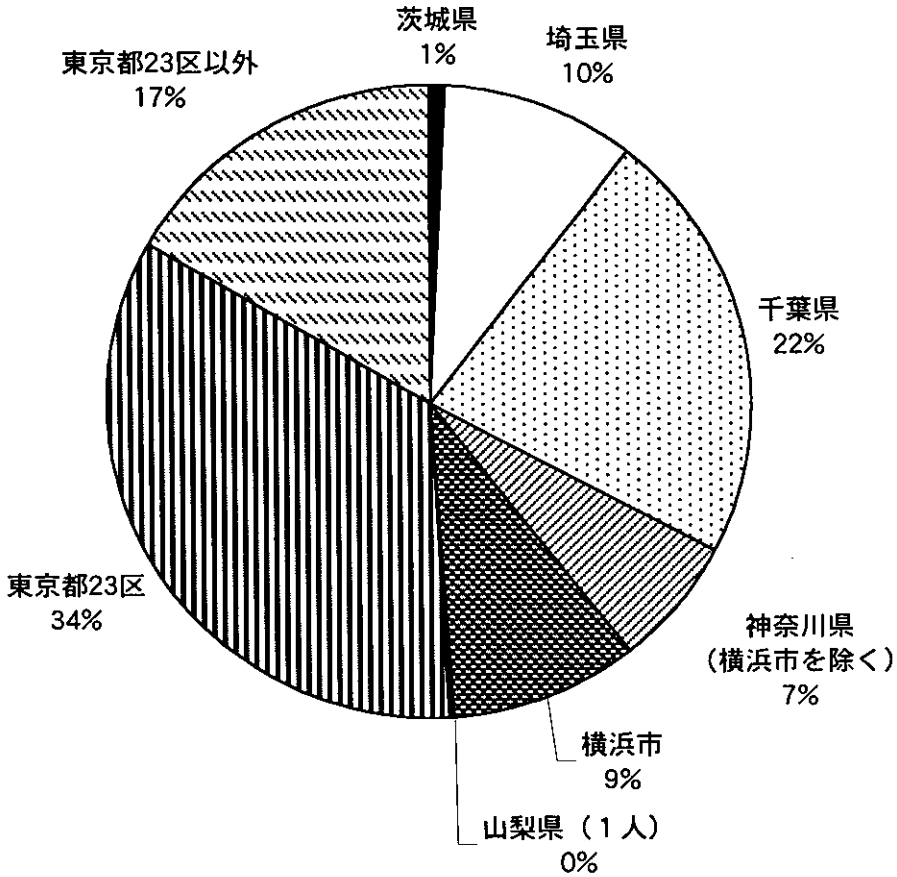


図8　都県市別居住地域（370人中）

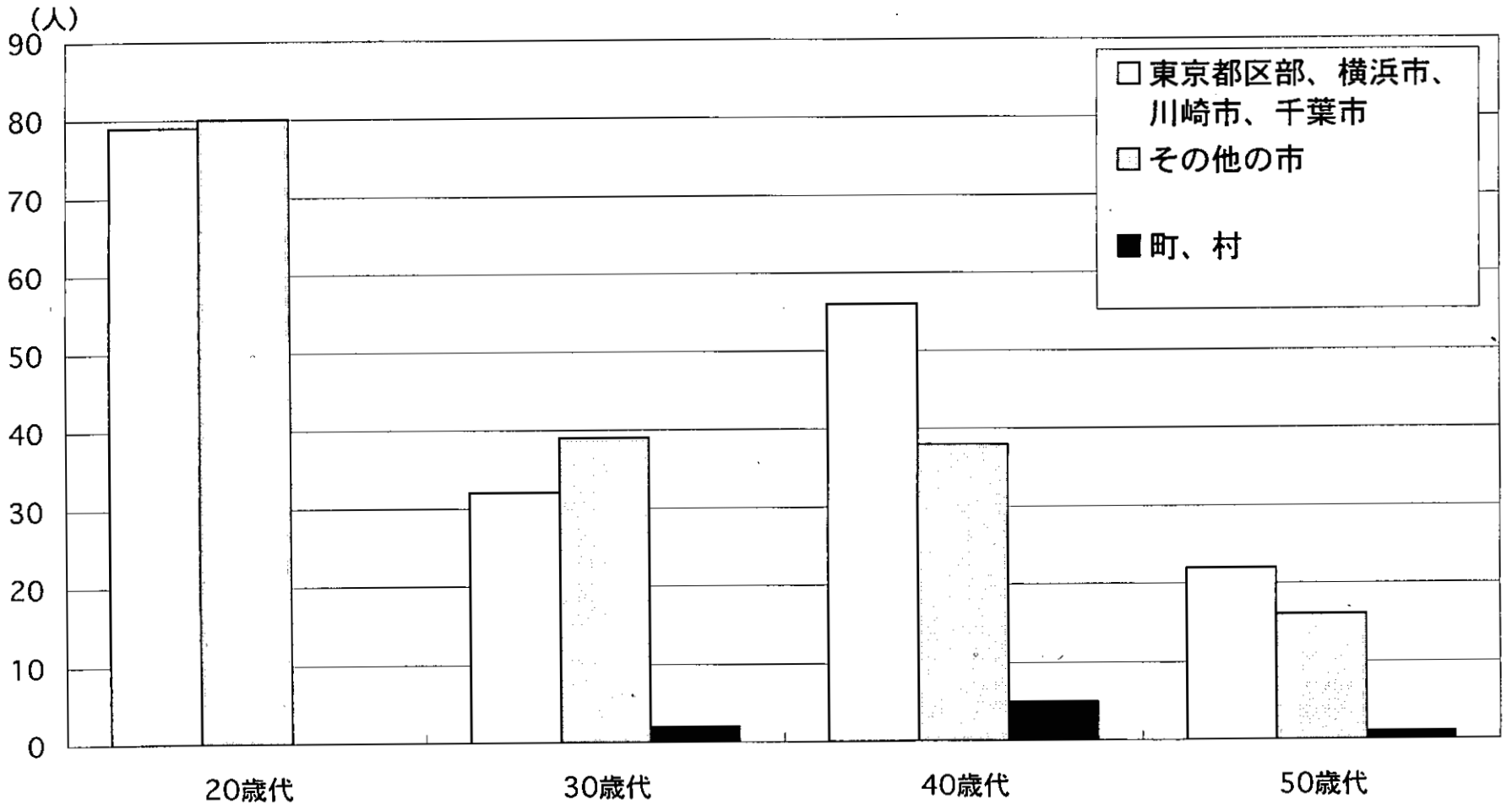


図9　年代別居住地域（370人中）

らの年数が５年未満のものが非常に多いことから、調査時点とその前の首都圏の地価情勢との関係は想定しておいていいだろう。

４０歳代と５０歳代とでは、東京都区部と政令指定都市が最大である一方、町村居住者もいることになる。

２．１．12. 家の所有形態

家の所有形態を未婚者－既婚者（図１０、１１）、事務職－総合職（図１２、１３）の対比として集計した。所有形態といってもここでは、いま住んでいる家のことである。

すなわち、「いま住んでおられる家はどれにあたりますか。」という設問の選択肢としてまず「持ち家」をあげ、これにはさらに a)あなた本人のもの、b)あなたの配偶者のもの、c)あなたの親のもの、d)あなたの配偶者の親のもの、e)その他の５項目をおき、「持ち家」以外の形態にたいする選択肢として「社宅」、「公営・公社・公団などの借家」（図の中では「借家（公）」としているもの）、「民間借家（アパート・貸間も含む）」（図の中では「借家（民間）」と記しているもの）、「その他」（図の中でたんに「その他」とあるもの）をおいて、そこから選んでもらった。また、図の中で「持ち家（共有・親）」とあるものは、a)と c)とに、また「持ち家（共有・配偶者）」とあるものは、a)と b)とに、○印がつけられたもののことである。

事務職には未婚者が多く（92 %）未婚者のうち事務職は77 %であり、また、総合職には既婚者が多く（81 %）既婚者のうち総合職94 %であるという事情があったので（「職種別結婚歴」（表１））、事務職と未婚者、総合職と既婚者がかなりよい対応をすることは予想できる。

未婚者についてみると、63 %が親の持ち家であって、本人の持ち家は4 %にすぎないが、既婚者においてはこれが逆転して54 %が本人の持ち家であって、親の持ち家は２ %にすぎない。また、既婚者においては、未婚者にくらべて、社宅、公的な借家、民間の借家のどれかに住んでいるものの割合が目立って大きい。

一方、事務職では実に68 %が親の持ち家であって、本人の持ち家は４ %になっていて、総合職では逆に本人の持ち家比率が高くて49%で親の持ち家は５ %である。社宅、公的な借家、民間の借家のどれかに住んでいるものの割合は、事務職では合わせて21 %であるのに対して、総合職では40 %で、特に社宅に入っているものの比率が事務職の４倍近いことになる。

上記について顕著なのは、４通りの集計について比較するとき、親の持ち家に住んでいる比率がもっとも高いのが、事務職であって、本人の持ち家の比率がもっとも高いのが既婚者である。これは、「職種別結婚歴」の表にみるように、事務職に既婚者が少ないという事情と、総合職が結婚すると自分の持ち家を持つようになるという事情の反映といえよう。

２．１．13. セカンドハウス

「今お住まいの家と別に家をお持ちですか。あてはまるものにはいくつでも○印をおつけ下さい。」として、選択肢として、つぎの６項目をもうけた。

１．別荘のような保養のためのもの
２．居住のための家を他の地方に
３．居住のための家を今の通勤圏内に

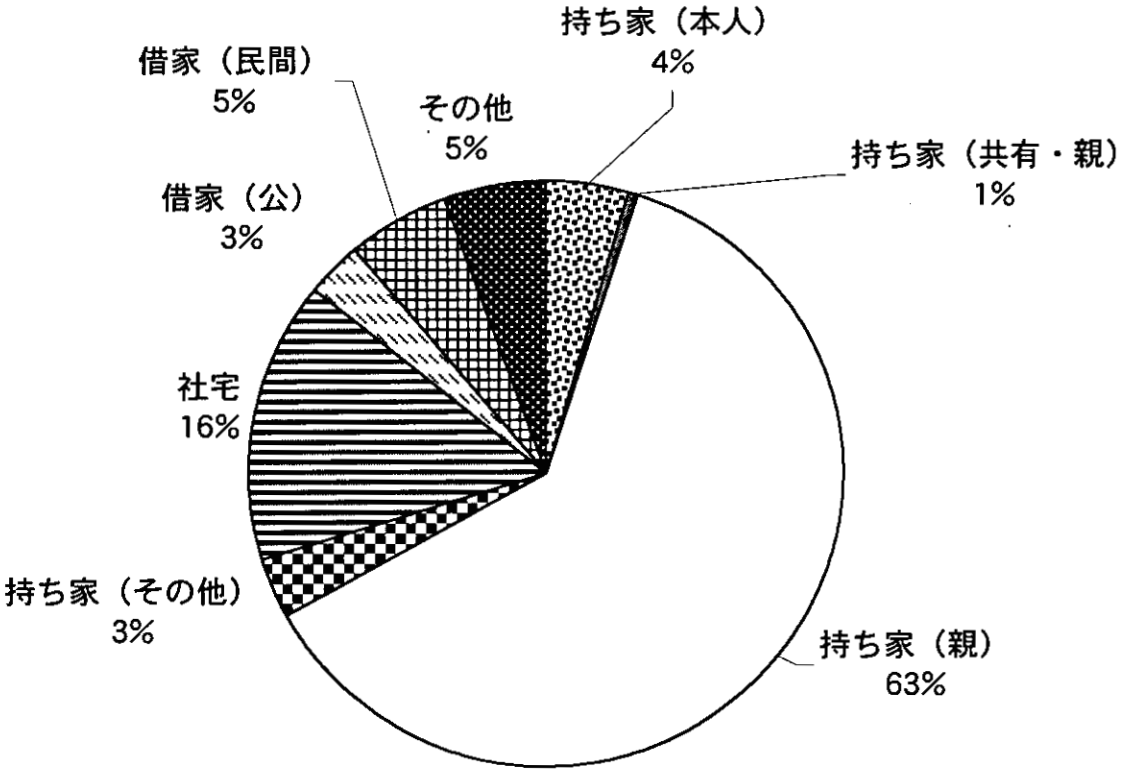
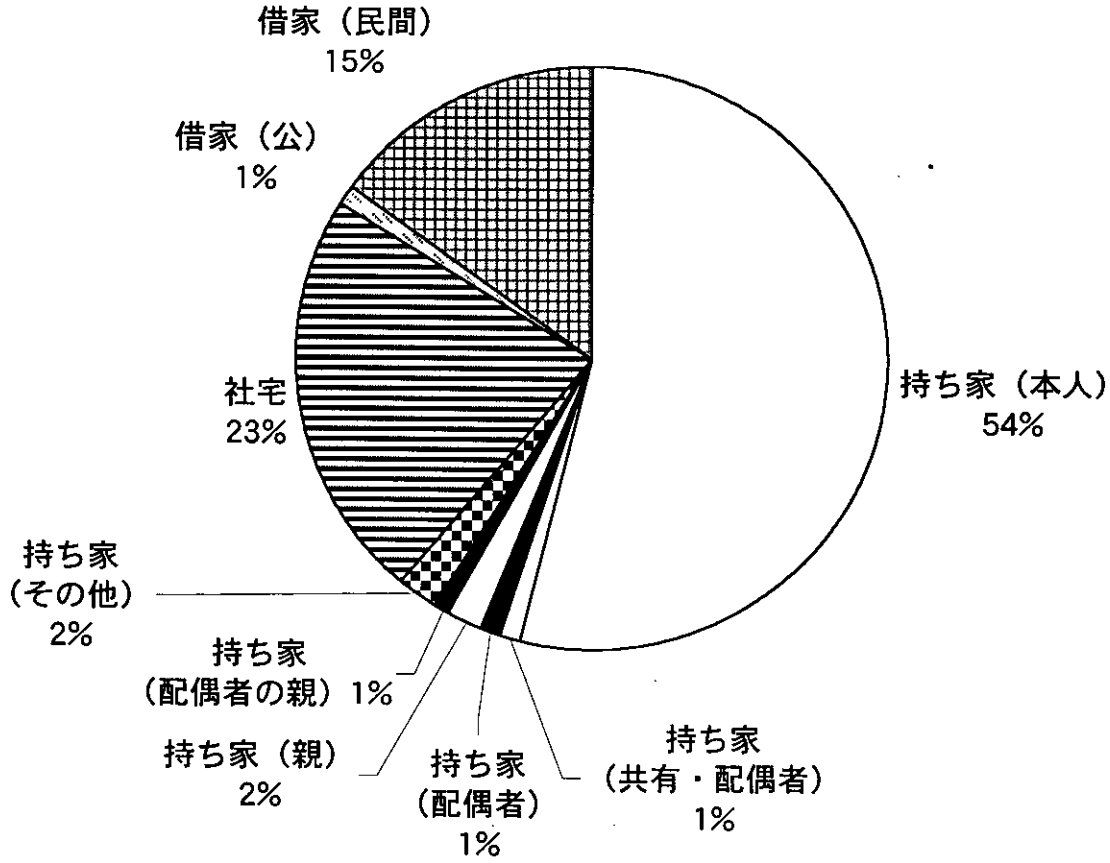


図10　家の所有形態（未婚者182人中）



＊無回答1名

図11　家の所有形態（既婚者187人中）

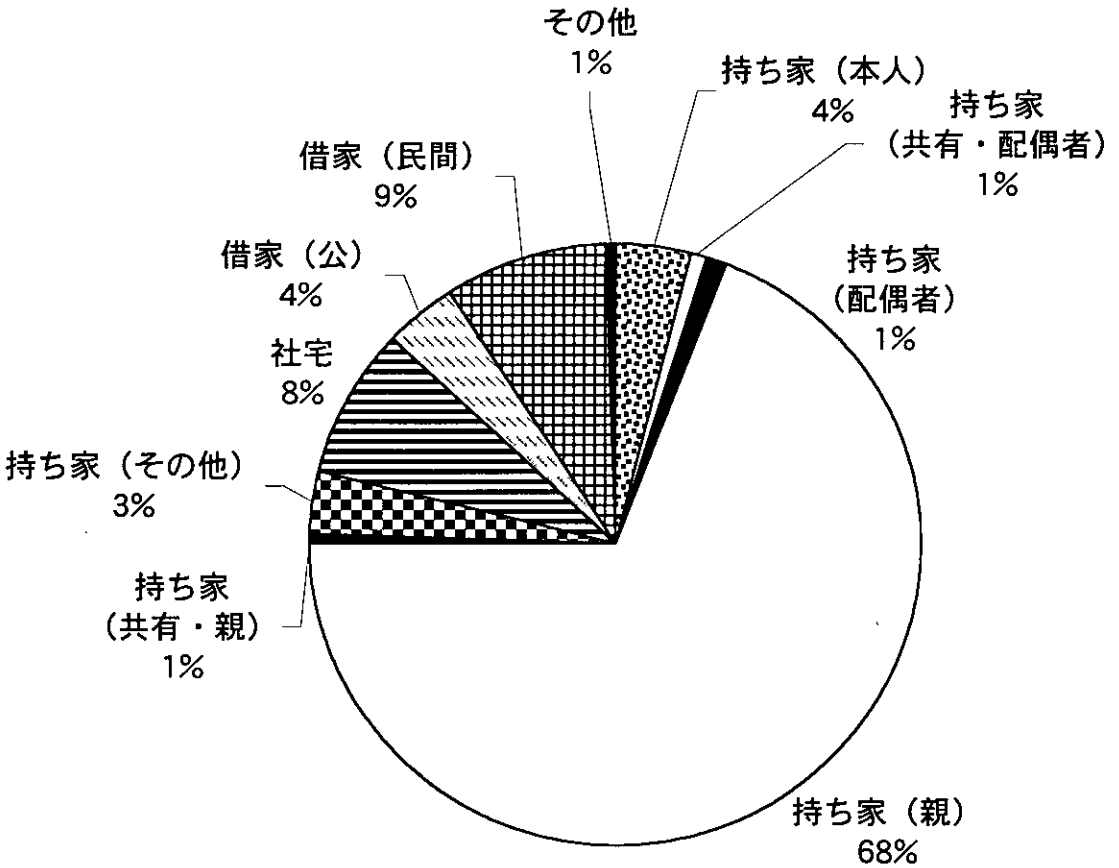
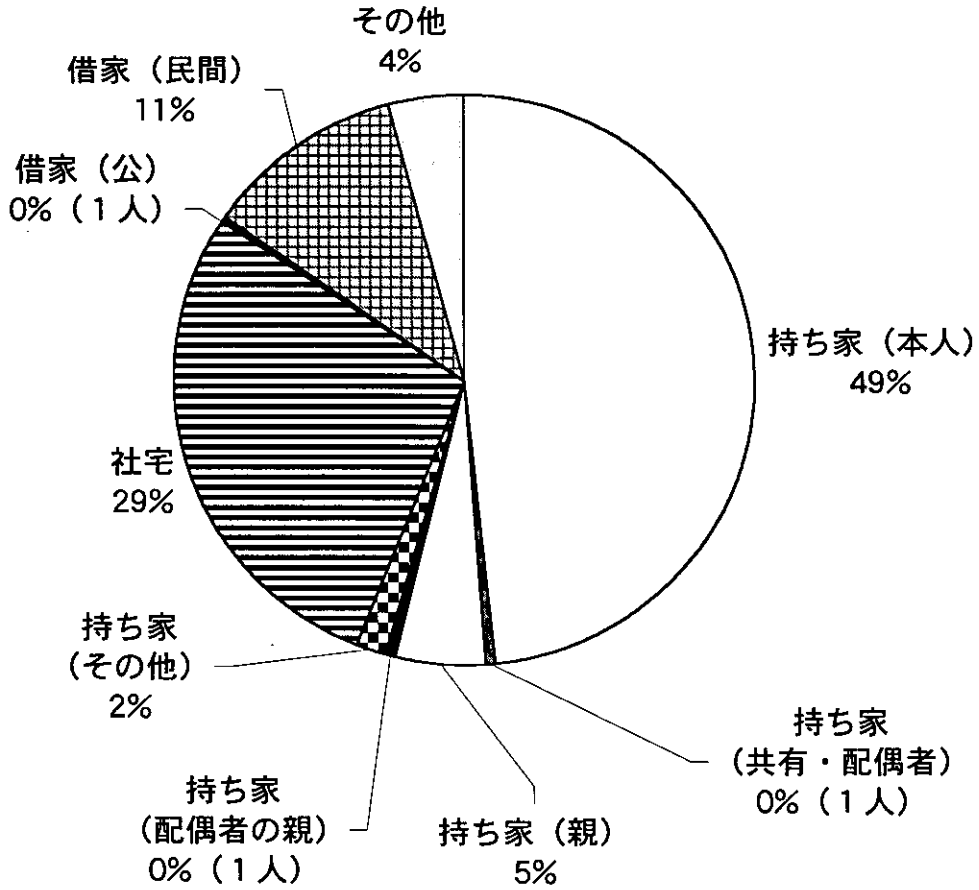


図12　家の所有形態（事務職152人中）



＊無回答１名

図13　家の所有形態（総合職218人中）

4．通勤の利便の補助のためのもの（ワンルーム・マンションなど）
5．その他
6．持っていない

これらのものと、図１４、１５の中の表示との対応関係は明らかであろう。なお、たんに「お持ちですか」と訊ねているだけで、「本人のもの」とは限定していないわけである。

結果は、「持っていない」と答えたものの比率が、事務職でも総合職でもほとんど違わず、約80 %となっている。他の地方の住居を持つ者が総合職で事務職にくらべて多いのは、この総合職が「住居の変わる転勤あり」とされていることの反映であろう。すなわち、持ち家を離れて東京勤務をしているなどによるであろう。「通勤の利便の補助のためのもの」を持つものが、総合職でも１名だけなのは、のちにみる通勤時間の分布からしてむしろ当然であろう。

この設問は「あてはまるものにはいくつでも」として、複数回答がありうるものとなっている。総合職では、「保養用」と「住居用（地方）」とを選んだものが２名、「保養用」と「補助」とを選んだもの、および「居住用（地方）」と「居住用（通勤圏内）」とを選んだものが、それぞれ１名であった。また、事務職では「居住用（地方）」と「居住用（通勤圏内）」とを選んだもの、および「保養用」と「居住用（通勤圏内）」とを選んだものが、それぞれ１名であった。これら回答者の選んだ項目も、１項目を１件としている。

２．２．　通勤に関すること

２．２．１．職種別通勤時間分布

事務職と総合職とに分けて「職種別通勤時間分布」を図１６に示した。

質問紙の上では、通勤時間は次のように訊ねた。すなわち、「通勤の様子についてお聞きします。」としたのち、第一の設問で、「片道の所要時間は［ドア・ツー・ドア］として、つぎのような記入欄をもうけて回答してもらった。

［　　］時間［　　］分　　（記入例：［１］時間[10]分、［０］時間[50]分）」

図１６で、たとえば60分とあるのは、60分と回答したものから69分までの時間（70分未満の数値）を回答したものまでをさす。

職にわけて分布をみるまえに、両方をあわせてみると、60分までのものが過半数（58 %）であって、90分までで96 %になっていることを述べておく。

ピークは双方ともおなじ60分である。60分から90分において総合職の割合が大きいといえるが、40分でも総合職の割合が大きいのであって、かならずしも、総合職の方が長時間通勤になっている傾向がみられるとはいえない。

この職場では、事務職は採用時には、通勤時間は1.5時間をメドとしているとのことであったが、回答にみる分布でもほぼそれを満たしていると同時に、総合職においてさえも、1.5時間程度に収まってしまっていることが分かる。

この通勤時間分布が、東京都の都心の他の事業所のそれと比べて長いか短いかは、厳密には、他のしかるべき調査資料を参照して論じられるべきだろう。常識的には短めとうつるのではなかろうか。

２．２．２．家の所有形態別通勤時間

図１７のなかで、「借家」とあるものは２．１．12．項「家の所有形態」の図の説明の

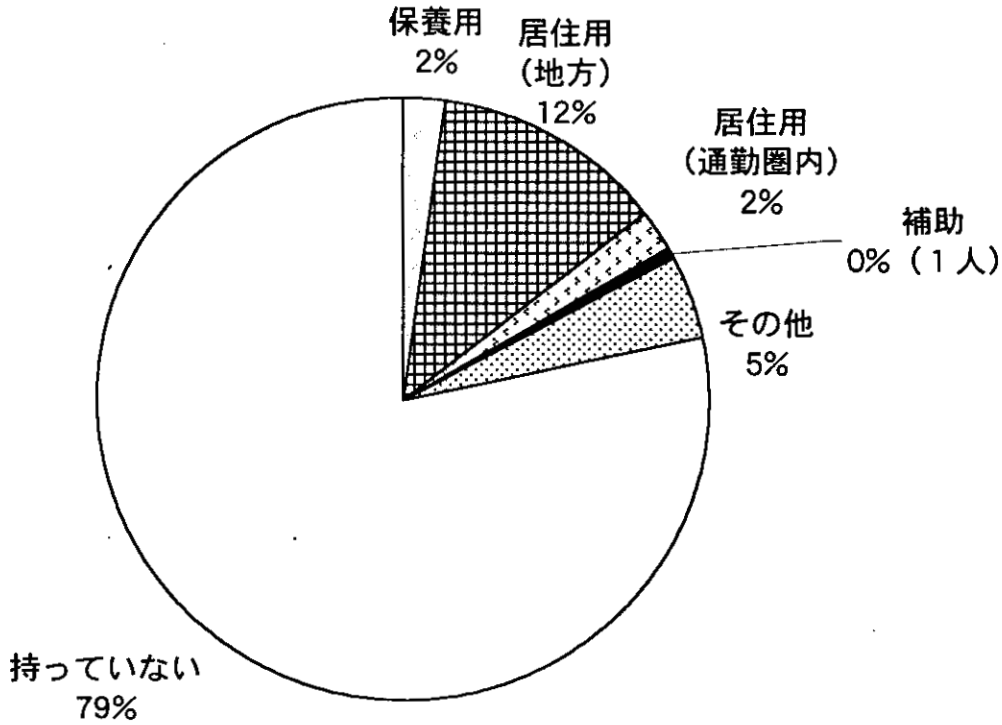
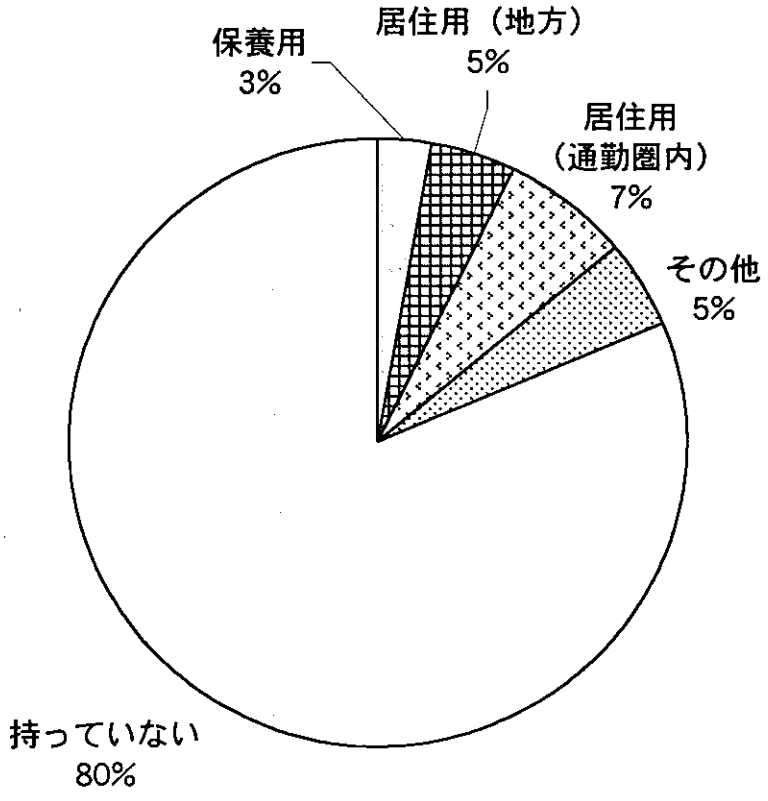
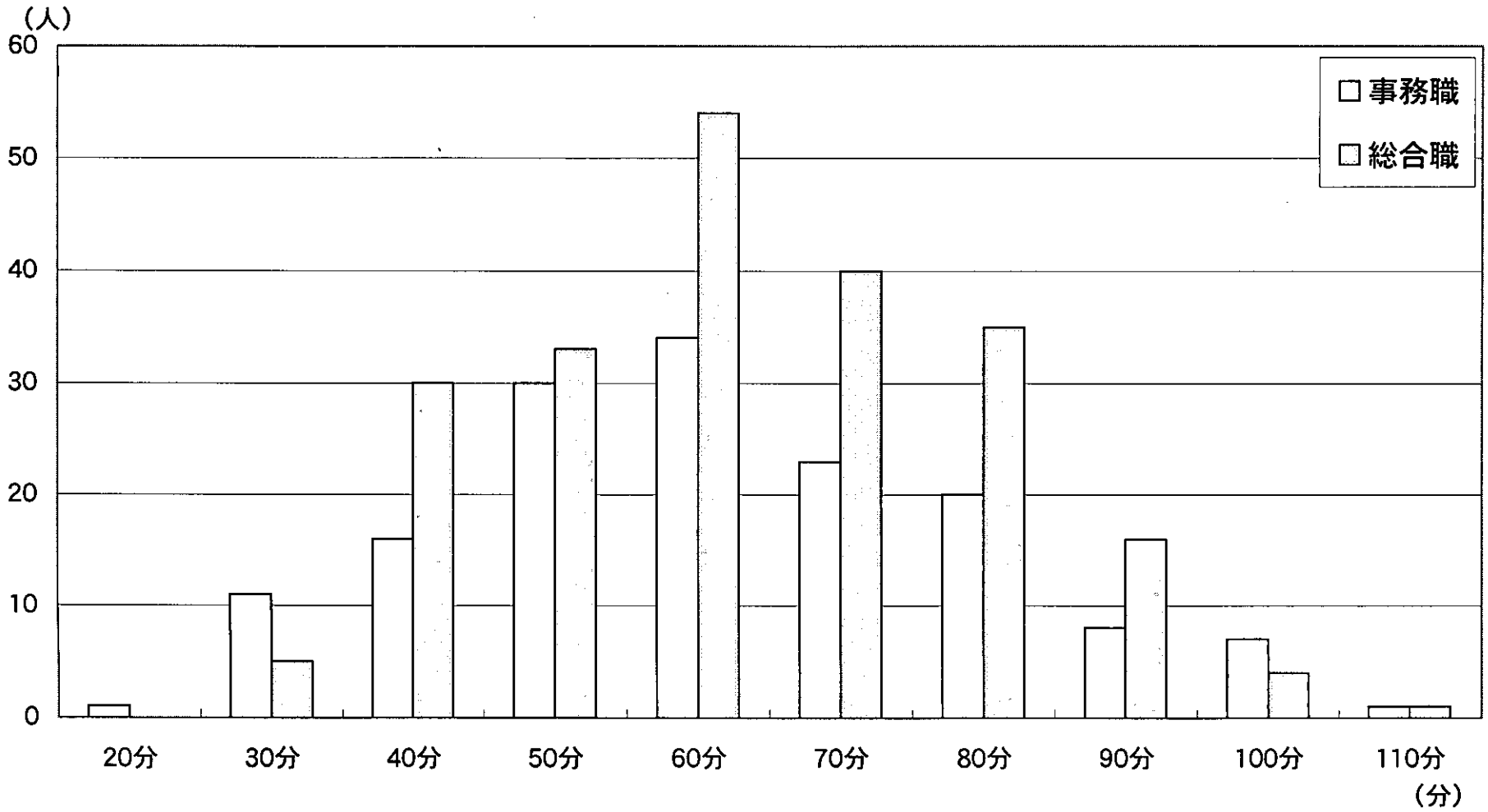


図14　セカンドハウス
（総合職218人中、回答数221件）



＊無回答３人

図15　セカンドハウス
（事務職152人中、回答数151件）



＊無回答1名

図16　職種別通勤時間分布（370人中）

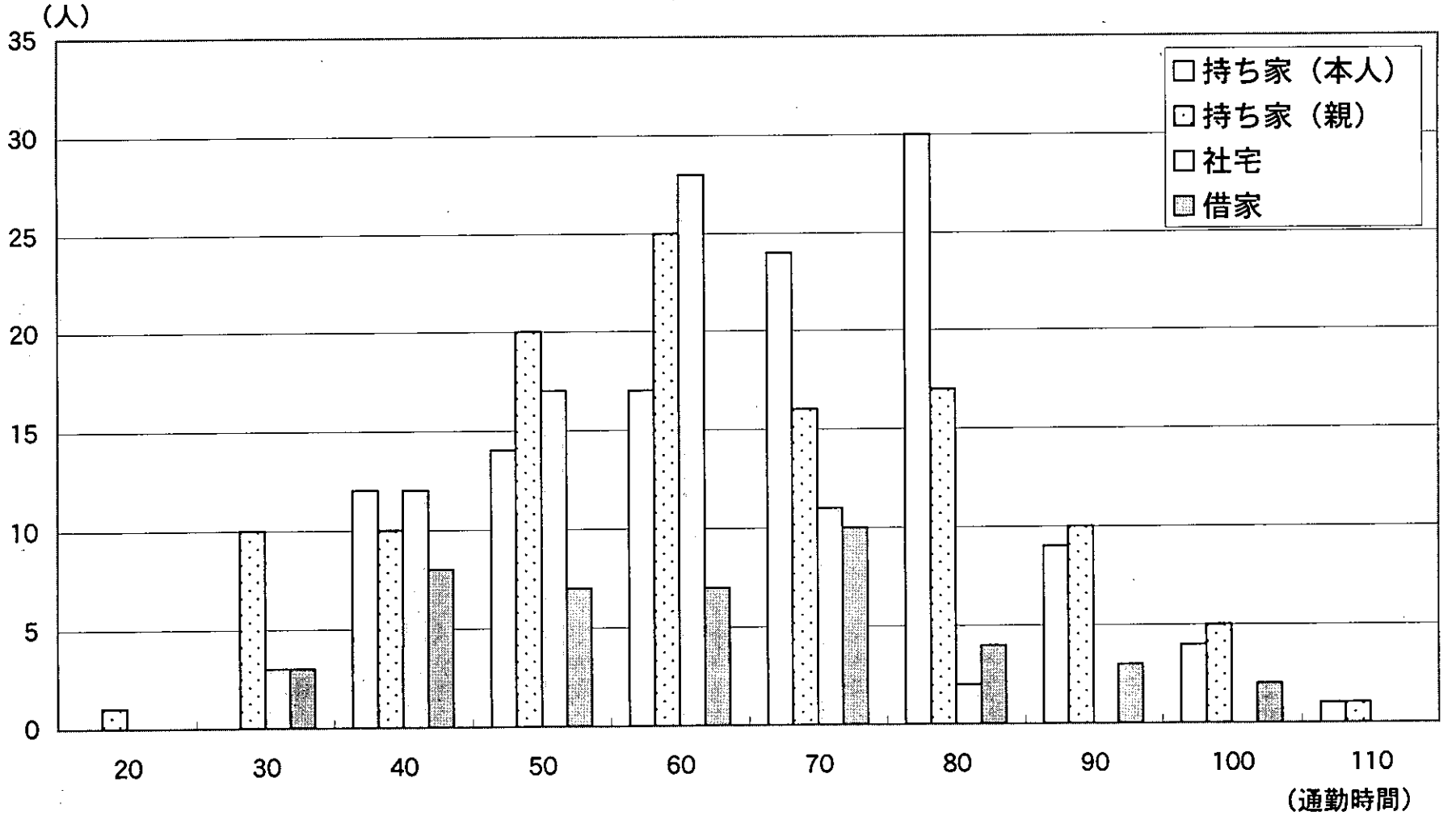


図17　家の所有形態別通勤時間分布（370人中）

ところで述べた「公営・公社・公団などの借家」と「民間借家（アパート・貸間も含む）」とを併せたものである。「家の所有形態」の図のなかにあって、ここの「家の所有形態別通勤時間」の図にみられないものは、件数が少ないので省略したものである。

まず、「持ち家（親）」のピークが60分であるのに対して、「持ち家（本人）」のそれが80分となっていることが特徴的である。既婚者、またその大部分をしめる総合職において「持ち家（本人）」の割合が高く、未婚者また事務職において「持ち家（親）」の割合が高いことを考えれば、単純な比較はできないが、ここの従業員が自分の持ち家をもつときに通勤時間が長くなるという事情を読みとることはできよう。

「社宅」のピークは「持ち家（親）」と同じ60分であって、70分あるいはそれ以上では「持ち家（親）」よりも急激にその数が少なくなる。「社宅」の通勤時間分布は他の所有形態のものに比べて、時間の短い方に寄っているといえよう。「借家」はなだらかに広い時間に分布している。

２．２．３．総合職の年代別通勤時間分布

図１８にみるように、２０歳代は、60分のところに、比較的鋭いピークをもつ。３０歳代は、60分のところで最大になっているが、その人数は３０歳代のものの総人数が２０歳代の1.5倍近くあるのに２０歳代より少ない。そうして、70分、80分、90分では、２０歳代との総数の比よりもよほど人数が多くなっている。

４０歳代の最大値は、２０歳代、３０歳代のそれよりも20分長い80分のところに現れる。３０歳代とくらべて、４０歳代の総人数は1.5倍程度なのだが、80分のところの人数は３０歳代のものの２倍以上あり、50分のところで３０歳代と同数であるにしても、３０歳代よりも４０歳代の方が通勤時間分布が時間の長い方によっているといえる。

５０歳代は総人数も多くないのだが、通勤時間分布はおおよそなだらかな二山型だといえる。また、少なくとも４０歳代よりは、時間の短い方によっているといえよう。

この様に年代別に区分して分布を調べると、総合職全体でみたときとは、かなり違った分布になることがわかる。

２．２．４．既婚の総合職の居住年数別通勤時間

図１９は、既婚と答えた総合職のもののうち、「家の所有形態」について、「持ち家（本人）」と答えたものと、「借家（民間）」と答えたものについて集計したものである。親の持ち家は、それが先にあって、あるいは親の事情に合わせて取得してそこに居住することとなった場合が多いだろうし、社宅もまた会社の住宅政策に規定されて用意されたであろうと思われ、さらに、公的借家（「借家（公）」）は必ずしも市場原理によっているともみえないので除外した。その他の所有形態の住居は件数が少ないので、ここでの集計に含めてはいない（「家の所有形態」の図のうち、既婚者の図１１および総合職の図１３を参照）。

いま住んでいる家に移ってから１年～５年未満のものについては、ピークが70分と80分とにまたがって現れている。それに対して、５年～１０年未満のものと、１０年～２０年未満のものとについてみれば、鋭いピークが70分の方に見られる。１０年～２０年未満のものは、60分のところで少ないが、40分と50分のところに低い山を作っていて、むしろその分短い通勤時間の方に寄っているといえる。

１年未満のものは総数が少ないうえになだらかな二つのピークを作っていて、そのうちの一つが80分のところにあるということになる。この調査が行われたのが1992年の秋であ

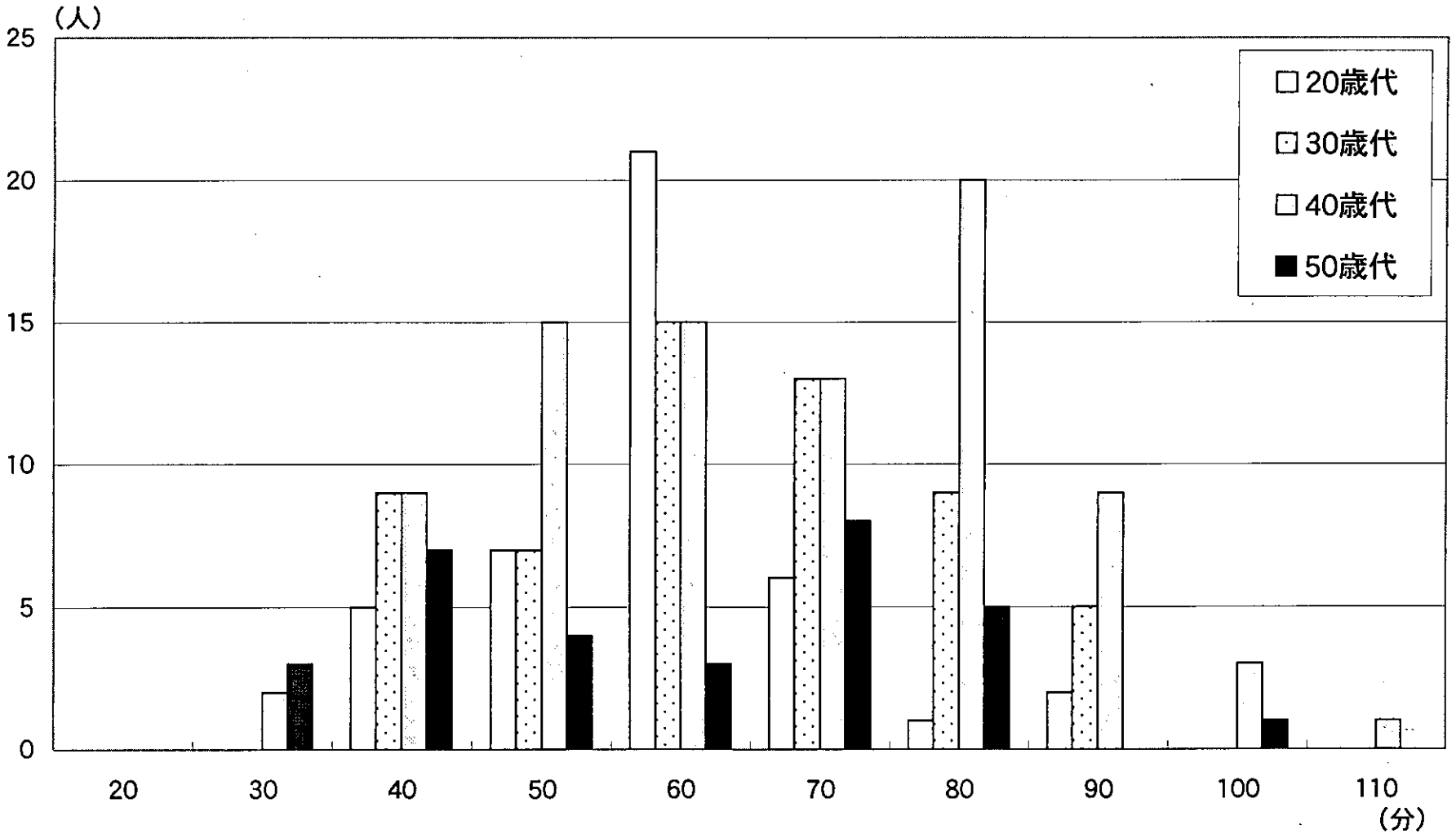


図18　総合職の年代別通勤時間分布（218人中）

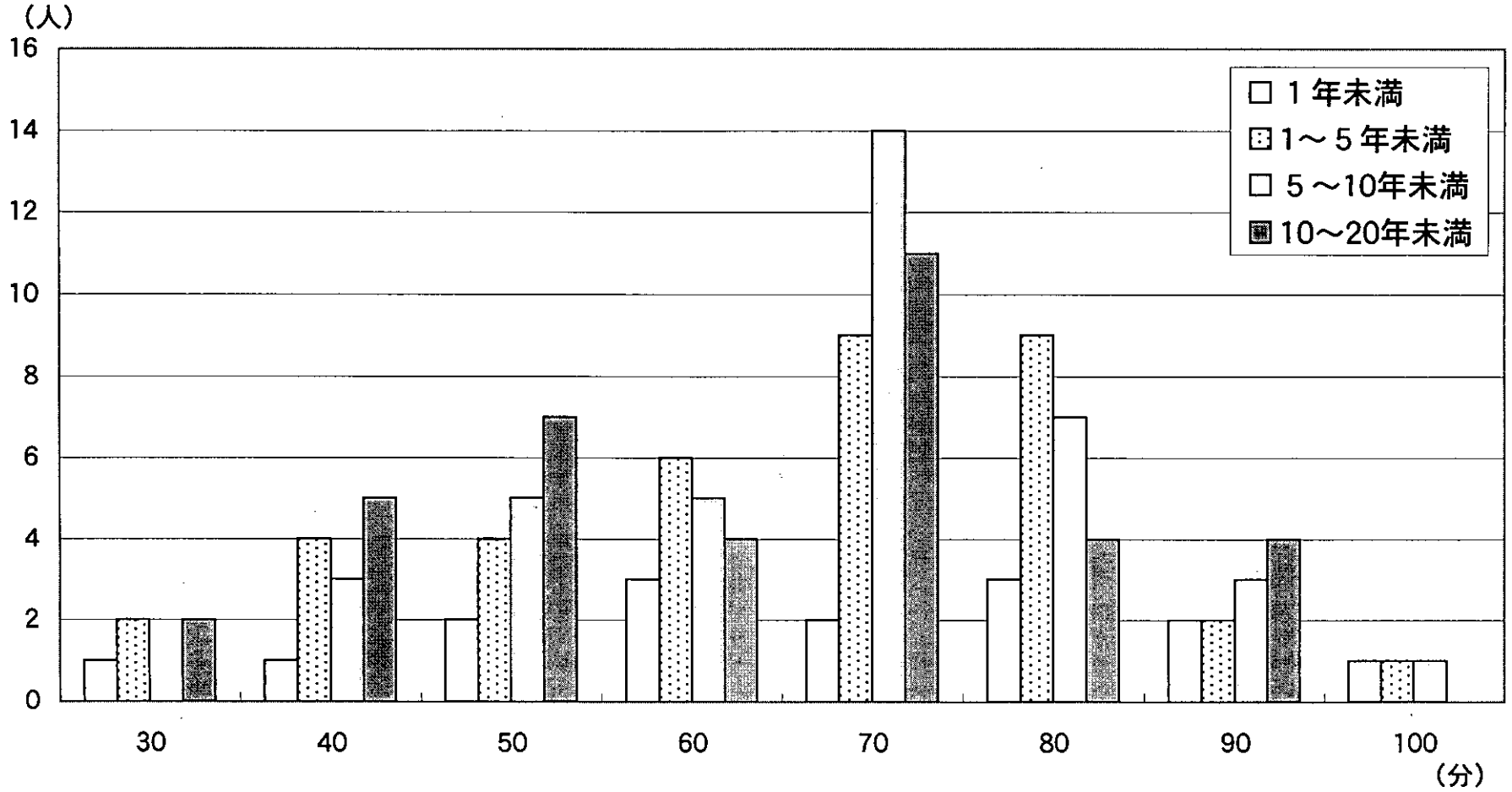


図19　既婚の総合職の居住年数別通勤時間

（持ち家（本人）及び借家（民間）のもののみ／127人中）

って、いわゆるバブル経済が崩壊したあとである。崩壊の時期をいつとみるかであるが、その一つが不動産業者の倒産負債額が飛躍的に増加した1990年12月あるいは、日本の「暗黒の月曜日」は1990年10月１日[1]を取ることができよう。そうしてみれば、この１年未満のもののうち、時間の短い方に属するものは、地価あるいは家賃の下落の恩恵を受けた人達であった、長い方に属する人達が顕在化したことによるものであったといえるかもしれない。

こうしてみると、少なくとも１年～５年未満のものについては、一部分バブル経済の崩壊から少しよい買い物をした人達がいるにしても、いわゆるバブル経済の影響による地価と家賃の高騰の影響を読みとることができる。

２．２．５．許容できる通勤時間

図２０において、事務職と総合職とに分けて集計したが、分布に大差はない。両者とも60分のところに鋭く高いピークをもつ。このことは、両者のそれぞれ全体についての通勤時間の現状についての「職種別通勤時間分布」におけるピークと一致しているが、後者のピークより遙かに鋭く顕著なのは、たんに現状追認というだけではなく、60分＝１時間という概数を書いたということによってもいるだろう。概数を書いたのだろうということは、90分のところに、低いながらも山ができていることからも分かる。

分布の拡がり方からみれば、現状から考えてそれに近い時間を回答したといえよう。あるいは、70分、80分が現状であるものの分が若干許容できる時間において60分に移っているといえる。

なお、図２０においても「60分」とあるのは、60分と回答したものから69分までの時間（70分未満の数値）を回答したものまでをさす。

なお、質問の仕方は、

2)　あなたにとって許容できる通勤時間はどのくらいですか。

として、

[　　]時間[　　]分　　（記入例：[１]時間[10]分、[０]時間[50]分）

の欄に書き込んでもらうものであった。

２．２．６．通勤時間の負担感の通勤時間との関係

ある通勤時間を許容できるかということと、その通勤時間を負担と感じるかということは別の結果を与える。訊いていることが違うとはいえ、これはいささか奇妙なことである。その由来は多分「許容できる」という言葉には願望ないしは諦念がこめられている一方、負担感では実感のことになるからだろう。そうして、前項の 「許容できる通勤時間」では、事務職と総合職との間で相違は明らかではなかった。

事務職と総合職とについて、通勤時間と負担感との対応を調べてみた（図２１、２２）。40分、50分において、すでに総合職では「負担」とするものが現れる。60分を「負担」とするものの比率が、総合職では事務職よりもかなり大きい。70分でも同様のことがいえる。80分、90分では総合職にはかなりの比率で「負担」と回答するものがいて、90分では優に半数を越えている。

このことの原因は、職種による仕事の質の相違にも求められるであろうが、後に見る退社時刻が総合職の方がおおよそ１時間半くらい遅いということでも説明できよう。

なお、この項目は、質問紙上で「通勤に関係するご意見、ご感想をうかがいます。」と

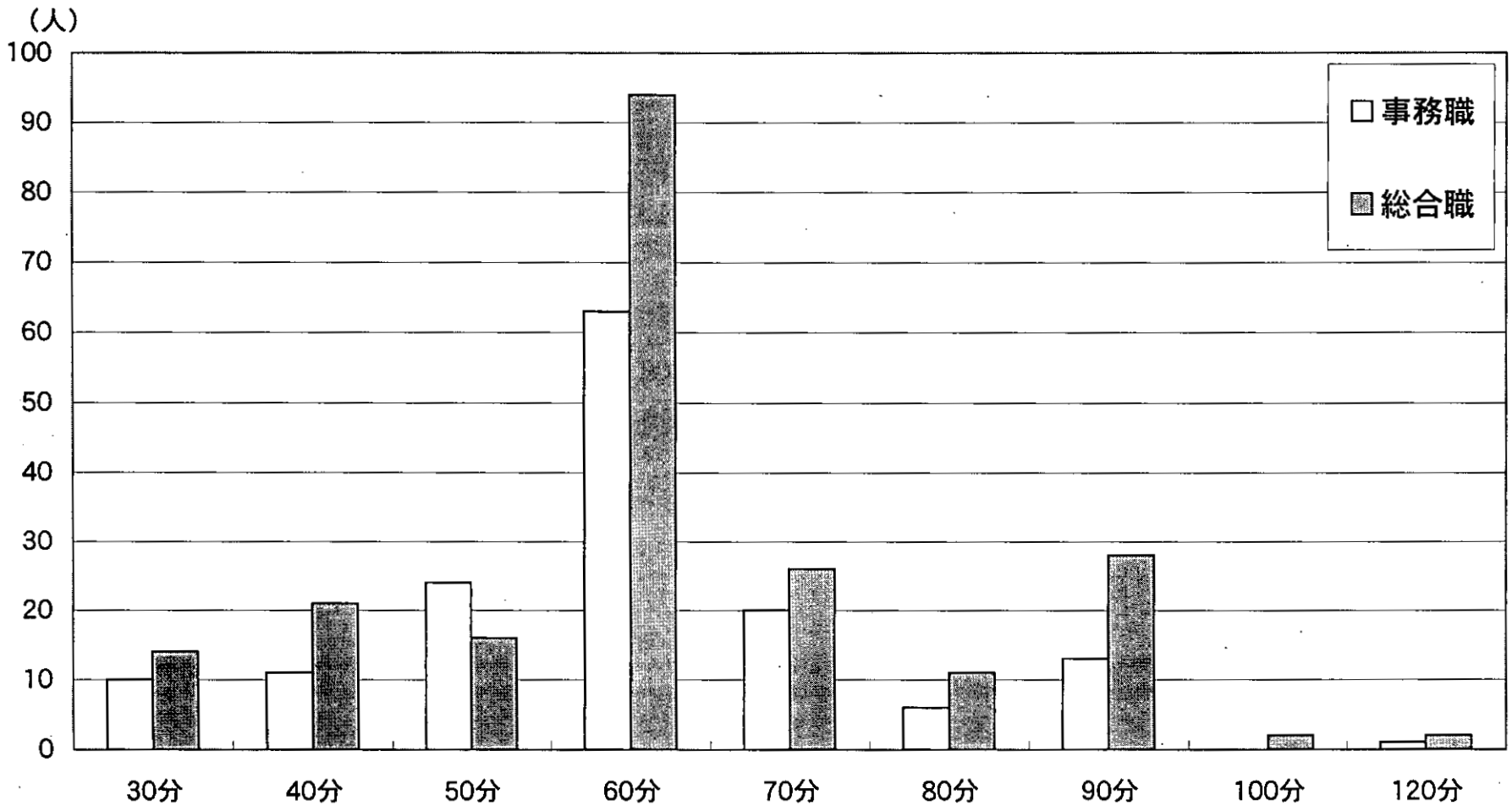
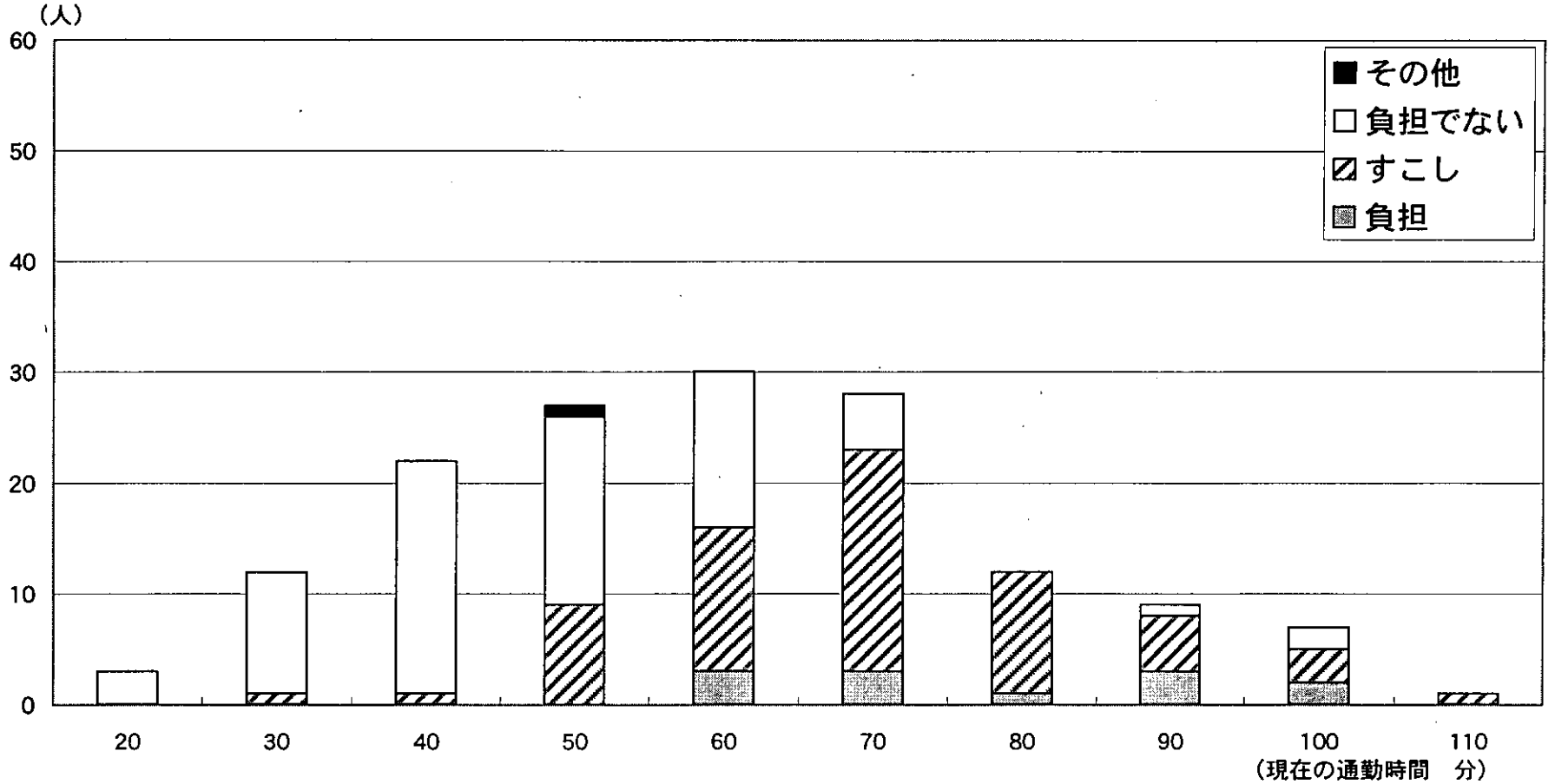
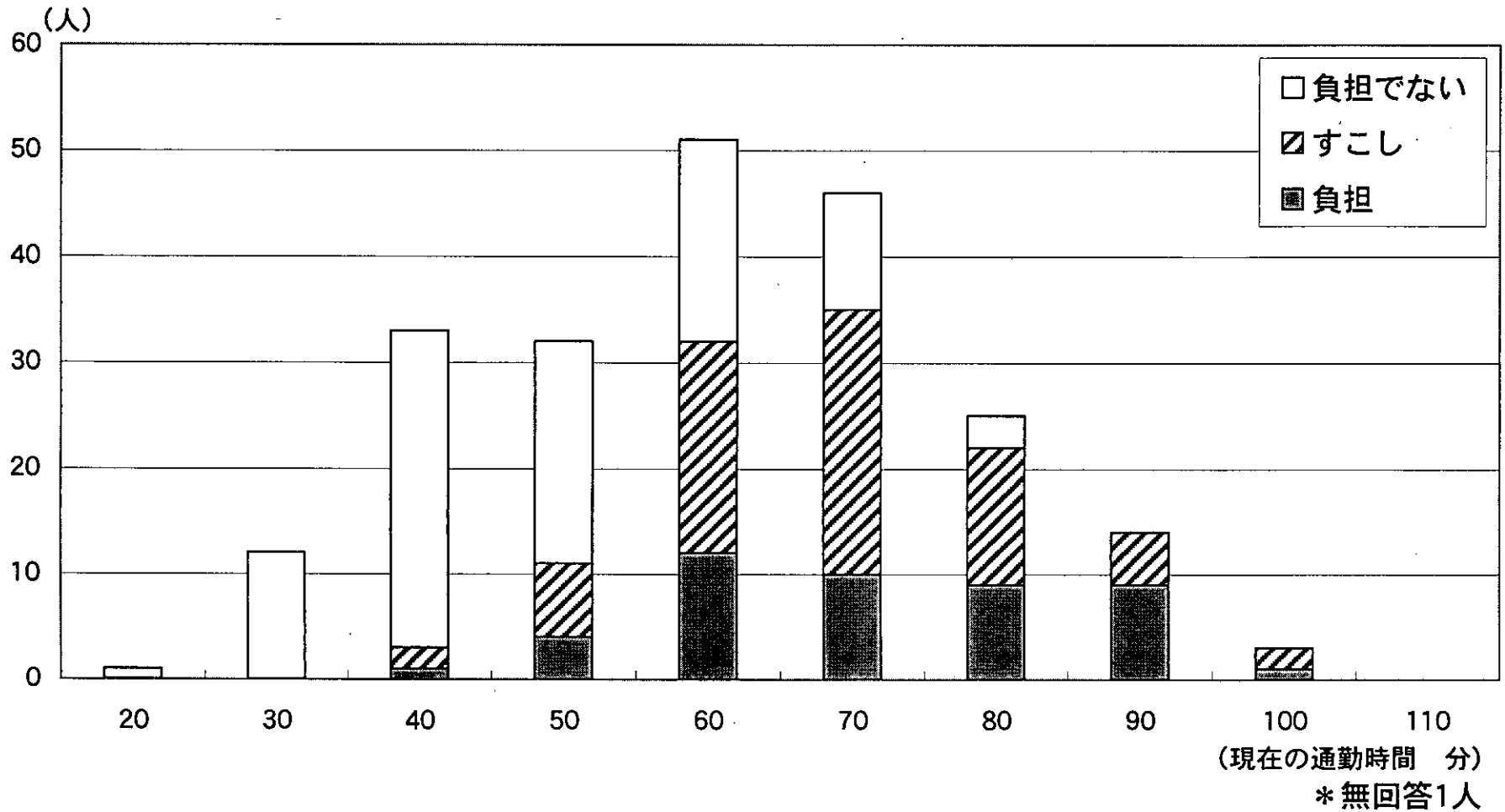


図20　許容できる通勤時間（370人中）



＊無回答1名

図21　通勤時間の負担感の通勤時間との関係
(事務職152人中)



＊無回答1人

図22　通勤時間の負担感の通勤時間との関係
(総合職218人中)

したうえで、最初の質問として、

1) いま現在、通勤時間は負担ですか。

1．負担である　　2．すこし（ときどき）負担である

3．負担でない　　4．その他（　　）

としたものである。この質問に続いて、「許容できる通勤時間」に関するものをおいた。

2．2．7．職種別出社時刻分布

出社時刻分布を職種別に示す（図２３）。ここでも、図２３の中で「～8:00」とあるのは、7:46という回答から8:00という回答までのことである。

ピークは事務職も総合職も「～8:30」である。おおまかに言って、総合職４に対して事務職３の人数比であることを考えれば、これより時間ぎりぎりの方に出社するのは事務職に多く、これより早い方は総合職が多いといえるが、いずれにせよ大差はない。８時までに来ているものもかなりいるし、ごく少数ながら、６時代に出社してきているものも多くはないが数人いることがわかる。なお、同社の始業時刻は８時50 分、終業時刻は17時10分である。少し変則的になっているのは、週休２日制導入のときの影響という。よって、５分前までには、ほとんどのものが出社していることになる。

なお、出社時刻の訊ね方はつぎのような設問による：

すなわち「通勤の様子についてお聞きします。」に続く３番目の質問として、

出社時間（最近１か月の平均）

[　　]時[　　]分　　（記入例：[８]時[10]分、[８]時[40]分

としたものであった。

始業時間より早く出社する理由、および、始業前の時間の過ごし方についての回答はべつの図で検討することになる。

2．2．8．早く出勤する理由

「通勤の様子についてお聞きします。」のもとでの４番目の質問として：

あなたは混雑を避けるなど、意識的に始業時間より早く出てこられていますか。もしそうであればその理由を下から選び、あてはまるものにいくつでも○印をおつけ下さい。

1．乗り物のダイヤ、接続の関係　　2．乗り物の混雑を避けるため

3．乗り物の遅れを見込むため　　4．始業前に会社で時間が必要だから

5．朝早く出るのが好きだから　　6．その他（　　）

7．意識的に早く来ているわけではない

結果は図２４にみるように、「混雑を避けるため」が圧倒的に多く、回答者数の半数、回答件数でも半数近くを占める。のちに見るように、「通勤途上で感じる困難・迷惑・不快」についての質問で「混雑」を選んだものが圧倒的に多数いることと（図４７）に対応していて、通勤の困難は所要時間のみならず乗り物の混雑によっていること、そのことが通勤者自身によってよく認識されていることがわかる。

ついで「意識的に早く来ているわけではない」が全回答件数の４分の１以上ある。いわば「早いと言うほどでもない」人達も或る程度いるのだから、これもうなずける。

「始業前に時間が必要」の意味することは、つぎに見る図「職種別始業前の時間のすごし方」で示されるとおりの「新聞をよむ」「着替え・化粧」にあきらかになる。

「ダイヤ・接続」が１割程度の回答者にとどまっているのは、首都圏の中枢につながる

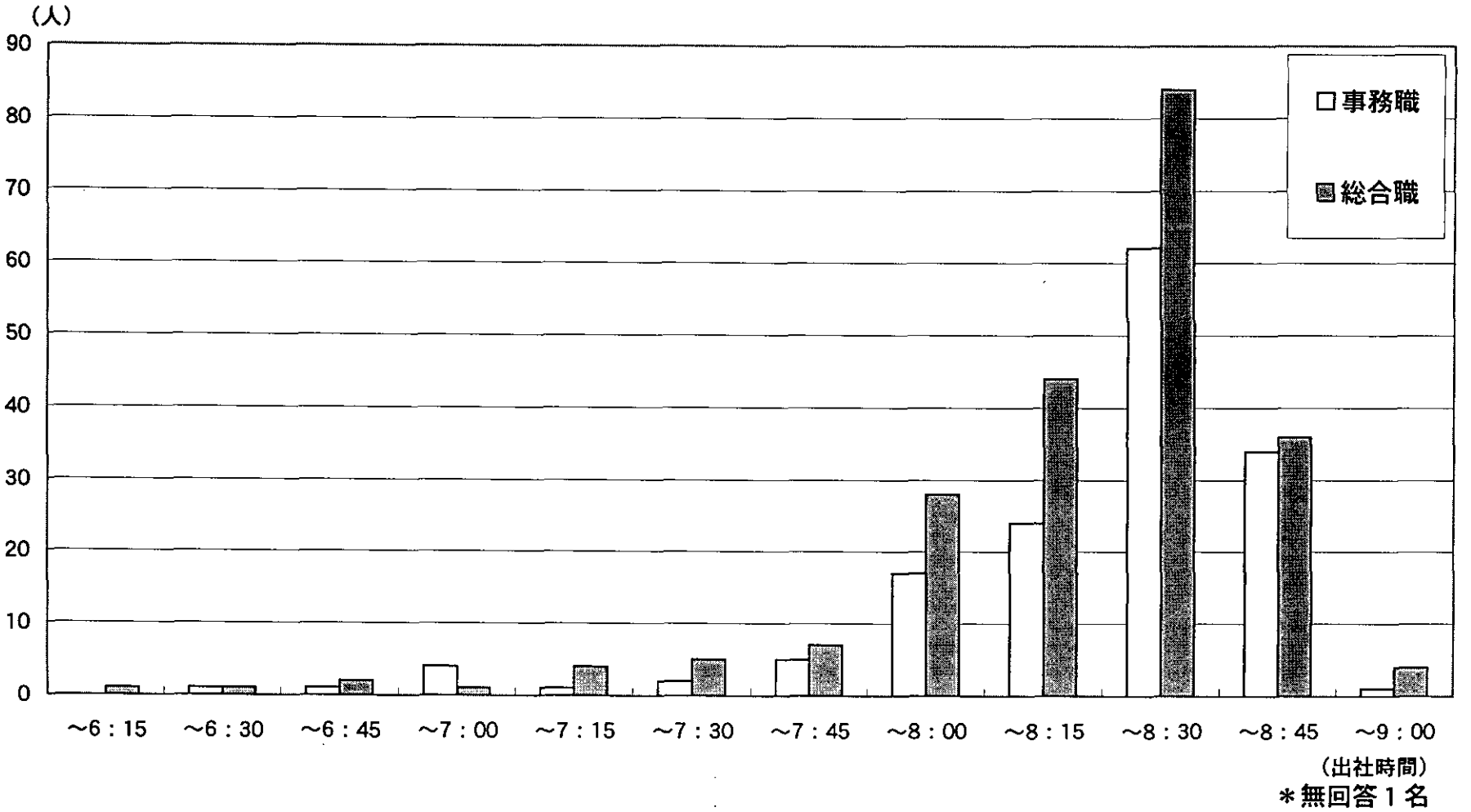


図23　職種別出社時刻分布（370人中）

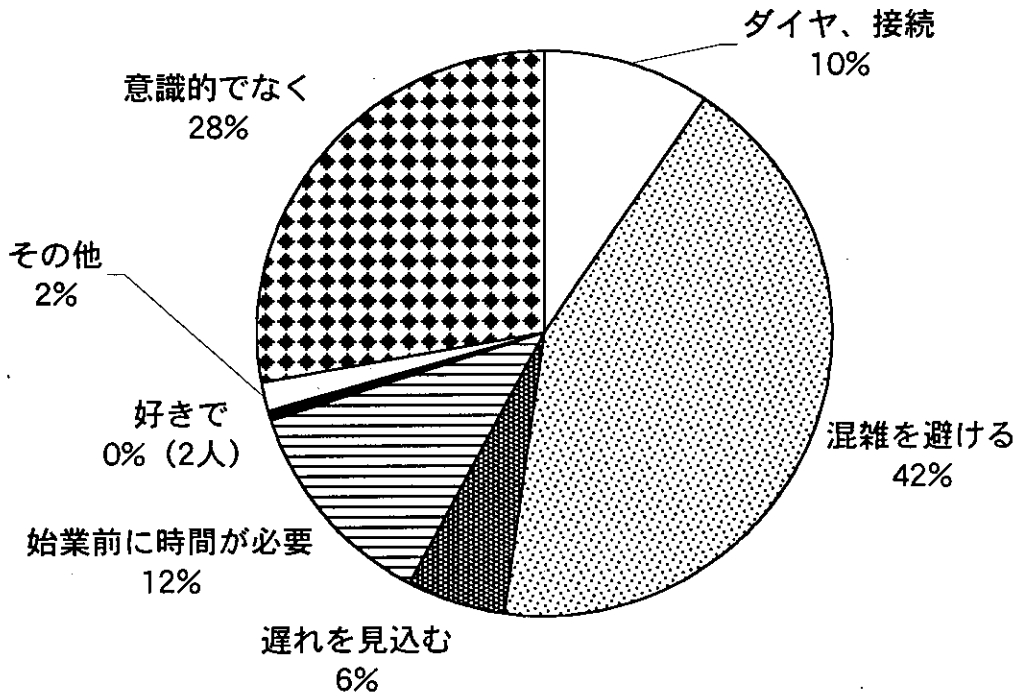


図24　早く出勤する理由

（370人中、全回答数441件）

交通機関の運転頻度の高さの反映であろう。地方都市であれば、当然これとは全く違った結果になることがあるだろう。

２．２．９．職種別始業前の時間のすごし方

前項の質問につづいて：

「出社されてから始業時間までをどう過ごされますか。複数に○印をおつけになって結構です。」とし、ただし書きとして、前の問で、７．「意識的でない」に○印をつけた人はこの問を飛ばすように書いた。提示した選択肢はつぎの４項である。

１．新聞・雑誌を読む
２．お茶を飲む・くつろぐ
３．着替えをする・化粧をする
４．その他（　　）

図２５にみるように、結果は職種によって截然と分かれる。事務職のものが日常新聞を読まないわけでもあるまいが、始業時間までの過ごし方としてはここにみたとおり、その人数は極めて少ない（２名）。日常新聞を読むものでも、家から新聞を持ってきてまで、あるいは通勤途上で買ってまで読まないということであろう。あるいは、着替え、化粧など他にすることがあるということである。

２．２．10．職種別退社時刻分布

職種にわけて集計したことの意義の明らかに見える図２６となった。

すなわち、総合職の退社時刻は事務職のそれのピークである18時までより、明らかにおそく、19時と20時とにピークをもつ。質問の仕方として、「通勤の様子についてお聞きします。」の６番目の質問として

退社時間（最近１か月の平均）
[　　]時[　　]分　　（記入例：[７]時[30]分、[８]時[00]分）

のように、最近の平均値を訊ねているので、概数で答えたものが多いだろうということを想定すべきで、総合職の退社時刻のピークは、～19時から～20時に拡がっているとみてもいいだろう。

なお、同社では株主総会の前は忙しいとのことであったが、本調査でいう「最近１か月」はこの時期を外していることになる。

この結果を、異なる業種、たとえば霞が関の官庁の人々がみて、どのような感想をもつであろうか。

２．２．11．通勤時間と退社時刻の関係

図２７に読みとれることは、通勤時間が短いからといって遅くまで会社にいる傾向があるわけではないけれども、通勤時間が或る程度長いと退社時間の遅いものが減るということである。他の職場で、通勤時間が非常に長いものから、それ故に「ときに口惜しい思いをすることもある」との言葉が洩れるのを聞いたことがあるが、他のもののように遅くまでは頑張れないということであろう。同じことが図２７にみえる。

２．３．　健康にかかわること

２．３．１．睡眠時間

「睡眠時間」の分布パターンを図２８に示す。ここで、縦軸はパーセントである。「～

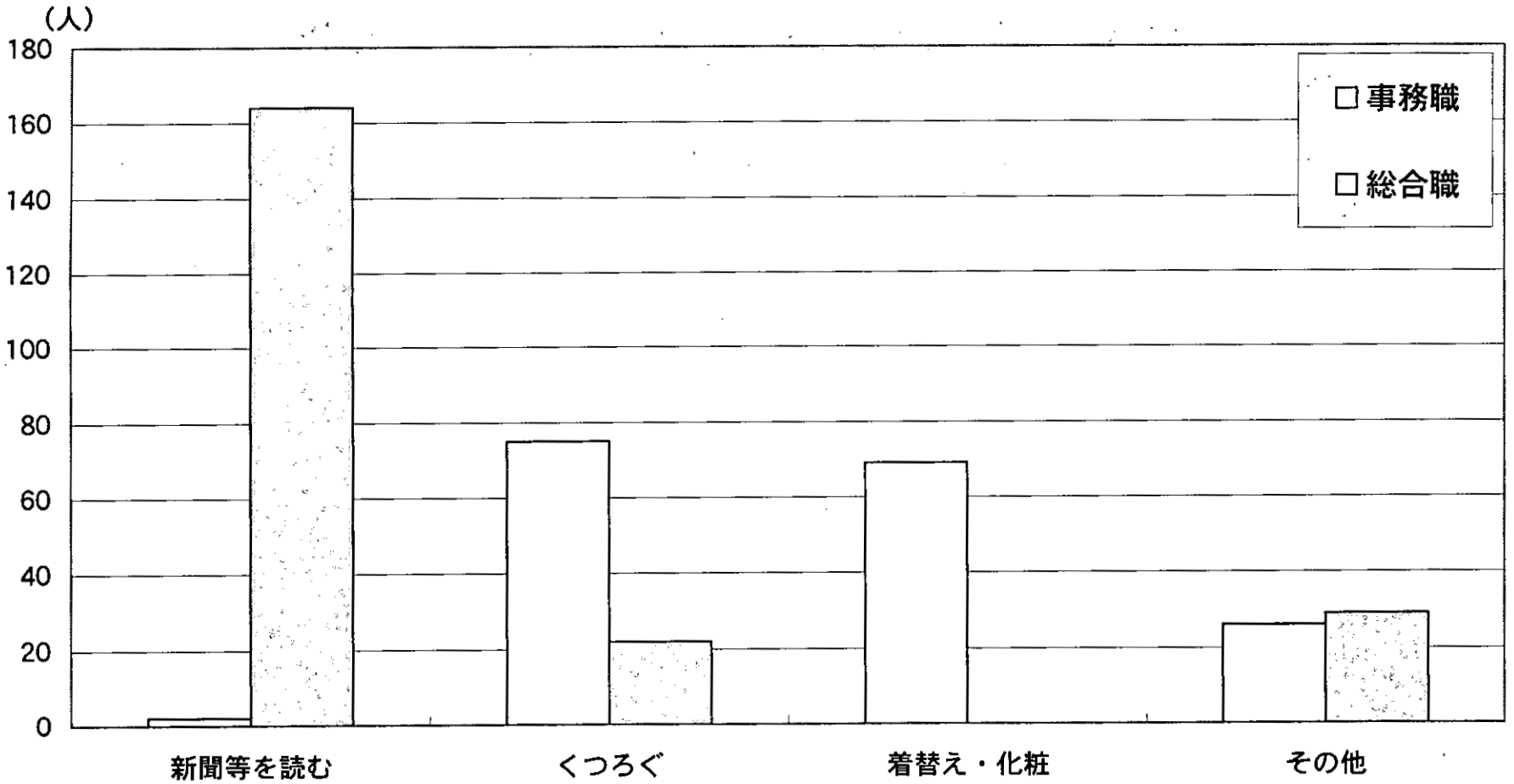
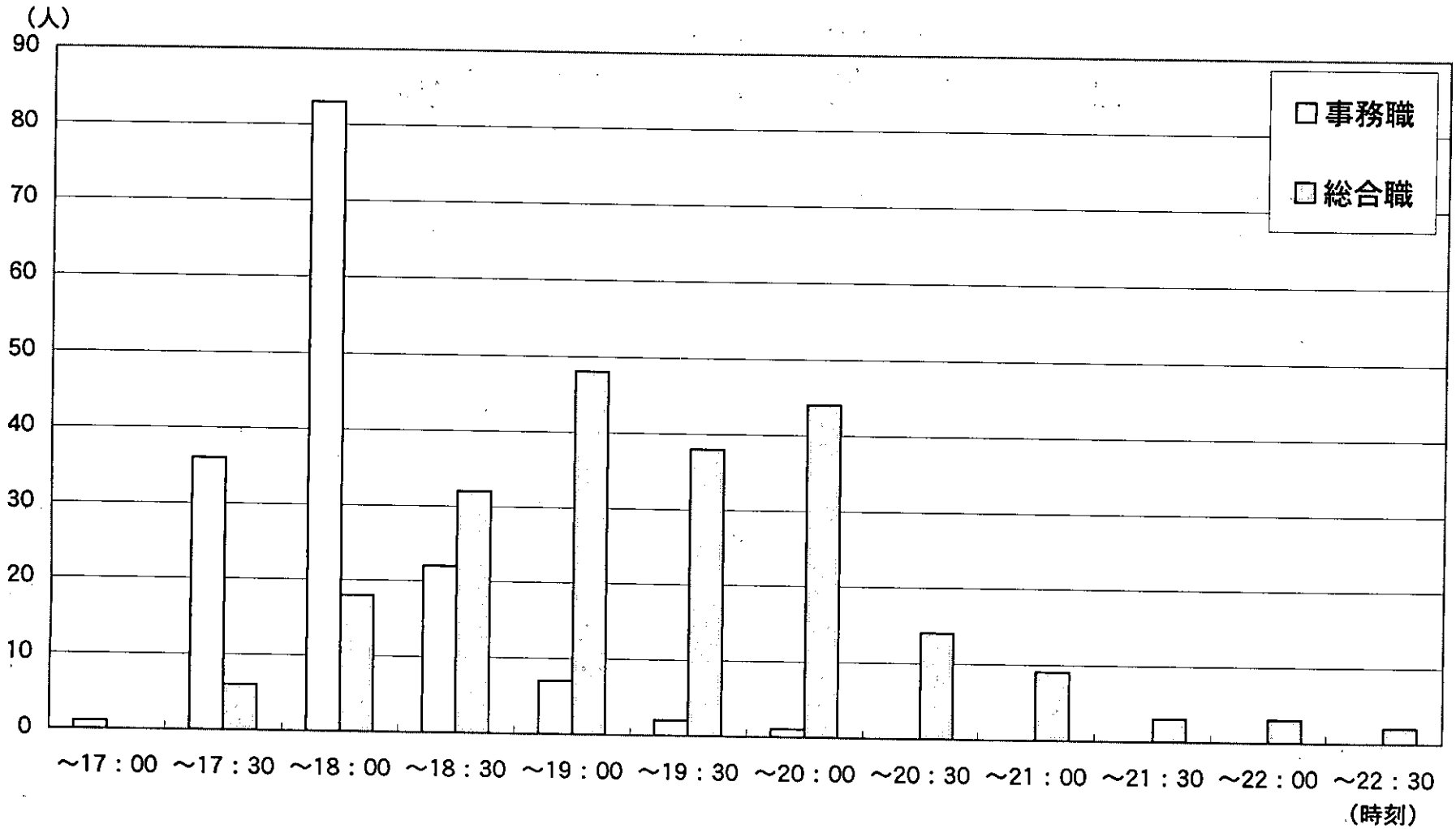
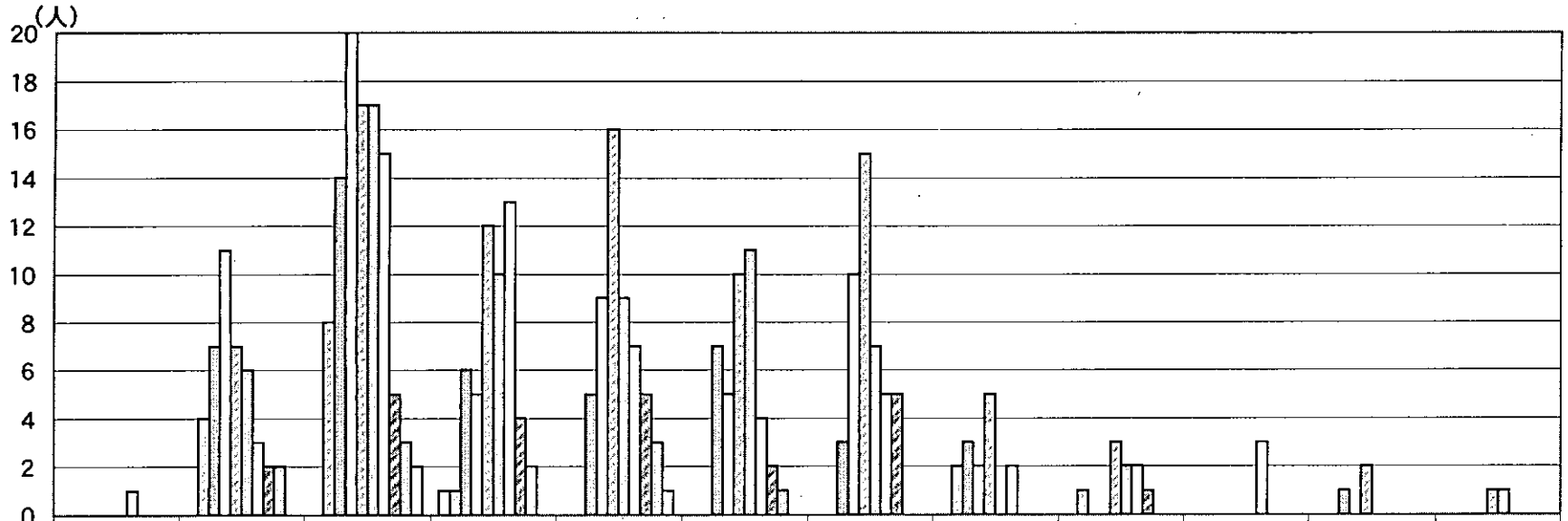


図25　職種別始業前のすごし方
(370人中、総回答数387件)



＊無回答1名

図26　職種別退社時刻分布（370人中）

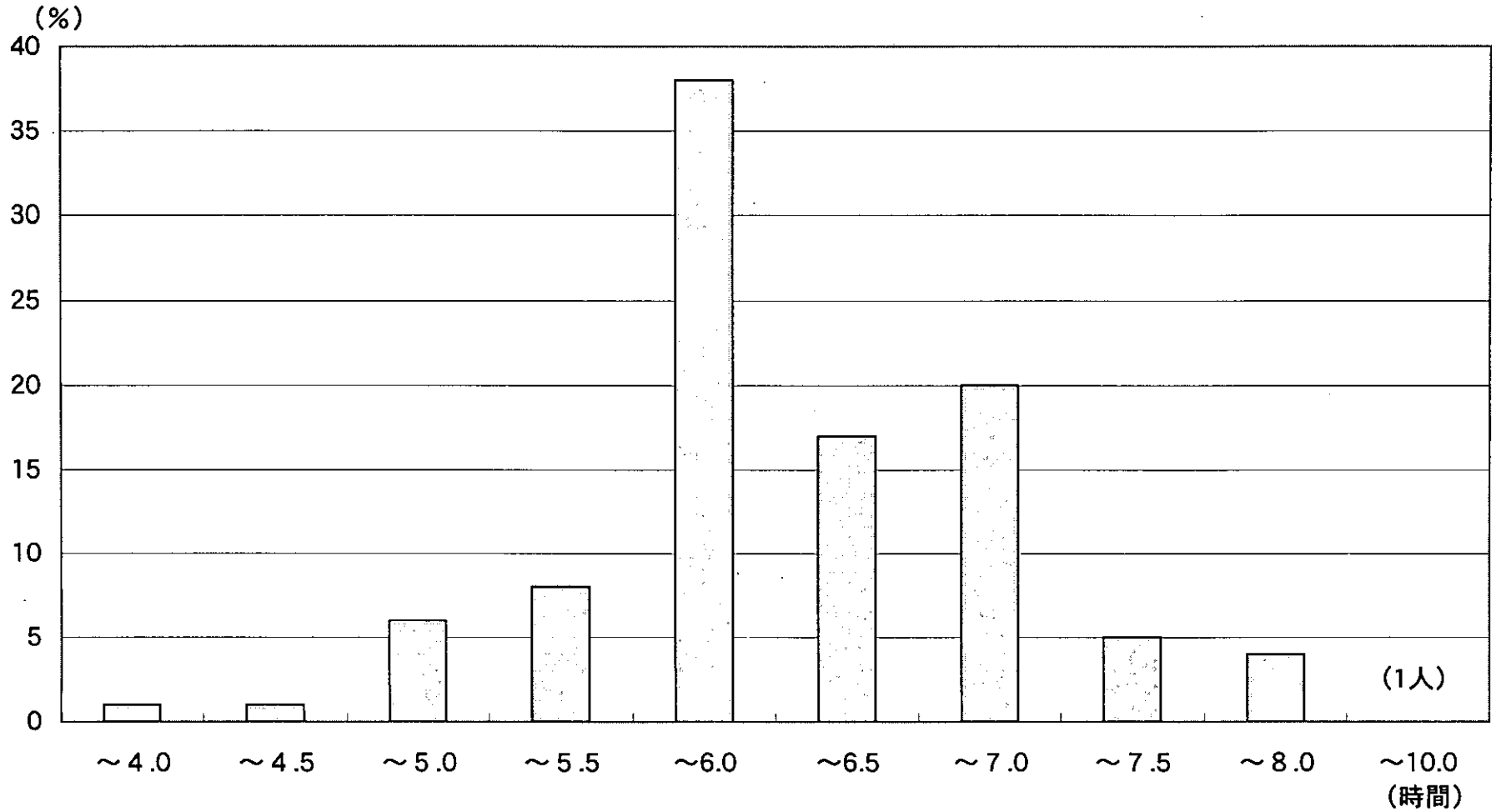


	17:00	17:30	18:00	18:30	19:00	19:30	20:00	20:30	21:00	21:30	22:00	22:30
□20分				1								
□30分		4	8	1				2	1			
□40分		7	14	6	5	7	3	3			1	
□50分		11	20	5	9	5	10	2				
▨60分		7	17	12	16	10	15	5	3		2	1
□70分		6	17	10	9	11	7		2			1
□80分	1	3	15	13	7	4	5	2	2	3		
▨90分		2	5	4	5	2	5		1			
□100分		2	3	2	3	1						
□110分			2		1							

(時刻)

＊無回答1名

図27　通勤時間と退社時刻の関係（370人中）



＊無回答3人を除く

図28　睡眠時間（370人中）

6.0」すなわち、５時間半をこえ６時間までのものが、40 %近くいて、最大割合になっている。それよりも、短い時間のものと長い時間のものの比率は決して対称に分布していなくて長い方の割合が大きい。個人差はあるものの、「～6.0」が睡眠時間短縮の限度であって、かなりの人が限度いっぱい睡眠時間を切りつめているということであろうか。睡眠時間「～6.0」から「～7.0」までで全体の４分の３の人数を占めることになる。

職種によって、睡眠時間の分布がどう違うだろうか。集計した結果を「職種別の睡眠時間」である図２９に示す。結果はみてのとおり、職種によっても睡眠時間の分布はたいして違わない。睡眠時間「～6.5」と「～7.0」とで、事務職のものの人数が総合職にくらべて、それぞれの全体人数の比から考えて、少ないことが目立つ程度である。通勤時間分布、出社時刻分布は二つの職の間で大差なかった一方、退社時刻は総合職の方が１～２時間くらい遅かったわけだから、総合職の方で、「風呂・メシ・寝る」という状態に近いものが多くいるということになる。

なお、睡眠時間の訊ね方は、「健康に関することをお伺いします。」という記載につづく、３つの問の最後で、

睡眠時間は、ウイークデイには一日につき

[　　]時間[　　]分　（記入例：[6]時間[30]分、[6]時間[00]分）

として、数値を書き入れてもらっている。

２．３．２．疲労感

じつは、調査票の上では退社時刻を訊ねたあと、「睡眠時間」を聞くまえに、「疲労感」と「その原因」について訊ねている。

まず、質問の仕方だが、「退社時間」の質問の下に、

《次に、健康に関することをお伺いします。》

として、続けて、

7)　疲労感を覚えますか。

１．いつも感じる　　２．ときどき感じる　　３．感じない

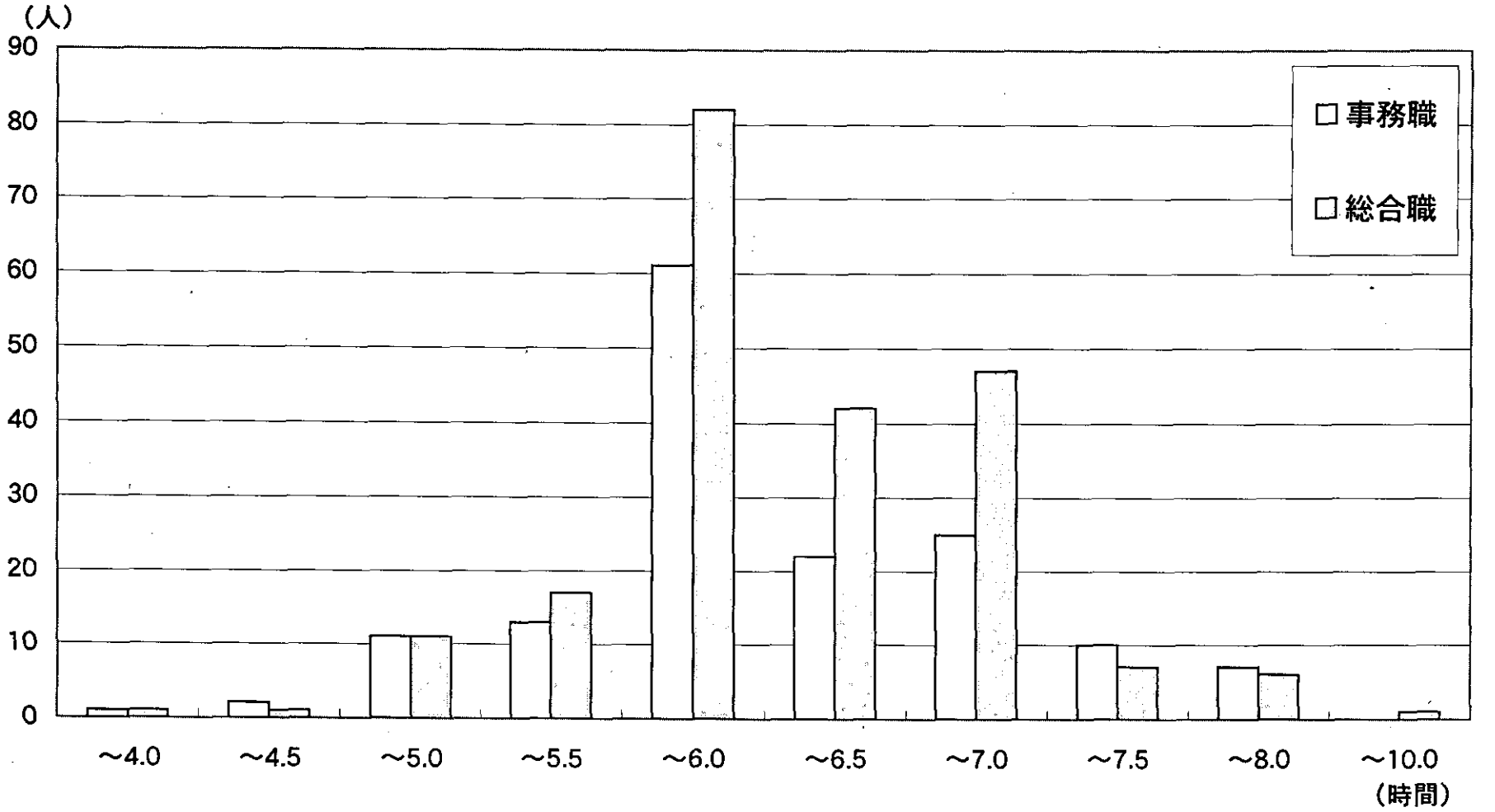
としている。

回答者全員３７０人についての回答を集計したものが円グラフで描いた図３０の「疲労感」に示されている。

「ときどき」が80%近く、というのは仕事をしている以上、仕方がないというべきであろうか。また、ありそうな回答比率ともいえようし、また回答者が無難あるいは中庸な選択肢を選んだのだともみられる。

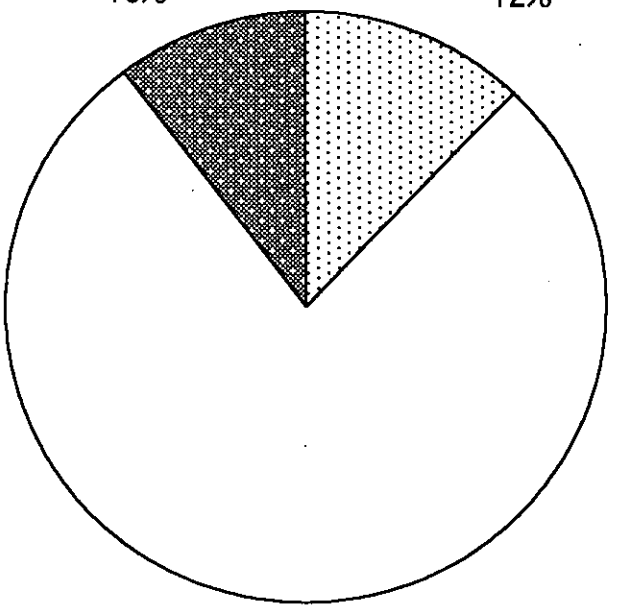
職種と年齢とで、回答比率がどう変わるかを棒グラフで示した図３１の「疲労感の原因」に見てみよう。ここで、集計にあたっては、グラフの下に注記してあるように、総合職は男性のみをとっている。また、事務職は全員が女性であるが、人数の少ない３０歳代以上は示していない。この様にしたのは、２０歳代の事務職と総合職とを比べたとき、職種ないしは性別の相違として比較でき、総合職同士で比較するとき、性は同じで年齢層が違うようにするためである。グラフを見るに、結局属性による相違は著しいとはいえない。強いていえば、疲労を「感じない」とする比率が２０歳代事務職で少ないのが目立つ程度である。

２．３．３．疲労の原因



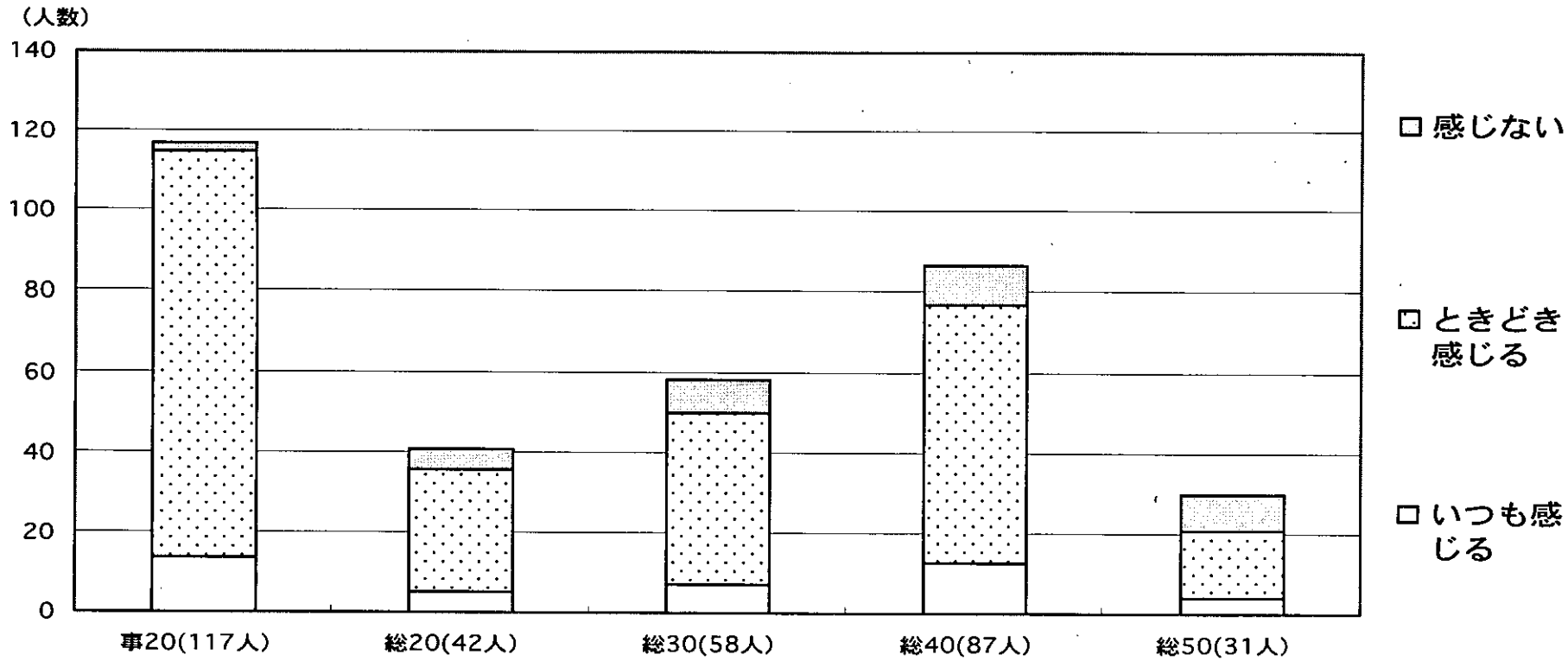
＊無回答3名

図29　職種別の睡眠時間(370人)



＊無回答２名

図30　疲労感（370人中）



＊無回答２名

事 20：20 才代事務職（女）	総 20：20 才代総合職（男）	総 30：30 才代総合職（男）	総 40：40 才代総合職（男）	総 50：50 才代総合職（男）

図 31　疲労の原因（335 人）

疲労感の有無に続いて、その原因を尋ねた。質問の仕方はつぎのようである。

8) 上で疲労感について３以外に○印をつけられた方にお聞きします。
疲労の原因は次のどれだと思いますか。

1．仕事の忙しいとき　　2．出張のとき
3．通勤のせい　　4．その他（　　）

したがって、回答者は「疲労感」のときより少なくなる。

円グラフの図３２「疲労の原因」についてみるなら、「仕事」が圧倒的に高比率になっている。「疲労感」のときと同じく、棒グラフ図３３からわかるように属性による疲労の原因には大差はみられない。

以上から、この会社では、疲労感を感じるにも、その原因として思い当たることにしても、職種や年齢や性別による相違はほとんどなく、「みな同じような疲れかたをする」ということになる。ここで比較した属性の回答者の間では、仕事の質や体力が違うであろうと思われるが、結果はそのようであった。

２．４．　空いた時間の使い途

通勤時間が半分になったら空いた時間をどう使うかについても訊ねたが、質問文はつぎの様に示した。

「通勤に関係するご意見、ご感想をうかがいます。2)の他は、あてはまるものに○印をつけて下さい。という文言に続いて、1)通勤時間は負担ですか。2)あなたにとって許容できる通勤時間はどのくらいですか、として時間を回答してもらう設問につづいて、「3)もし、いまの通勤時間が半分になったら、空いた時間を何に使いますか。」のもとに、つぎの選択肢を挙げた：

1．睡眠　　2．くつろぐ　　3．テレビをみる　　4．本や新聞を読む
5．家族との団らん　　6．子供と遊ぶ　　7．子供の教育
8．けいこ事・趣味　　9．地域社会での活動　　10．何もしない
11．その他（　　）

この設問においては、「いくつでも○印を」という、多重回答をうながす注意書きはいれなかったが、ある程度の多重回答がえられた。

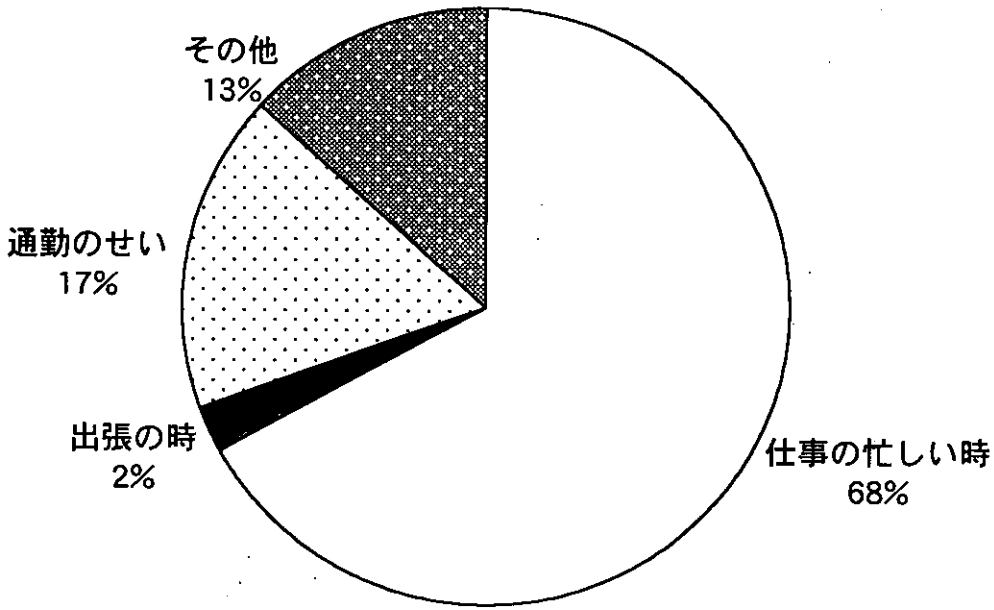
以下は、その回答に対する集計結果の分析である。

２．４．１．職種別の時間の使い途

「空いた時間の使い途」という円グラフ（図３４、３５）に、事務職と総合職とに分けて集計した。

睡眠という答の割合についてみると、事務職では、28 %なのに対して、総合職では21 %となっている。通勤時間の分布と出社時刻の分布は両者のあいだで大差がなかったが、退社時刻は総合職の方が１～２時間くらい遅かったわけだが、それにもかかわらず、退社時刻の早い事務職に空いた時間を睡眠時間にあてるという回答比率が多かったことになる。年齢分布や仕事の質を考えれば、さらに総合職の方が疲れやすそうにみえるのだが、それにもかかわらず、総合職の方が睡眠時間にあてるという回答の割合が小さかったことになる。

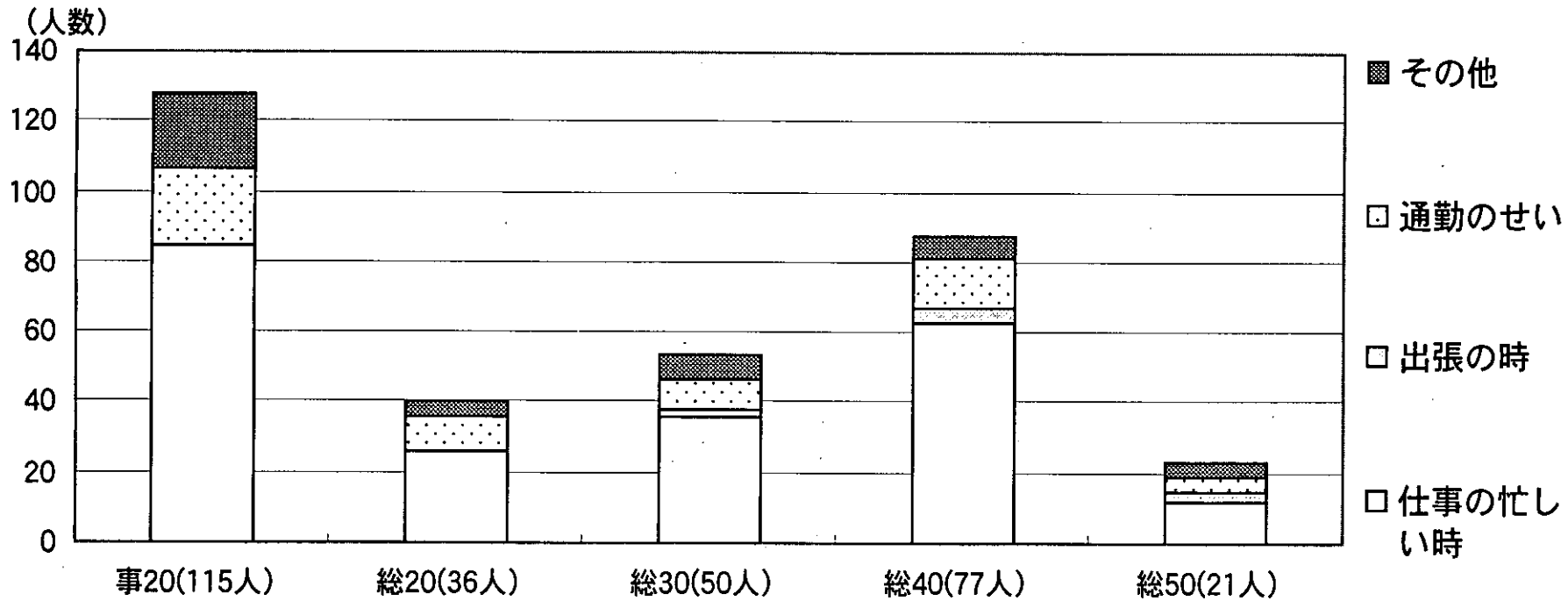
「くつろぐ」の回答の比率も事務職の方が、総合職より大きい。「テレビをみる」の割



＊無回答2名

図32　疲労の原因

（疲労感を覚えるかという問に対して、「いつも」か「ときどき」と答えた人330人中）



＊無回答４名

事 20：20 才代事務職（女）	総 20：20 才代総合職（男）	総 30：30 才代総合職（男）	総 40：40 才代総合職（男）	総 50：50 才代総合職（男）

図 33　疲労の原因（333 件）

（疲労感を覚えるかという問に対して、「いつも」か「ときどき」と答えた人 303 人につき）

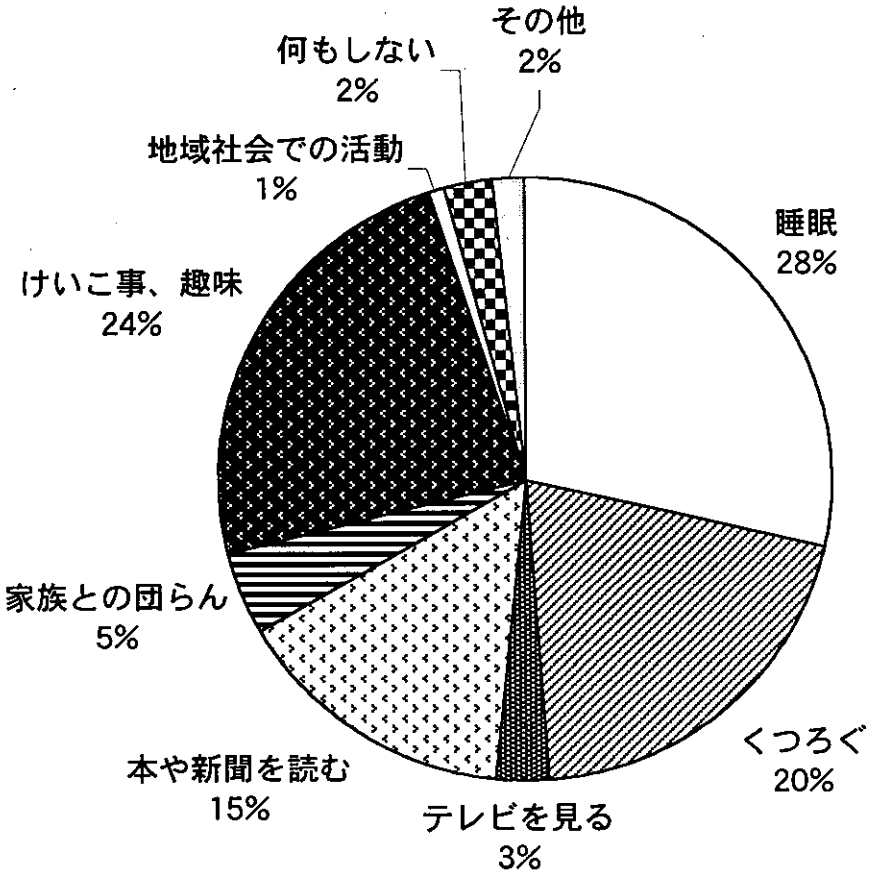


図34　空いた時間の使い途
（事務職152人、242件）

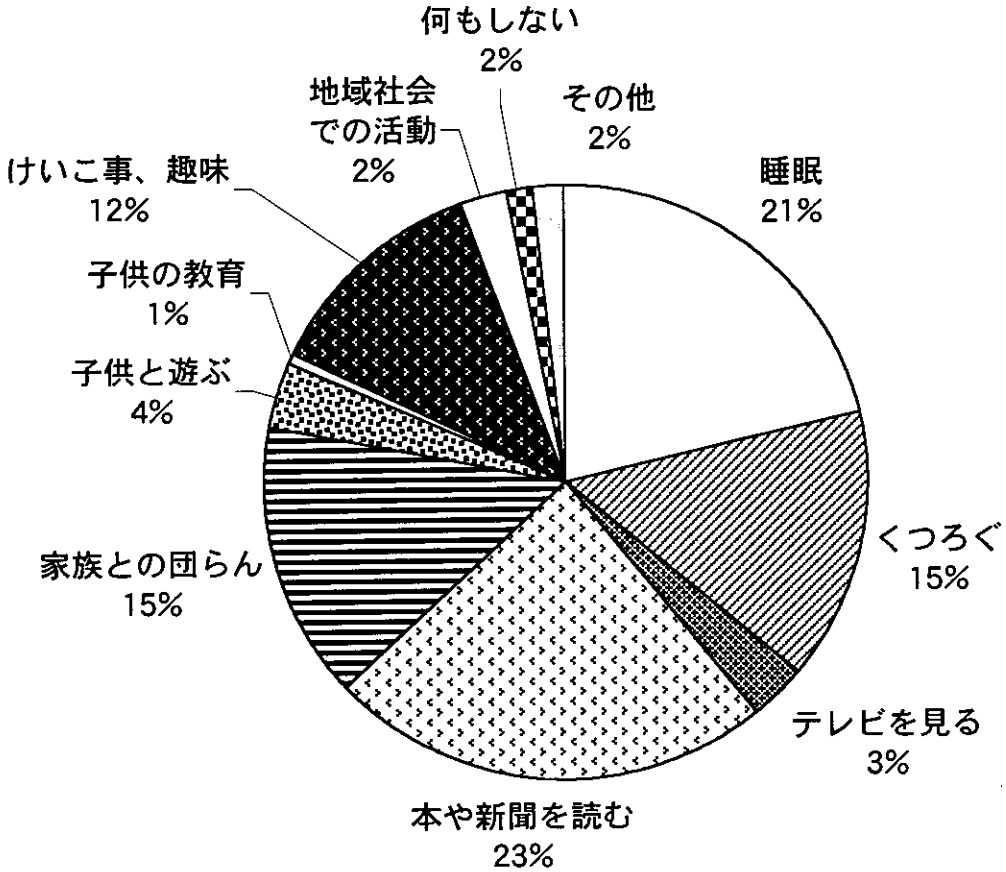


図35　空いた時間の使い途
（総合職218人、386件）

合は、事務職と総合職との間でほぼ同じである。「本や新聞を読む」の割合が総合職でやや多いのは、「職種別始業前の時間のすごし方」の回答において、総合職の方に「新聞・雑誌を読む」の答が非常に多かったのと対応しているのだろう。むしろ、ここでは「職種別始業前の時間のすごし方」のときの「新聞・雑誌を読む」の答ほど、二つの職種の間の差が大きくないことに注意すべきかもしれない。

「家族との団らん」が、総合職では15%、事務職では５ %というのは、事務職においては、若年の未婚者が多いことによるだろう。年齢分布が事務職とくらべて年長よりで、既婚者の割合も多い総合職においてさえも、「子供と遊ぶ」と「子供の教育」の比率は決して高くはない。しかし、「家族との団らん」と「子供と遊ぶ」と「子供の教育」との率を足し合わせてみると、当世が『家庭のない家族の時代』[2]であってみれば、それにも関わらずかなりの高率だというべきなのかも知れない。

「地域社会での活動」は、総合職の方が割合が大きいが、いずれにしても割合の数値そのものは小さい。「会社人間は地域との関わりが希薄」と見ていいのではないか。それにしても、「家族との団らん」にくらべて、「地域社会での活動」が後回しになるのはいたしかたないと言うべきかもしれない。また、質問が「通勤時間が半分になったら」という前提のもとでのことなので、出勤日のわずかな時間をいちいち「地域社会での活動」にあてるという発想にならないのかもしれないということはあるだろう。

「けいこごと・趣味」が事務職では、総合職の２倍以上の24 %あるのは、事務職のものの年齢・性別のことも考えあわせてうなずけるというべきだろう。

２．４．２．空いた時間の使い道と睡眠時間の関係

この分析を試みたのは、睡眠時間の短いものほど、空いた時間を睡眠に当てたがるだろうという推測にもとづいている。その結果は棒グラフで示した方の「空いた時間の使い途と睡眠時間」（図３６，３７）にみられる。総合職では、ほぼそのような傾向になったが、事務職では、睡眠時間が一番短い区分で、睡眠時間に当てたいというものの比率が下がるという結果がでた。その代わりのように睡眠時間が長い方のとなりの区分とくらべてみて、「テレビをみる」と「家族との団らん」が現れている。

事務職では、睡眠時間が長くなると、空いた時間を「くつろぐ」ことにあてたいという比率が大きくなる。他のことは、事務職においては睡眠時間とたいして関係しない。

総合職では、「睡眠」の他のことについては、睡眠時間とのあいだに明らかな関係があるとはみえない。

なお、図３６，３７に示している睡眠時間区分は、「職種別の睡眠時間」（図２９）にみる睡眠時間区分のうち、比較的人数の多い区分のみを示している。

２．５．　通勤時間の考慮と住居の選択との選択

入社時にいまの家に住んでいた人と、入社後にいまの家に入った人に分けて、前者にはその家からの通勤時間への考慮の有無、後者にはその家の選定の事情を聞いた。具体的な設問は、以下のⅢとⅣとに示す。それらの設問に続いて、全員に住居の住み替えの意志の有無と、選定にあたって考慮することを訊ねている。

２．５．１．入社時に通勤時間をどのように考えていたか

まず、入社時にいまの家にいた人を対象にした質問から検討しよう。

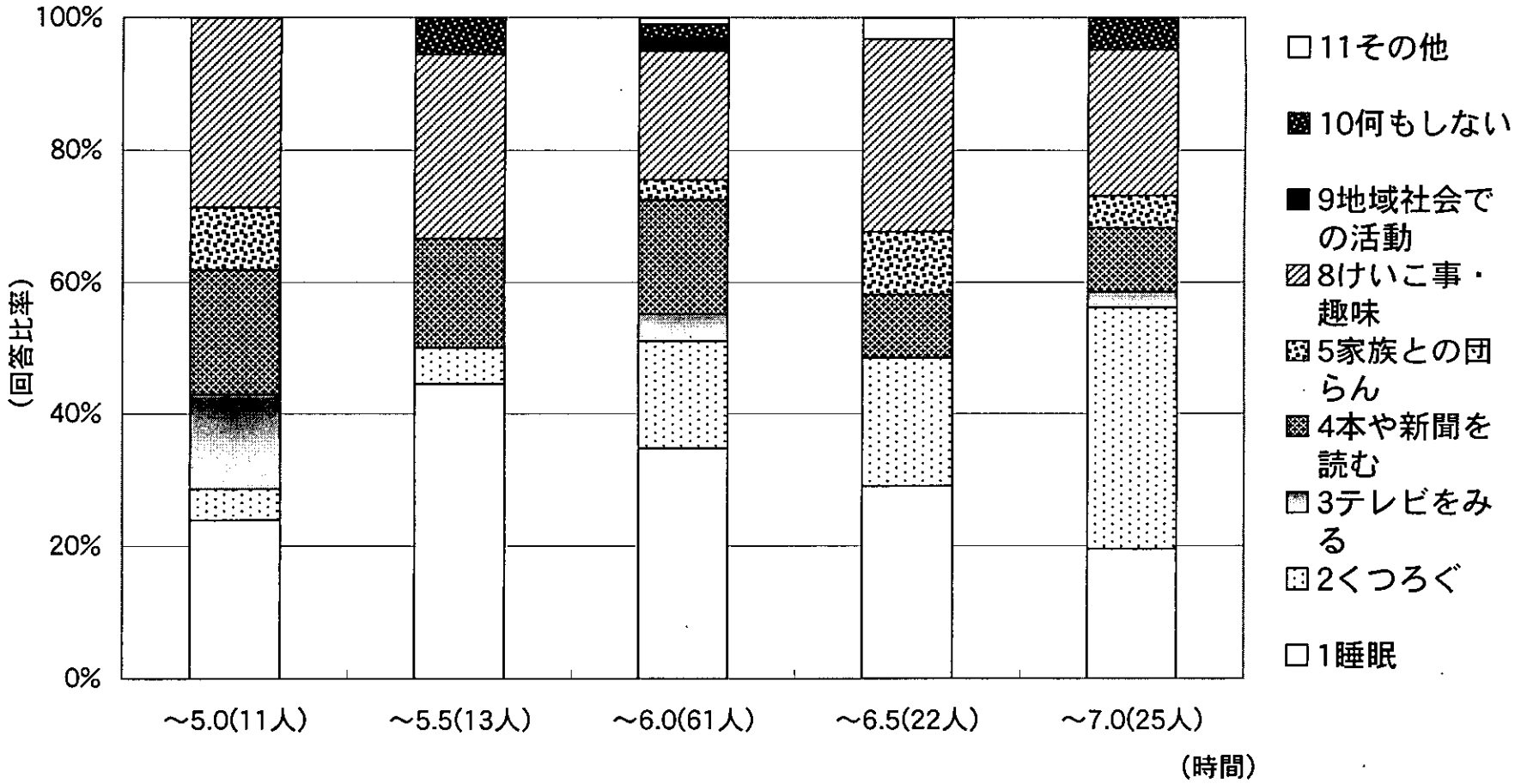


図36　空いた時間の使い途と睡眠時間
（事務職152人中回答132人）

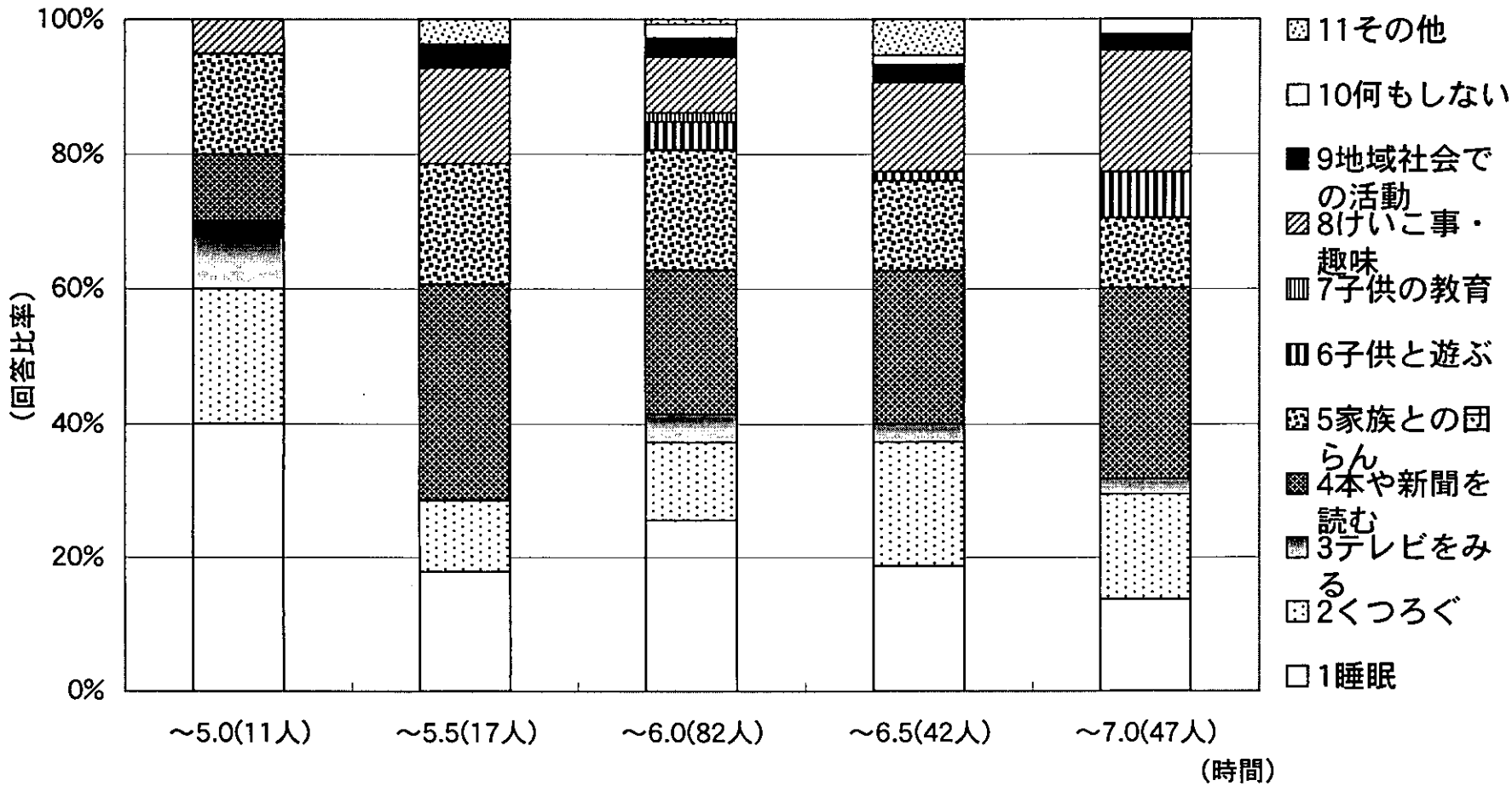


図37　空いた時間の使い途と睡眠時間
（総合職218人中回答199人）

質問は、次のように提示した：

Ⅲ．今の家に住んでいて入社された方に、入社のときの判断についてお尋ねします。あてはまるものに○印をおつけください。

（そうでない方は、次のページのⅣへお進み下さい。）

としたのち、その下でつぎの様な設問をおいた。

1) 入社のとき、通勤時間のことをどのように考えましたか。

1．通勤時間の長さは負担になると思ったが、会社を選んだ。

2．通勤時間の長さは負担にならないと思った。

3．通勤時間の長さのことは考えなかった。

4．その他（　　）

この質問に対する回答の集計を図３８「入社時に通勤時間をどのように考えていましたか？」にみる。「負担にならないと思った」と「考えなかった」とを合わせれば、回答比率は80％に達する。当今の東京都心への通勤事情のことを考えれば、さきにみたところの通勤時間の分布のグラフと対照してみても、うなずけるというべきではなかろうか。むしろ、14％と比率は低くとも、通勤時間を負担としながらも会社を選んだ者がいることに注意をしておくべきだろう。

２．５．２．入社後の住まいについて

さきの質問につづいて、入社後の住まいについて聞いた。質問は次のようである：

2) 入社後の住まいについて。

1．変えるつもりは入社時からなかった。

2．住まいはあとから変えてもいいと思った。

3．住まいはあとから変えるつもりでいた。

回答は、さきの質問に回答した136人中134人からえられた。結果を、円グラフ「入社後の住まいについて」（図３９）に示す。

「変えるつもりでいた」と「変えてもいいと思った」との回答比率の和は、たまたまさきの質問に対する「負担になると思った」の回答比率と一致しているが、それはともかくも、うなずきやすい数値といえよう。

２．５．３．住居選択が場所の選択の問題ではなかった理由

次に、入社後にいまの家に入った人に対する質問の回答を調べる。質問は、つぎのようであった。

Ⅳ．入社後に、今お住まいの家に入られた方にお尋ねします。あてはまるものに○印をおつけください。

としたのち、その下でつぎの様な設問をおいた。

1) その家に決められるときは、どんなことを考慮されましたか。

1．次の理由で、場所の選択の問題ではなかった。

右のどれであるかに○印をおつけ下さい	a)社宅である　b)相続した c)配偶者の家である d)親（自分の、配偶者の）と同居した e)その他（　　）

2．次の点を考慮した。

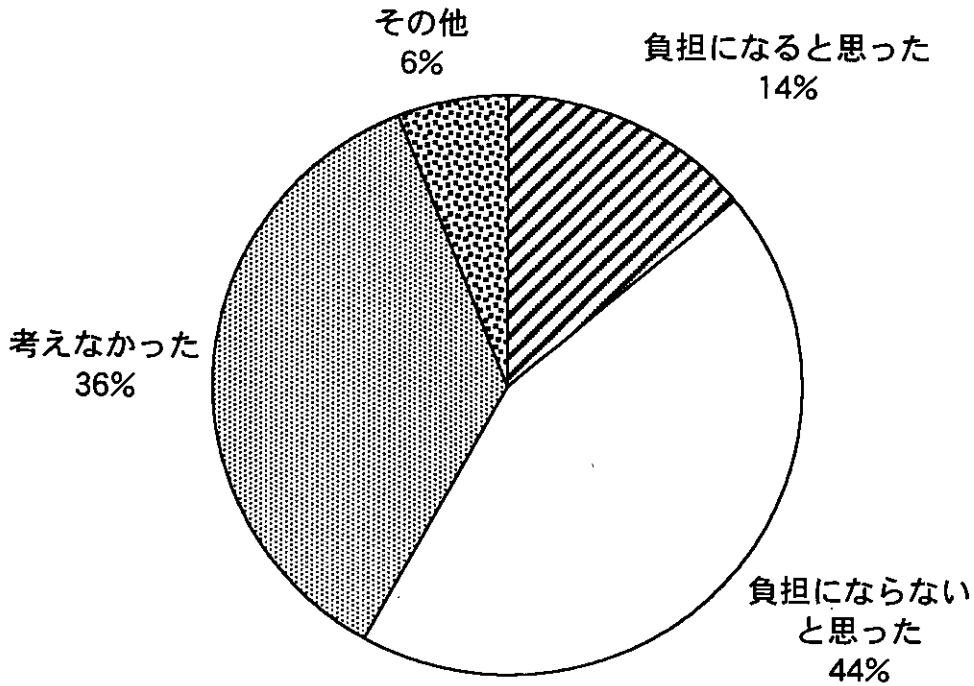


図38　入社時に通勤時間をどのように考えていたか？
（135人）

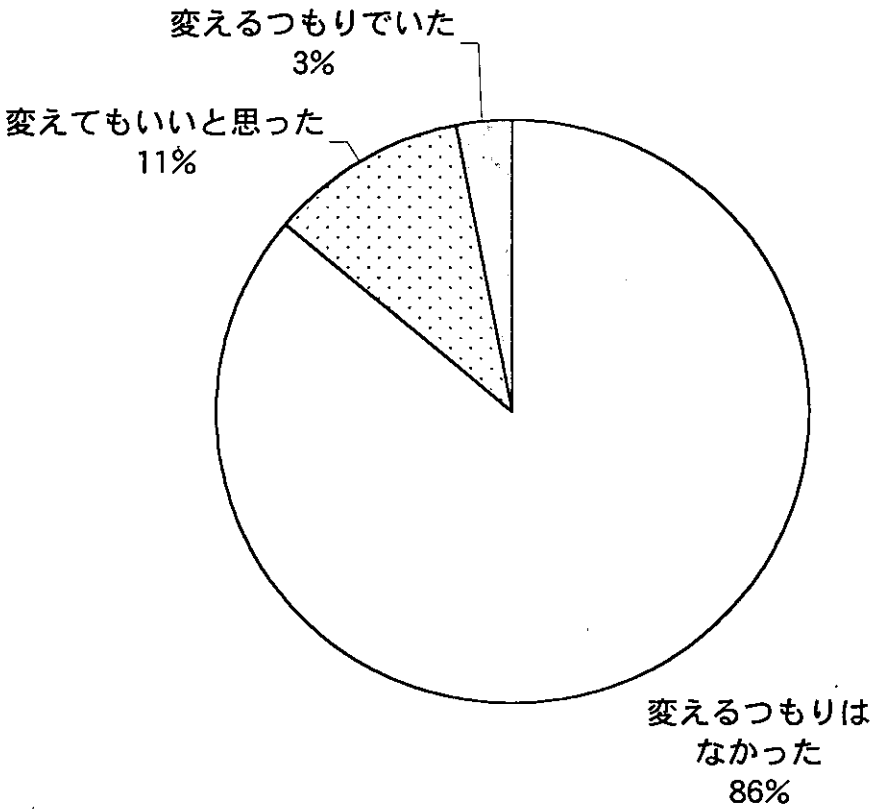


図39　入社後の住まいについて（134人）

右のどれであるかに○印をおつけ下さいなお、最も重視したとには、◎印をおつください。

a). 値　段　　b). 家屋の広さ
c). 庭のあること、その広さ
d). 一戸建てか共同住宅か
e). 通勤時間　　f). 子供の学校
g). 配偶者の仕事　　h). 親の住まいのこと
i). それまでの地域とのつながり
j). 周辺の利便　　k). 周辺が静かなこと
l). 周辺の空気がきれいなこと

まず、「場所の選択の問題ではなかった理由」すなわち、設問の１．について検討しよう（図４０）。場所の選択の問題ではなかったとは、そこを「取るか取らないか」の問題であって、位置を変える訳にはいかなかったことを意味することは、選択肢からも分かるであろう。

まず、「社宅」が圧倒的に多い。つまり、それだけ社宅住まいのものがいるということである。なお、同社には、首都圏に社宅５、独身寮２があるという。相続により場所が決まってしまったというものの比率は極めて低い。「同居」と「配偶者の家」という親族関係によるものを合わせても、８％にしかならない。

２．５．４．住居の選択の際に考慮したこと

つぎに、上の設問の２．の回答を円グラフ「住居の選択の際に考慮したこと」（図４１）により検討する。設定した選択肢の多様さそのままに、回答がかなりまんべんなく分布している。また、一人平均3.7項を選んでおり、考慮したことが当然のこととはいえ、各人にとっても多々あることになる。「値段」と「通勤時間」との比率が特に高いのは、まさに住居選択の基本事項であって当然であろう。なお、「家の形態」とは、「一戸建てか共同住宅か」のことである。

なお、設問の１．と設問の２．の一方あるいは両方に答えたものの数は、218人であった。すなわち、45人は両方に答えていることになる。これらの人達は、設問の１．の場所の選択の問題でない住居に入るにしても、設問の２．で挙げることのいずれかを考慮したということになる。

なお、Ⅲ．とⅣ．との両者に回答したものがあったが、その回答はどちらの集計からも除いている。

２．５．５．住み替え

住み替えについて訊ねた結果を検討しよう。これは当然ながら全員に対する質問となる。

質問は、具体的には次のように提示した。すなわち、

Ⅴ．家の住み替えについてお尋ねします。あてはまるものに、○印をおつけ下さい。

としたあとで、つぎの２つの問を設けた。

1)　今の家の住み替えについて
　１．具体的に計画している。
　２．住み替えを望むが、具体的には考えていない。
　３．住み替えは考えていない。

2)　上の質問で１（具体的に計画）に○印をつけられた方にお伺いします。
　計画するにあたって、考慮していることがあれば、いくつでも○印をおつけ下さい。

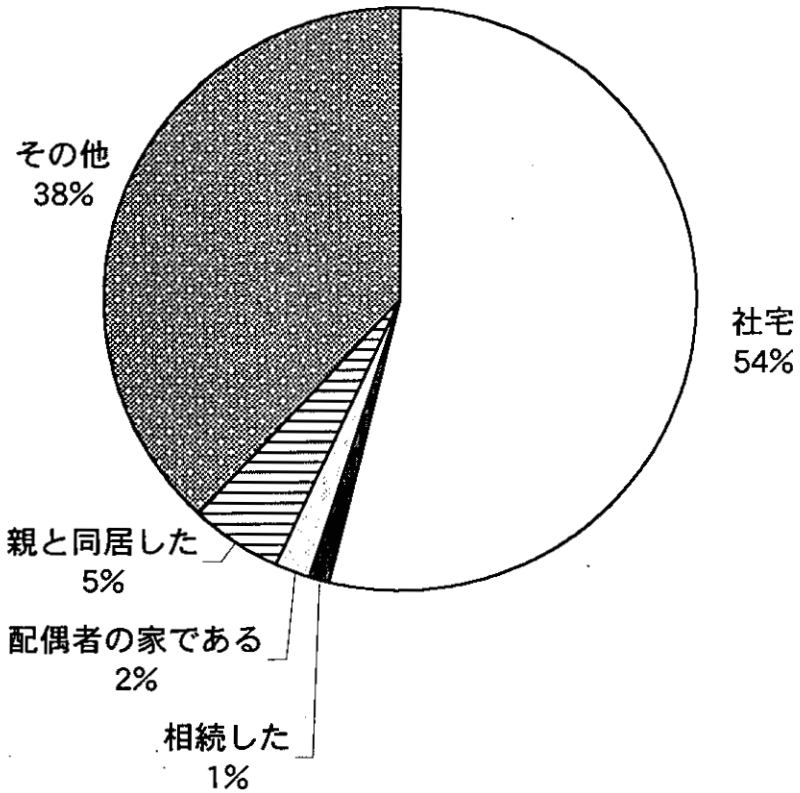


図40　場所の選択の問題ではなかった理由
（109人）

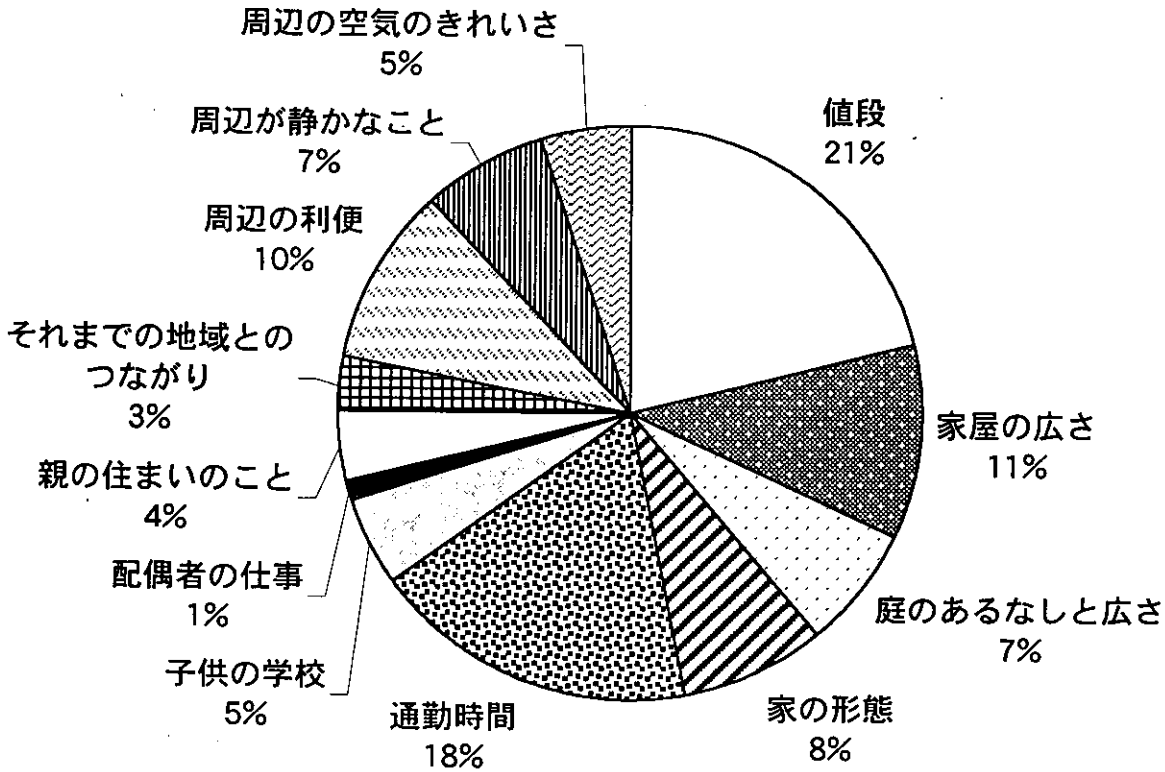


図41　住居の選択の際に考慮したこと
（154人570件）

最も重視していることには、◎印をおつけください。

1．値　　段　　2．家屋の広さ
3．庭のあること、その広さ　　4．一戸建てか共同住宅か
5．通勤時間　　6．子供の学校
7．配偶者の仕事　　8．親の住まいのこと
9．これまでの地域とのつながり　　10．周辺の利便
11．周辺の静かなこと　　12．周辺の空気がきれいなこと
13．その他（　　）

まず、「今の家の住み替えについて」の回答は、「住み替え」の円グラフ（図４２）のとおり。「具体的に計画している」と「望むが具体的ではない」を合わせると、43 %が住み替え指向ということになる。問題は通勤時間だけのことではないのはもちろんだが、住居についてかなり多くの回答者に住み替え願望があるといえる。

２．５．６．住み替えに考慮すること

上記の設問2)の「計画するにあたって、考慮していること」の回答を検討する。「具体的に計画している」と回答したものが、この質問に答えることを求められたわけだが、該当する３２人中３０人が回答した（図４３）。ここでも、選ばれた回答は多様で、広く分布している。また、一人当たりの選択肢の選定数は、ここでも3.7である。その「住居の選択の差異に考慮したこと」のときと違って、ここでは「家屋の広さ」への配慮が「通勤時間」をこえている。計画段階と実行後との相違にもよるだろうし、計画しているというのが、いわゆるバブル経済崩壊のあとのことだから広さのことをいう余裕ができたという説明もできよう。

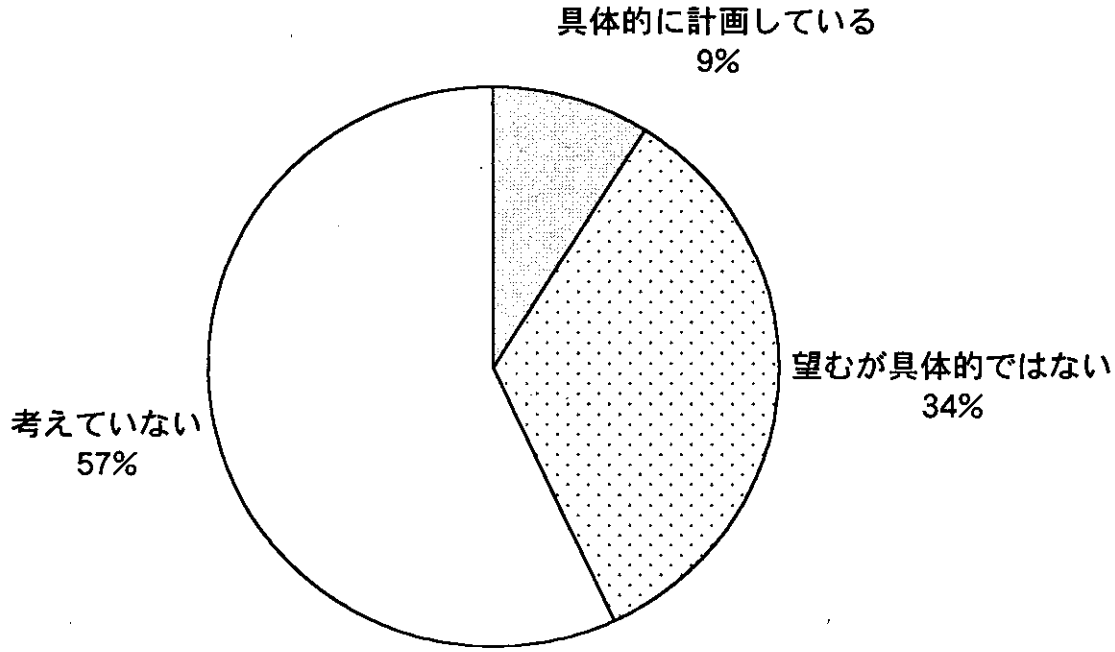
２．６．　迷惑・不快・気になる音

「音について、迷惑なこと、不快なこと、気になることをお尋ねします。あてはまるものには、いくつでも○印をおつけ下さい。」として、順次、職場・通勤途上・自宅にあっての音について訊ねた。日常の音は、もっとも端的に人々に感受され、そして状況依存性の著しい環境質であると考えて、この様な設問をおいた。

回答データの集計にあたっては、グラフの下に注記してあるように、総合職は男性のみをとっている。また、事務職はもともと女性のみであるが、人数の少ない３０歳代以上は示していない。この様にしたのは、２０歳代の事務職と総合職とを比べたとき、職種ないしは性別の相違として比較でき、総合職同士で比較するとき、性は同じで年齢層だけが違うようにするためである。

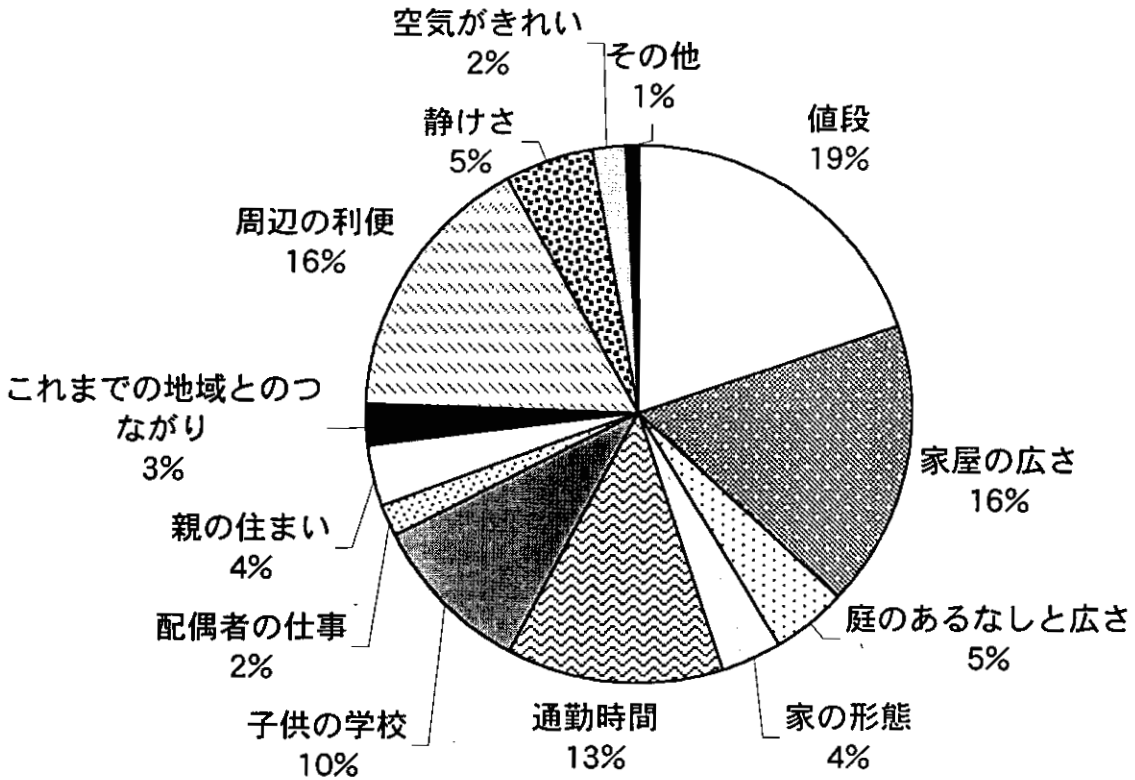
２．６．１．職場において

結果は図４４に示すが、総合職で年齢が上がると「話し声」の比率が下がる傾向がある。「話し声」に「電話の声」を合わせても、同様である。ところが、「街宣車（選挙以外）」の比率は、総合職において単調に年齢が上がると比率も増える。同じ「人の声」ではないか一貫性がない、と見るにもおよばない。「街宣車」というのは、街宣車一般の音として聞かれているのではなく、自分の会社についてなにか言っているかということに注意して聞いているのである。なおかつ、街宣車が東京都条例の規定によって、一箇所に長くとどまっていることができないので、移動して歩くので必ずしも遠くに音源が移動したから自



＊無回答10名

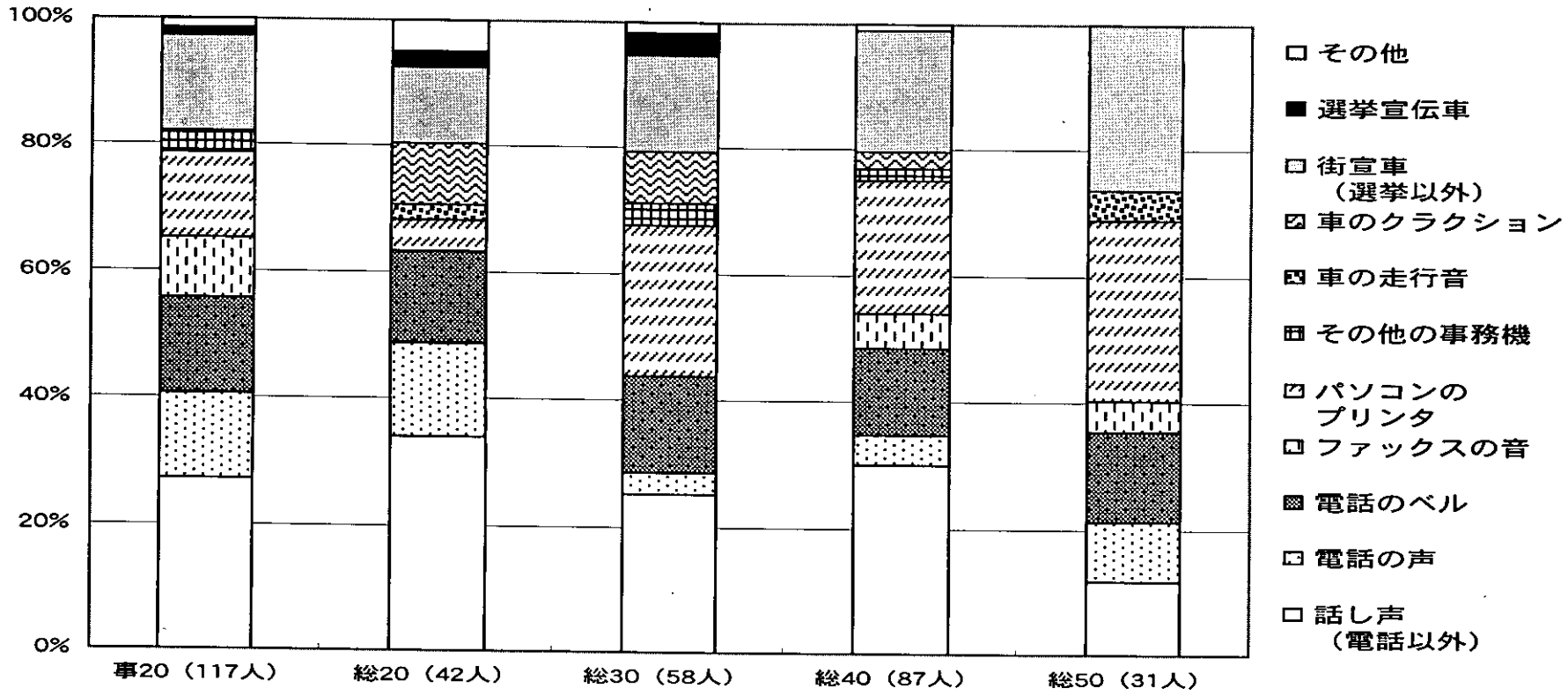
図42　住み替え（370人中）



＊無回答2名

図43　住み替えに考慮すること

（住み替えを計画していると答えた人32人について、111件）



事 20：20 才代事務職（女）	総 20：20 才代総合職（男）	総 30：30 才代総合職（男）	総 40：40 才代総合職（男）	総 50：50 才代総合職（男）

図 44　職場の迷惑・不快・気になる音（335 人中）

分の会社とは関係のないことを放送しているとは限らないので、音源が遠ざかっても関心は低下しないという事情がありそうだ。年齢が上の方がより管理的な仕事をするものが多いなら、街宣車の放送内容への関心も高いだろう。質問紙配布まえに行った社員に対する聞き取りの回答にあった話では、総務部では、街宣車の放送目的を聞くのも仕事であって、たんにうるさいのとは違うという。

建物の外からの音として、「車のクラクション」の比率をみると、総合職で年齢が低い方が比率が高い。だから、「街宣車」に対する反応が、年齢が上がった方が外部からの音の聞こえやすいところにいるからだろうとか、あるいは窓外の音に関心が向いているのだとはいえないことになる。

「パソコンのプリンタ」の比率は、総合職２０歳代でとくに小さく、５０歳代で最大になっている。これは、２０歳代のものが、完全にパソコン世代になっている一方、５０歳代はパソコンになじめないでいるとも解釈できる。あるいは、さらに２０歳代のものは、自分でパソコンを常時叩くが、年齢があがるとそれほどでもないということも原因になっているのかも知れない。「パソコンのプリンタ」についてのこの解釈は、２０歳代の総合職と事務職とのそれぞれの「パソコンのプリンタ」の比率を調べるとどうなるか。事務職のものも、総合職の３０歳代やそれ以上の世代に比べると、比率は低いので矛盾はしない。それでも、総合職と事務職とでは「パソコンのプリンタ」に対する比率がかなり違う。これは、職種によるパソコンの使い方の違いか性差によるパソコンという機械に対するなじみかたの相違ではないか。「パソコンのプリンタ」に対する比率の違いを、パソコンに対するなじみのあるなしで解釈することが妥当とみえるのは、「電話のベル」に対する比率が、職種・年齢でほとんど違わないことにもうかがえる。電話を除いた機械に対する抵抗感として解釈するのが妥当にみえるのは、「ファックスの音」、「パソコンのプリンタ」、「その他事務機」を併せたものについての比率をみてもわかる。この三つの音のうち、「パソコンのプリンタ」のみに対して、それも低い比率で、２０歳代の総合職は反応している。

「パソコンのプリンタ」への抵抗感が、利用状況をふくめたなじみ方の世代の間の違いによるという主張をより確かにしたければ、年数をおいて似た状況において同様の調査をすることが望まれるわけである。一般に、或る集団についての或るときの調査において、音への感受性が年齢によって違った結果をあたえたとき、それが、世代によってもたらされたか、年齢によっているかは、つねに問題になるところである。もし、それが世代によるものならば、「電話のベル」のように、いずれは年齢による差を気にすることはなくなるのだから。なお、年齢にはよらないと分かった音をだすものの普及利用が進んでも、年齢とか世代とはまた違った個人差のような感受性の差がありうるので、配慮をしなければならない問題が残ることはもちろんである。

ここで、職場についての設問を掲げておく：

職場にいて、迷惑だったり、不快だったり、気になったりする音は

１．話し声（電話以外）	２．電話の声	３．電話のベル
４．ファックスの音	５．パソコンのプリンタ	６．その他の事務機
７．足　　音	８．車の走行音	９．車のクラクション
10．街宣車（選挙以外）	11．選挙宣伝車	
12．その他		

２．６．２．通勤途上において

結果を図４５にみる。まず、「ウォークマン類」が、各層の間で相談をしたかのごとく、ほぼ同じ比率、それも、40 %余になっていることだ。事前聞き取りで、「ウォークマンは最近減った」、「最近いない」との回答もえられているが、集計するとグラフのようになる。もちろん、事前聞き取りでもウォークマンを不快とする回答もえられている。事前聞き取りの回答のなかで、ウォークマンや新聞について「自分の世界に入り込み周りの迷惑を考えない」といっているのは鋭いし、不快などの感覚の原因をよく突いているといえる。新聞とあわせて指摘しているという意味でも、問題が必ずしも物理的な音にあるわけではないということが分かる。これは当今ならばケータイと対応するのであろう。

「駅などのアナウンス」に対する比率は、総合職で年齢があがると大きくなる。総合職５０歳代では、「ウォークマン類」よりもわずかながら高率でさえある。これは、職場における「話し声」の傾向、あるいは、「話し声」と「電話の話し声」を併せた比率の傾向と逆転する。どちらも、人の声である点では同じなのだが。一方、「発車ベル」となると、総合職の２０歳代と事務職２０歳代が、総合職の３０歳代とそれ以上にくらべて、はるかに大きな比率である。「駅などのアナウンス」とともに列車運行にかかわる信号音だとみるならば、そのような括りでは好悪が決まっていないということがわかる。もっとも、「駅などのアナウンス」を信号音とみることが無理であって、そこには内容として各種の宣伝がふくまれている。さらに発声のしかたも、「話し声」というにはかなり感じが違うというべきだろう。

「電車の走行音」に対しても「発車ベル」同様に、若年層の方が高年層よりも比率が大きくなる。また、当然注目しなければならないのは、「ウォークマン類」と「電車の走行音」とでは、音圧レベルが前者の方がはるかに低いことである。もちろん、設問が「うるさい音」、「やかましい音」を訊ねるものではなかったことも押さえておく必要はあろう。このことは「音は何故騒音になるか」を問うときに重要な鍵になるだろう。実際、事前聞き取りで、「電車の音は自然音」と言ったものがいた。さきの、「自分の世界に入り込み周りの迷惑を考えない」というウォークマンなどについての指摘をした同一人物の回答である。ここで「自然音」というのは、そこにあってしかるべき音というほどの意味であろう。ここに、音のレベルや聞こえる頻度ではなく、音種あるいは行為についてのイメージや状況へのふさわしさにもとづいて好悪が決まっていることがうかがえる。

通勤途上については、２０歳代の総合職と事務職との回答における音種の比率に大差はない。通勤途上については、性差より年齢差が顕著といえるだろう。

通勤途上での設問はつぎのように示した：

通勤途上で、迷惑だったり、不快だったり、気になったりする音は

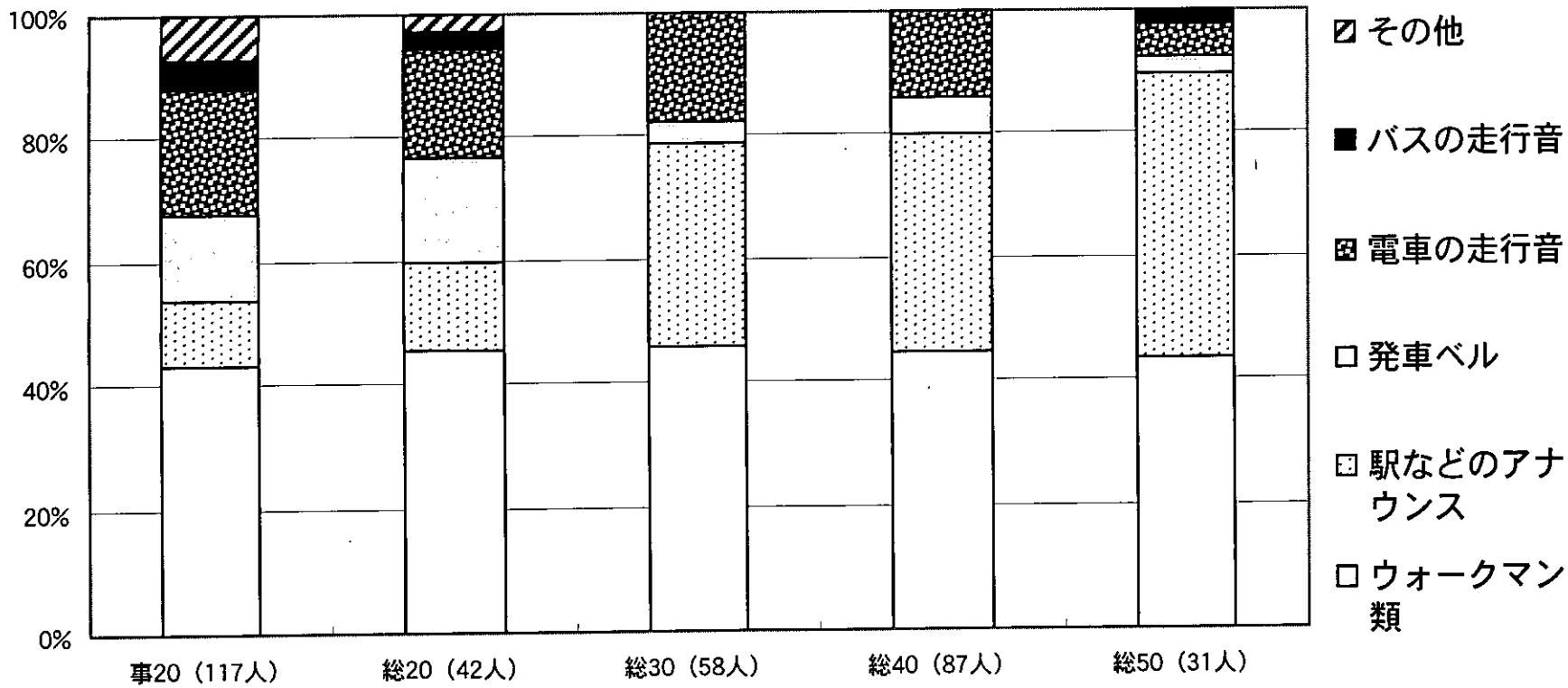
１．電車の走行音　　２．バスの走行音　　３．駅などのアナウンス

４．発車ベル　　５．ウォークマン類

６．その他

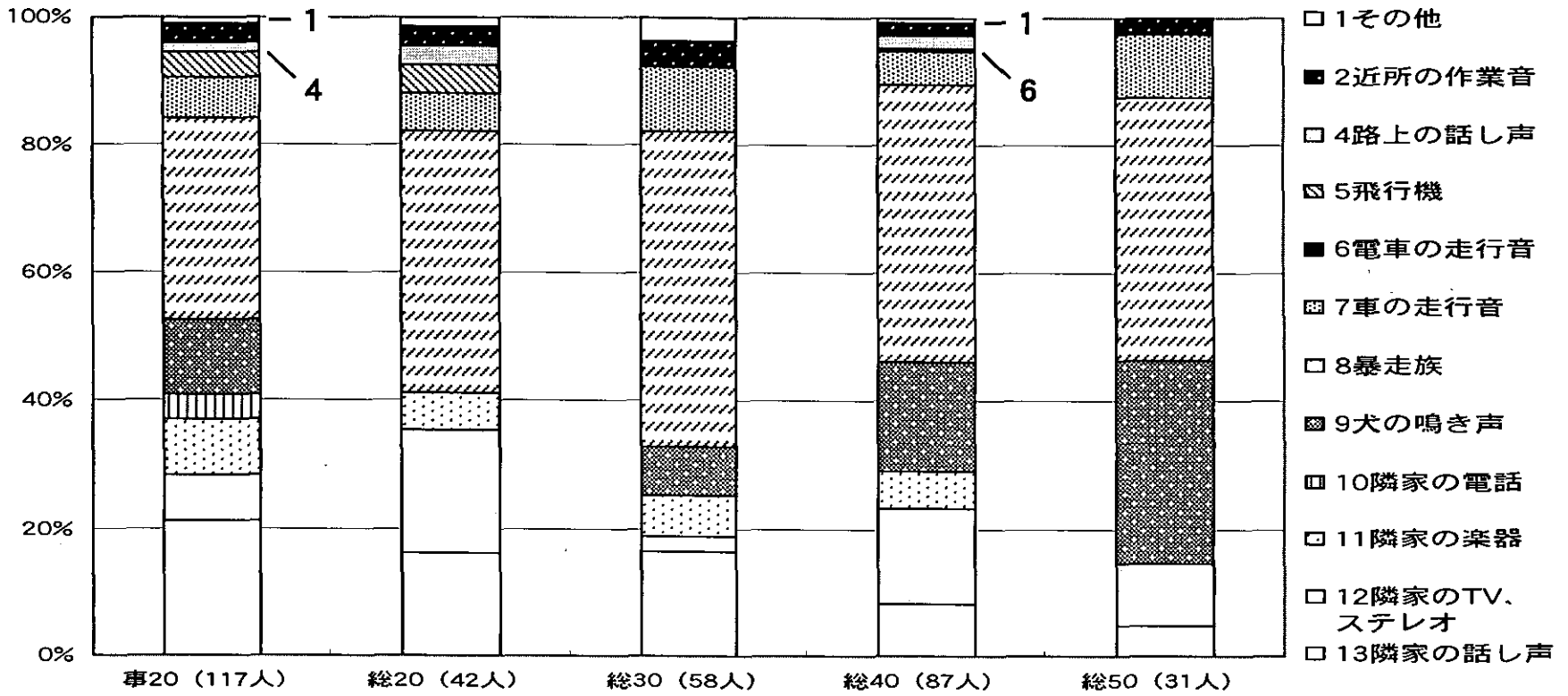
２．６．３．自宅において

図４６をみよう。「暴走族」が、職種・年代をこえて、どの回答者群でも大きい比率で回答される。総合職３０歳代で50 %であり、事務職でも30 %を優に越える。これは驚くべき高率というべきかも知れない。住んでいるところがある程度閑静ならば、たまに聞こ



事 20：20 才代事務職（女）	総 20：20 才代総合職（男）	総 30：30 才代総合職（男）	総 40：40 才代総合職（男）	総 50：50 才代総合職（男）

図 45　通勤途上の迷惑・不快・気になる音（335 人中）



事 20：20 才代事務職（女）	総 20：20 才代総合職（男）	総 30：30 才代総合職（男）	総 40：40 才代総合職（男）	総 50：50 才代総合職（男）

図 46　自宅の迷惑・不快・気になる音（335 人中）

えることが記憶されているオートバイの音が選択肢群をみてまず思い出されて○印がつくというのだろうか。事前の聞き取りでも、自宅で音について迷惑なこと、不快なことを訊ねたとき、「暴走族」の音の指摘はあったが、深刻さの訴えはなかった。回答される比率が大きいことと、迷惑さが深刻なこととは別なようだ。調査票のうえで、「うるさい音」とか「やかましい音」とかを訊ねたわけではないことも思い出すべきだろう。ここでも、通勤途上における「ウォークマン類」と同じように、音種あるいは行為に対するイメージにもとづいて回答がなされているのだろうということがみてとれる。

また、ここで、暴走族という語はそれ自身が否定的ニュアンスをもっているから、この選択肢はいささか誘導尋問だという見方もあるだろう。「いわゆる暴走行為」くらいがよかったかもしれない。しかし、選択肢を日常語で示そうとすれば、「暴走族」に落ち着くのではないか。

「犬の鳴き声」の回答比率が、総合職では年齢が上がるにつれて上昇する。これは、ペットを飼ってもさしつかえない一戸建ての家が多いところに住む人の割合が、年齢とともに増えるということであろうか。同じ２０歳代でも、事務職のものは或る程度の比率で「犬の鳴き声」を挙げるが、総合職では皆無になっている。図１２にみるように、事務職では親の持ち家に住むものの割合が多いので、総合職についてと同様に説明できるのかもしれない。しかし、「犬の鳴き声」のときだけは、音のイメージでなく音源の存在によって説明をしているといわれるかもしれない。

「隣家の話し声」は、年齢が上がるにしたがって比率が下がる傾向がある。これは、職場においての「話し声」に対する比率と同様の傾向といえる。

一方「隣家のＴＶ、ステレオ」については、回答者群のあいだでの比率の差が大きいのに、年齢による減少とか増加とかの傾向はみいだせない。

隣家にかかわるこれら２項目のほかに、「隣家の楽器」と「隣家の電話」を加えて、「隣家の音」の回答比率としてみると、総合職で年齢が高いと回答比率が下がる傾向がある。２０歳代では、事務職と総合職とで比率が一致して40 %超になっていて、３０歳代以上のどの総合職群よりも大きい比率になっている。この原因を、住居の相互近接や住宅の遮音性能に求めるか、あるいは総合職では年齢があがるにしたがって自分自身の持ち家のもの割合が多くなって隣人との関係を大切にしていることによるかは定めがたい。

「車の走行音」は、どの回答者群でも指摘される。「近所の作業音」も同様。それにしても、「車」は分かるとして、「作業」がそんなにどこでもあるのだろうか。

「飛行機」を指摘するのが２０歳代だけであることと、「隣家の電話」が２０歳代事務職だけがあげていることがその他の特徴だろう。これらの回答比率は、それぞれの回答者群の回答件数のなかで、４ %ほどなので、これらの回答者群にたまたま現れたともとれる。

「隣家のクーラー」は選択肢にあったにもかかわらず、この住宅においての質問への回答としての項目の選択が延べ525個あったなかで一つも選ばれなかった。クーラーというのは、近隣騒音の原因音種としてしばしば苦情申し立て者が指摘するものである。実際、公害苦情の状況について申し立て者が書いた自由記述による回答文の分析でも、「クーラー」は公害苦情のもととなった迷惑・被害の原因を示す記述語のなかでも上位に現れるし、さらに、共通した多くの回答者によって記述された単語同士の類似度が大きくなるように

回答文の記述語をクラスター分析すれば、「隣家」と「クーラー」との２語が一つのクラスターを作る[3]。それにもかかわらず、「隣家のクーラー」が、この苦情申し立てについての調査ではない都市環境に関する実態調査での回答において、選択肢のなかに挙げられているにもかかわらず選ばれなかったということは面白い現象だ。このことは、隣家への屈折した感情の投影、あるいは発露として苦情を申し立てている場合には、空調室外機は「家の外に向けられたもの」として公害事由として口実になりやすいということを示すのだろう。まさに、「別件型苦情」[4]の発生事情を指し示しているように思われる。

なお、自宅についての質問はつぎのようにした：

自宅にいて、迷惑だったり、不快だったり、気になったりする音は

１．隣家の話し声	２．隣家のテレビ、ステレオ	３．隣家の楽器
４．隣家の電話	５．犬の鳴き声	６．暴走族
７．車の走行音	８．電車の走行音	９．飛行機
10．路上の話し声	11．隣家のクーラー	12．近所の作業音
13．その他		

２．７．　通勤途上で感じる困難・迷惑・不快なこと

音の問題として「通勤途上で、迷惑だったり、不快だったり、気になったりする音」を訊ねた結果を上に示したが、一般的な問題として「通勤途上で感じる困難・迷惑・不快」は何かを聞いている。この質問はじつは、調査票では「音について、迷惑なこと、不快なこと、気になること」についての質問のでてくる１ページ前にあらわれ、「職種別の時間の使い途」について聞いたその次に掲げられている。

質問の仕方はつぎのようである：

4)　通勤に関することで感じる、困難、迷惑、不快なこと、気になることはありますか。複数の○印をおつけになって結構です。

１．乗り物の混雑	２．乗客のマナー	３．いやらしい乗客
４．酔っぱらい	５．乗り物の運転本数	６．終電の時間
７．終バスの時間	８．夏のクーラーのない車両	９．乗り換え
10．その他		

なお、これに続いて、自由記述欄を設けて、「上にお書きのことと重なっても結構です、お書き下さい。」としているが、ここでは自由記述欄の回答については述べない。

集計結果を図４７「通勤途上で感じる困難・迷惑・不快」に示す。「乗り物の混雑」の比率が他にぬきんでて高い。「早く出勤する理由」（２．２．８．）のところでみたように、その理由として「混雑を避けるため」が圧倒的に多く回答者数の半数、回答件数でも半数近くを占めるのであったが、その様に早く出勤するものもいる状況のなかで、なおかつこの結果をえたということになる。通勤の問題が、通勤時間の長さだけにあるのではないことがよく示された結果といえる。乗り心地にかかわる「夏のクーラーのない車両」の比率も目立つ。調査時期を考えれば、喉元過ぎても「暑さ」を忘れていないことになる。乗り物の運行上のサービスにかかわる項目（「乗り換え」「終バス」「終電」「運転本数」）も足し合わせると24％に及ぶ。

乗客の質にかかわることでは、一般的な「乗客のマナー」が16％である。これに「いや

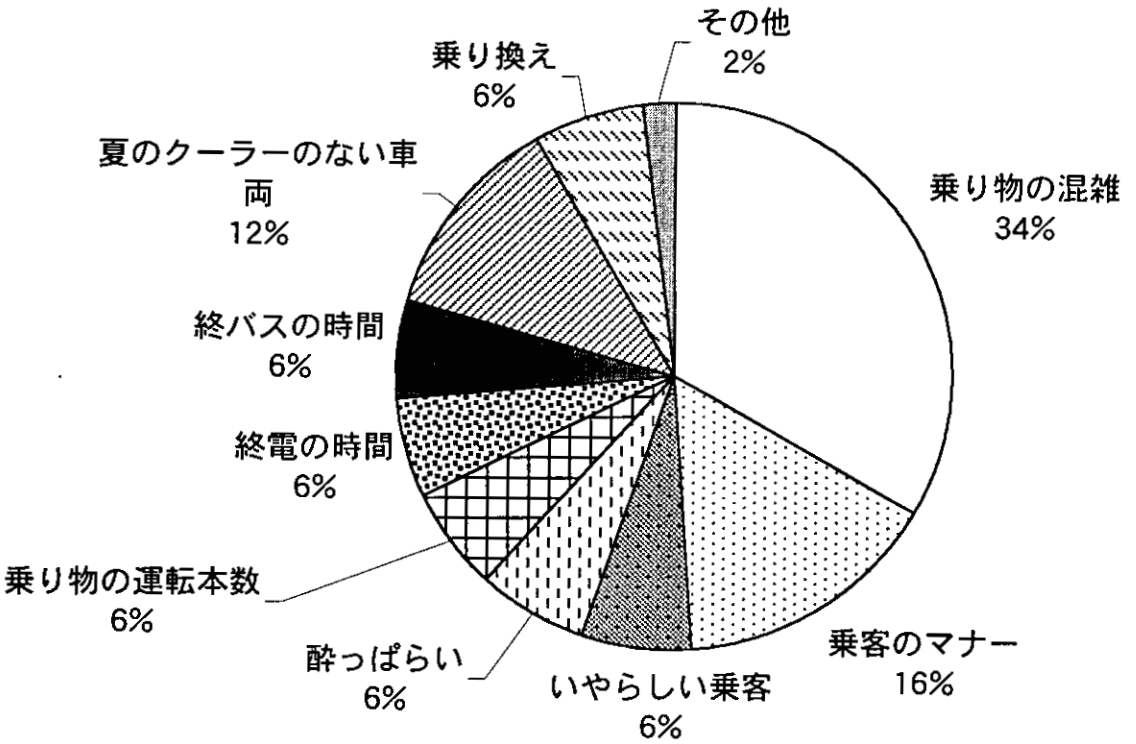


図47　通勤途上で感じる困難・迷惑・不快
(370人中、911件)

らしい」と「酔っぱらい」を足せば28%であって、乗客たち自身がかなりの問題源になっていることが分かる。

音に関わる回答が選ばれていないのは、そのような選択肢をおかなかったことによる。

第3章　考　　察

まず、回答者の属性だが、多くの事業所でも同じようなことは見られるのだろうが、事務職と総合職、それぞれの性別による比率、そうしてまたそれぞれの年齢分布、特に女性の年長者が極端に少ないこと、などが著しい特徴になっている。このことは、よくあることではあろうが、回答を分析し解釈するときにはつねに念頭においておかないと誤った判断をすることになる。

職場にゆくにも根拠地たる家があってのことだが、その所有形態としては、未婚者では親の持ち家というものが多い（60％以上）のは当然として、既婚者では本人の持ち家というものが過半数で、残りの半数が社宅住まい、それに続いて民間借家となっている。その本人の持ち家は値段やスペースと相談で取得しなければならないわけであって、所有形態別に通勤時間の分布をみていけば、家をもつのにも辛いものがあることが読みとれる。まさに、サラリーマンとその家族の居住環境とは通勤時間あるいは痛勤のうえに成り立っているといえる。そうして、総合職の通勤時間が４０歳代では、２０歳代あるいは３０歳代にくらべてピークが２０分も長いところにある。さらに、居住年数別の通勤時間の分布をみれば、住居取得がまともにいわゆるバブル経済のあおりを受けたことが読みとれる。また、通勤時間が長くなればそれは確実に負担として感じるものの割合が増えていくことも示しえた。

通勤時間が問題であるにも関わらず、かなり早くから出社しているものが多いことも分かった。早く出てくる理由の最大のものが「混雑をさける」であってみれば、通勤がまた痛勤であることが、なおのことよく分かる。実際、「通勤途上で感じる困難・迷惑・不快」のなかの最たるものが「乗り物の混雑」なのだった。その回答比率は、混雑をさけるために早出をするものもいるなかでの数字なのだ。乗り物の混雑が相当なものであることは、東京の朝の通勤時間の電車に乗ってみれば分かるというものだが、そのことが、通勤者によって切実に受け取られているということが示せたことになる。それにしても、混雑を避けるために通勤者はさらに早く家をでていることになる。早く出てきても、会社でそれなりに時間は有効に使われていることもまた示された。

退社時刻はやはりというべきか、総合職の方がおそい。それはグラフに明瞭に読みとれる。そうして、退社時刻は通勤時間の長いものにはそう遅いものはいない。当然といえば当然だろうが、家が遠いと遅くまで頑張りたいときに口惜しいものがあることが示せた。

睡眠時間は、まずまずの分布というべきだろうか。しかし、決して十分とはいえないだろう。睡眠時間については、職種によって分けてみても大差はない。逆にいえば、退社時刻の遅い総合職はそれだけ寝るまでの家での時間が短いことになる。あるいは、それを短くしてでも睡眠時間を確保しているということになる。

疲労感を感じるものの比率は、職種あるいは総合職における年齢に関係しない。そうして、その疲労感がどこから来るかについても、職種あるいは総合職における年齢に関係しない。疲労感に関しては極めて民主的だ。想定される体力や仕事の質の違いを考えれば、そうして、データで示した退社時刻の差を思い出せば、むしろ奇妙でさえある。

通勤時間が半分になったとしたら、空いた時間をどう使うか。その問に対する答も、職種によってそう違うわけではない。既婚者の多い総合職においても「子供と」も含めた家族との団らんの比率が決して高くはないのが特徴だといえよう。要するに、ほとんどのものが、総合職であろうと事務職であろうと「空いた時間」ができたとしたら「自分のため」に使うというのだ。

さて、入社時と同じ家にいまも住んでいるものは、多くは「通勤時間は負担にならないと思った」か「考えなかった」という。しかし、「負担になると思った」にもかかわらずというものが、14%いることを重く考えるべきなのだろう。

入社後に家を変えたものが住宅選択の際に考慮したことの最大のことが値段、続いて通勤時間である。端的に値段と通勤時間のトレードオフ、つまりあっちたてればこっちたたず、なのだ。このことは、住み替えを具体的に計画しているものにおいても、ほぼ同じであって、高い住宅と遠い通勤が通勤者の悩みのたねとわかる。居住環境の問題だといっても、保健性や快適性あるいは周辺の利便性、言い換えればいわゆる生活環境だけをいいたててもはじまらないことが分かろうというものだ。

職場で・通勤途上で・自宅での「迷惑・不快・気になる音」を聞いてみた。その結果、職場では職種そうして総合職の年齢差によって、音種に対する感受性がかなり違うことを指摘できた。また、会社人間が街宣車の音に敏感なことが分かった。

通勤途上では、「ウォークマン類」が大きな比率で回答される。調査時と通勤車内の音風景も変わって、いま調査すれば「ケータイ」が多く選ばれることになりそうだ。携帯電話の車内利用を遠慮せよというのは、そういう意味で多分妥当なのだろう。あるいは、喫煙車よろしくケータイ車を導入すべきだろうか。車中にわざわざ外部からの刺激を持ち込むものがおり、それを厭うものもいるということになる。鞍上と車中はものごとを考えるのに絶好の場だったろうに、車中の混雑のこともあり、その機能は確実に失われつつあるのだろうか。通勤途上の迷惑・不快・気になる音では、「駅などのアナウンス」「発車ベル」に総合職の年齢層の間で感受性の差が見いだされた。「電車の走行音」を指摘するものの比率は決して高くはない。

自宅においての迷惑・不快・気になる音としては、「暴走族」が属性にかかわらず圧倒的に比率が高い。また、音種によっては、総合職の年齢層の間で差がみられるものがある。

このようなことから、サウンドスケープを考えるときに、コミュニティの成り立ちようのみならず、年齢差ということも大いに考慮すべきであることが示されたといえよう。また、「迷惑・不快・気になる音」が、決して音の物理的なレベルの問題ではないことが、いまさらながら遺憾なく示されたといえる。

職場における環境といえば、ここで分析したような都心のオフィスのなかにおいて、会話の妨害になるような音や身体的健康に影響するようなレベルの空気の汚れはあまりありそうもなく、それは仕事そのものから来るストレスが重要なものなのだろう。最近は景気の長期的低迷にともなう企業の経営条件の厳しさのゆえもあって、職場でのストレスが一層問題になっている[5]。仕事のうえのストレスとして、労働時間そのものならば、この報告書でも検討したように、ある程度アンケート調査で把握できるとしても、その質あるいは人間関係からくるストレスについては、カウンセラーや心理学専門家による面談を通してでないとある程度以上の認識には至らないであろう。それにしても、労働時間の長さが

原因となる職場のストレスならば、労働時間を所与とできるかぎりにおいては、通勤時間が短ければ、自宅での休養の時間がそれだけ長くとれるはずである。その意味でも、さきの住宅選択の際の値段と通勤時間とのトレードオフという問題が関わってくる。もっとも、通勤中の気分転換ないしは通勤途上の騒音や雑然たる刺激による意識の隠蔽[6]ということも考えにいれるべきであり、そう単純ではあるまい。そのことは、まっすぐ帰宅すればよさそうなところを、一杯飲んでからでないと気がすまないということを考えても分かる。通勤時間は短ければ必ずよいというものでもない。仕事のストレスにはそういう面もあろう。一筋縄ではいかない。

東京圏の通勤電車の運行状況については、路線別の記述も含む著作がある[7]。また、通勤におけるストレスの一般的な議論が、Koslowsky et al.[8]により与えられており、参考になろう。

さて、調査法の問題だが、この報告では選択肢式の設問に対する回答の分析を進めて、その結果について解釈したが、同じ主題についてでも自由記述式の調査票によれば、かなり違った結果が得られたかもしれない[9]。たとえば、職場における迷惑・不快・気になる音は何かという質問では、それは大いにありそうなことと考えられる。いずれにしても、選択肢式の調査結果と、自由記述式のそれとでは、どちらが正しいというものではない。問題になるのはその結果の解釈の仕方を別々にして、誤らないようにしなければならないということだといえる。

おわりに

住居の環境の質を、その住居のあるところでの保健性や快適性あるいはその近隣の利便性を問うだけ、あるいはその住居のあるコミュニティの成り立ちに目を向けるだけでは不十分だろう、いいかえれば、先立つものを想定外においたないものねだりの議論か、持てる者のための環境談義にしかならないだろうと考え、職場と住居からそこに至るあいだの通勤途上とを問題にした調査を試みた。

結果は、仕事すなわち職場とそこへの通勤とを考慮したとき、通勤者にとっての望ましい環境が、都市の膨張と地価の高騰とによってなかなか手の届きにくいものになっていることが如実に示された。

それは、分かっていてどうしようもないこととして触れられないでいることでもあるだろうが、最近あらためて大都市部への公共投資比率の低さが指摘されていることからもうかがえるように、ある程度は手を打つ余地はあったことではないだろうか。

この報告は調査から大分たってしまってから、漸くまとめることができた。遅滞はひとえに報告者の責任であるが、研究課題をたくさん抱えざるをえなかった当今の環境問題の多様化と深刻化の影響がなかったとはいえない。最近、「地方自治の時代」ということを聞くようになったが、我々が自分たちの足下をみつめて生活のありようを考えるうえで、この報告はなにがしかの役にはたつだろうと思う。

ご多忙中にも関わらず、特別のご配慮を下さって調査にご協力いただき、またご回答を賜った当該金融機関の諸賢に深甚の謝意を表し、報告の遅延を詫びたい。また、この報告を纏めるにあたって、回答データの入力・集計・図表化はすべて近藤華子(はるこ)氏のご尽力によったことに感謝します。

引　用　文　献

1) 宮崎義一(1992)：複合不況　ポスト・バブルの処方箋を求めて，中公新書、東京，104-109.

2) 小此木啓吾（1986)：家庭のない家族の時代，集英社文庫，東京，267p.（初出，1983).

3) 須賀伸介・大井　紘・近藤美則・宮本定明(1994)：自由記述データ解析による都市住宅地での公害苦情に関する研究，環境科学会誌，Vol. 7，No. 3，177-192.

4) 大井　紘・近藤美則・須賀伸介・平松幸三(1994)：自治体への公害苦情申し立て行動の分析とその近隣公害現象との関係、国立環境研究所研究報告，第132号，71-81.

5) Alexandra Harney（2000）：Firms turn to counseling to fight workplace stress, The Japan Times 3rd edition Aug. 19.

6) 大井　紘(2000)：思想としてのサウンドスケープ，東京家政学院筑波女子大学紀要，第４集，pp. (23)-(32).

7) 川島令三(1990)：新東京圏通勤電車事情大研究，草思社，　東京，310p.

8) Meni Koslowsky, Avraham N. Kluger and Morderhai Reich(1995): Commuting Stress Causes, Effects, and Methods fof Coping, Plenum Press, New York, 232p.

9) 安藤元夫・広瀬智士・厚井弘志・金城　巌・奥田孝史・大井　紘(1995)：自由記述法と選択肢法による音環境意識の調査の比較，日本音響学会平成７年度秋季研究発表会講演論文集，731-732.

【付　　録】

調　査　票

次ページ以下に、使用した調査票の全容を示す。個別の主題ごとに設問の仕方は第2章「解析と解釈」に示しているが、回答者がどういう形で質問をされたのかの全体像が示された方がよいからである。

なお、ここに示すものは実際の調査票のカメラ撮りのコピーではなく磁気ファイルから起こしたものであり、ワードプロセッサのヴァージョンが変わっているため、フォントや罫線位置や記号が元の調査票とは若干異なるものとなっている。また、実際の調査票では、それ自身のノンブルが入っていたが、ここでは省略し、報告書のノンブルを入れている。

（調査対象金融機関名）　　回答者コード

都心通勤に関する実態調査

＜調　査　票＞

調査について

この調査は、都市環境を考えるときに住宅地、都心商業地というように対象を個別にみていくのではなく、住居・通勤・勤務先を一体としてとらえて都市環境の問題を考えていこうというものです。

ご回答いただきましたことにつきましては、プライバシーなどに関してご迷惑をおかけすることはございません。お名前はご記入いただきませんが、ご記入いただきました個々の内容についても、当研究所の調査担当者以外には知らされることはございません。

ご多忙中のところ誠に恐縮ですが、なにとぞ調査の趣旨をご理解いただきまして、お尋ねいたしますことに、ご回答をよせられますようお願いいたします。

環境庁　国立環境研究所
社会環境システム部
環境計画研究室
室　長　大井　紘
情報解析研究室
主任研究員　須賀　伸介

お　願　い

○　同封の返信用封筒にいれて、ご返送なさって下さい。

○　調査内容に関するお問い合わせは下記にご連絡下さい。

記

環境庁　国立環境研究所　社会環境システム部
環境計画研究室　大井　紘
〒305　茨城県つくば市小野川16-2
tel.　0298-51-6111 内線412

Ⅰ．あなたと、そのご家族、お住まいについてお尋ねします。

《まず、あなたご自身のことについてお伺いします。》

1)　あなたの所属している部の名称をお書き下さい。
（秘書室、あるいは融資事務センターの方は、その名称）
名称［　　］

以下でお尋ねすることについては、あてはまるものに○印をおつけ下さい。

2)　あなたの年齢

1．20歳未満　　2．20歳代　　3．30歳代
4．40歳代　　5．50歳代　　6．60歳以上

3)　あなたの性別

1．　男　　2．　女

4)　あなたは入社してから

1．1年未満　　2．1年～5年未満　　3．5年～10年未満
4．10年～20年未満　　5．20年～30年未満　　6．30年以上

5)　あなたの社での職種は

1．総合職　　2．業務職　　3．事務職

《つぎに、あなたとご家族のことについてお伺いします。》

6)　あなたの結婚歴は

1．未婚　　2．既婚

7) あなたが一緒に住んでおられるご家族の数は（あなたも含めて）

1．1人　　2．2人　　3．3人
4．4人　　5．5人　　6．6人以上

8) あなたの一緒に住んでおられるお子様の人数は

1．1人　　2．2人　　3．3人
4．4人　　5．5人以上　　6．な　し

9) あなたは親御さんとご一緒にお住まいですか

1．自分の親　　2．配偶者の親　　3．親との同居なし

《今度は、あなたのお住まいについて伺います。いま、住んでおられる家についてお答えください。》

10) 今あなたの住んでおられる家はどこにありますか。あてはまるものに○印をつけ、空欄にご記入ください。

1．［東京都区部、横浜市、川崎市、千葉市にお住まいの方］
東京都、横浜市
区
川崎市、千葉市
2．［その他の市にお住まいの方］
都県　　市
3．［町または村にお住まいの方］
都県　　郡　　町村

11) いま住んでおられる家に移られてから、何年になりますか。

1．1年未満　　2．1年～5年未満　　3．5年～10年未満
4．10年～20年未満　　5．20年～30年未満　　6．30年以上

12) いま住んでおられる家はどれにあたりますか。

1．持　ち　家

右のどれであるかに ○印をおつけ下さい

a)あなた本人のもの
b)あなたの配偶者のもの
c)あなたの親のもの
d)あなたの配偶者の親のもの
e)その他（　　）

2．社　　宅
3．公営・公社・公団などの借家
4．民間借家（アパート・借間も含む）
5．その他（　　）

13) いま住んでおられる家の建て方は

1．一戸建て
2．共同住宅（アパート・マンション）
3．テラスハウスに類するもの
4．店舗・事業所つき住宅
5．その他（　　）

14) 今お住まいの家と別に家をお持ちですか。あてはまるものにはいくつでも○印をおつけ下さい。

1．別荘のような保養のためのもの
2．居住のための家を他の地方に
3．居住のための家を今の通勤圏内に
4．通勤の利便の補助のためのもの（ワンルーム・マンションなど）
5．その他（　　）
6．持　っ　て　い　な　い

Ⅱ．通勤の様子と健康に関わることをお尋ねします。

《まず、通勤の様子についてお聞きします。》

1)　片道の所要時間は［ドア・ツー・ドア］

［　　］時間［　　］分　　（記入例：［1］時間［10］分、［0］時間［50］分）

2)　通勤経路は（記入例を参考に、路線と乗り換え駅をお書き下さい。）

記入例1：千代田線（我孫子－大手町）

2：バ　　ス（自宅付近－田町）J　R（田町－東京）

3：井の頭線（久 我 山－渋谷）銀座線（渋谷－赤坂見附）

丸の内線（赤坂見附－大手町）

3)　出社時間（最近1か月の平均）

［　　］時［　　］分　　（記入例：［8］時［10］分、［8］時［40］分）

4)　あなたは混雑を避けるなど、意識的に始業時間より早く出てこられていますか。もしそうであればその理由を下から選び、あてはまるものにいくつでも○印をおつけ下さい。

1．乗り物のダイヤ、接続の関係

2．乗り物の混雑を避けるため

3．乗り物の遅れを見込むため

4．始業前に会社で時間が必要だから

5．朝早く出るのが好きだから

6．その他（　　）

7．意識的に早く来ているわけではない

5) 出社されてから始業時間までをどう過ごされますか。複数に○印をおつけになって結構です。
（上の4)で７に○印をおつけになった方は飛ばしてさい。）

1．新聞・雑誌を読む
2．お茶を飲む・くつろぐ
3．着替えをする・化粧をする
4．その他（　　）

6) 退社時間（最近１か月の平均）
[　　]時[　　]分　（記入例：[７]時[30]分、[８]時[00]分）

《次に、健康に関することをお伺いします。》

7) 疲労感を覚えますか。
1．いつも感じる　2．ときどき感じる　3．感じない

8) 上で疲労感について３以外に○印をつけられた方にお聞きします。
疲労の原因は次のどれだと思いますか。
1．仕事の忙しいとき　2．出張のとき
3．通勤のせい　4．その他（　　）

9) 睡眠時間は、ウイークデイには一日につき
[　　]時間[　　]分　（記入例：[６]時間[30]分、[６]時間[00]分）

☆　つぎのⅢとⅣとは、どちらかをお答えいただくことになります。

Ⅲ．今の家に住んでいて入社された方に、入社のときの判断についてお尋ねします。あてはまるものに○印をおつけください。
（そうでない方は、次のページのⅣへお進み下さい。）

1)　入社のとき、通勤時間のことをどのように考えましたか。

1．通勤時間の長さは負担になると思ったが、会社を選んだ。
2．通勤時間の長さは負担にならないと思った。
3．通勤時間の長さのことは考えなかった。
4．その他（　　）

2)　入社後の住まいについて。

1．変えるつもりは入社時からなかった。
2．住まいはあとから変えてもいいと思った。
3．住まいはあとから変えるつもりでいた。

その他、入社時に住まいと通勤について考慮されたことがあれば、どんなことでもお書き下さい。
上にお答えになったことと重複しても結構です。

このページでお答えいただいた方は、1ページ飛ばしてⅤへお進み下さい。

☆　前ページのⅢを飛ばされた方にお伺いすることになります。

Ⅳ．入社後に、今お住まいの家に入られた方にお尋ねします。あてはまるものに○印をおつけください。

1)　その家に決められるときは、どんなことを考慮されましたか。

1．次の理由で、場所の選択の問題ではなかった。

右のどれであるかにも○印をおつけ下さい。

a)社宅である　　b)相続した
c)配偶者の家である
d)親（自分の、配偶者の）と同居した
e)その他（　　）

2．次の点を考慮した。

右のどれであるかにも○印をおつけ下さい。なお、最も重視したことには、◎印をおつけください。

a)．値　　段　　b)．家屋の広さ
c)．庭のあること、その広さ
d)．一戸建てか共同住宅か
e)．通勤時間　　f)．子供の学校
g)．配偶者の仕事　　h)．親の住まいのこと
i)．それまでの地域とのつながり
j)．周辺の利便　　k)．周辺が静かなこと
l)．周辺の空気がきれいなこと

その他、考慮されたことがあれば、どんなことでもお書きください。
上にお答えになったことと、重複しても結構です。

V．家の住み替えについてお尋ねします。あてはまるものに、○印をおつけ下さい。

1)　今の家の住み替えについて

1．具体的に計画している。

2．住み替えを望むが、具体的には考えていない。

3．住み替えは考えていない。

2)　上の質問で1（具体的に計画）に○印をつけられた方にお伺いします。計画するにあたって、考慮していることがあれば、いくつでも○印をおつけ下さい。最も重視していることには、◎印をおつけください。

1．値　　段
2．家屋の広さ
3．庭のあること、その広さ
4．一戸建てか共同住宅か
5．通勤時間
6．子供の学校
7．配偶者の仕事
8．親の住まいのこと
9．これまでの地域とのつながり
10．周辺の利便
11．周辺の静かなこと
12．周辺の空気がきれいなこと
13．その他（　　）

その他、ご自分の家の住み替えについて、ご感想、ご意見を何でもお書き下さい。上のお答えと重複しても結構です。

Ⅵ．通勤に関係するご意見、ご感想をうかがいます。2)の他は、あてはまるものに○印をつけて下さい。

1)　いま現在、通勤時間は負担ですか。

1．負担である　　2．すこし（ときどき）負担である

3．負担でない　　4．その他（　　）

2)　あなたにとって許容できる通勤時間はどのくらいですか。

[　　]時間[　　]分　　（記入例：[1]時間[10]分、[0]時間[50]分）

3)　もし、いまの通勤時間が半分になったら、空いた時間を何に使いますか。

1．睡眠　　2．くつろぐ　　3．テレビをみる　　4．本や新聞を読む

5．家族との団らん　　6．子供と遊ぶ　　7．子供の教育

8．けいこ事・趣味　　9．地域社会での活動　　10．何もしない

11．その他（　　）

4)　通勤に関することで感じる、困難、迷惑、不快なこと、気になることはありますか。複数の○印をおつけになって結構です。

1．乗り物の混雑　　2．乗客のマナー　　3．いやらしい乗客

4．酔っぱらい　　5．乗り物の運転本数　　6．終電の時間

7．終バスの時間　　8．夏のクーラーのない車両　　9．乗り換え

10．その他

上にお書きのことと重なっても結構です、お書き下さい。

Ⅶ. 音について、迷惑なこと、不快なこと、気になることをお尋ねします。
あてはまるものには、いくつでも○印をおつけ下さい。

1) 職場にいて、迷惑だったり、不快だったり、気になったりする音は

1．話し声（電話以外）　2．電話の声　3．電話のベル
4．ファックスの音　5．パソコンのプリンタ　6．その他の事務機
7．足　音　8．車の走行音　9．車のクラクション
10．街宣車（選挙以外）　11．選挙宣伝車
12．その他

2) 通勤途上で、迷惑だったり、不快だったり、気になったりする音は

1．電車の走行音　2．バスの走行音　3．駅などのアナウンス
4．発車ベル　5．ウォークマン類
6．その他

3) 自宅にいて‥、迷惑だったり、不快だったり、気になったりする音は

1．隣家の話し声　2．隣家のテレビ、ステレオ　3．隣家の楽器
4．隣家の電話　5．犬の鳴き声　6．暴走族
7．車の走行音　8．電車の走行音　9．飛行機
10．路上の話し声　11．隣家のクーラー　12．近所の作業音
13．その他

Ⅷ．環境問題に関するご感想、ご意見をお書き下さい。いままでお尋ねしてきたことと関係ないと思われることについてでも結構です。

Ⅸ．この調査について、どのようなご感想をお持ちになりましたか。どんなことでも結構ですから、お聞かせ下さい。

ありがとうございました。

RESEARCH REPORT FROM
THE NATIONAL INSTITUTE FOR ENVIRONMENTAL STUDIES, JAPAN
No. 156
国立環境研究所研究報告　第156号
(R-156-2000)

【平成12年９月４日編集委員会受付】
【平成12年10月３日編集委員会受理】
平成12年11月６日発行

発　行　環境庁　国立環境研究所
〒305-0053　茨城県つくば市小野川16番2
電 話　0298－50－2343 (ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ)

印　刷　アサヒビジネス株式会社
住 所　茨城県土浦市虫掛3317－2

Published by the National Institute for Environmental Studies
16-2 Onogawa, Tsukuba, Ibaraki 305-0053 Japan
Nov 2000

本報告書は再生紙を使用しています。